

# 志士たちの詩想

有馬卓也著



# 志士たちの詩想

有馬卓也著



広島大学出版会



# 志士たちの詩想

## 目次

序章	志士の詩想への視角	1
第1章	雲井龍雄の詩想 — 慷慨と隠逸 —	23
第2章	高杉晋作の詩想 — 「狂」と「偷生」 —	49
第3章	西郷隆盛の詩想 — みずからへのまなざし —	75
第4章	水戸志士の咆哮 — 狂拳をささえるもの —	109
第5章	武市瑞山の詩想 — 権道 是か非か —	135
第6章	自由民権運動下の雲井龍雄の側面 — 『土陽新聞』掲載記事をめぐって —	151
第7章	雲井龍雄と「棄児行」 — 杜鵑解釈をめぐって —	179
第8章	陸羯南の詩想 — 賈生のところ —	195
第9章	安井小太郎『明治中興詩文』について	209
終章		237
あとがき		245
主な参考文献		247
初出一覧		254



## 序章 志士の詩想への視角

### はじめに

『周易』の中に隱逸を暗示する「遯」という名の卦がある。陰（--）陽（—）の爻で示せば「䷗」となり、これは陰爻（小人）が下から上にはびこり始め、陽爻（大人）が上に逃げ隠れる様を表現している。『後漢書』逸民列伝は冒頭部にこの卦を引いて、「易に称す、遯の時義、大なるかな、と」と記述しているが、古代以来、中国ではこの遯卦は變動期を示す語として使用されてきた。すなわちこの卦は小人が大人の世界を席捲し始め、世の混乱や變動、崩壊を暗示する。古くは殷の三仁や伯夷叔斉の故事で有名な殷周革命の時期、孔子の生きた春秋末期、そして前漢末の王莽の王位篡奪による新王朝期などが、代表的な遯の時として捉えられる。

これらの歴史は『論語』や『史記』『漢書』『後漢書』等に記される所であるが、これらの漢籍を読み、今こそが遯の時として自らの生きた時代を位置づけたのが、幕末から明治維新、そして自由民権運動期を生きた日本の知識人たちであった。彼らは各藩各個ごとに多様化された正義の下で陰爻（邪悪）たる小人を設定する。したがって邪悪とされるものもさまざまな様相を呈してくることは言うまでもない。さまざまな対立構造を含む中で諸問題が重層化していく混沌とした時代、それが幕末・明治期であった。本書はかくの如き變動期という遯の時代を生きた幕末・明治期の知識人たちが、どのような形で時代を、そして自らを位置づけていたのか、その一端を中国文化の影響が最も色濃く出る漢詩文を通して垣間見ようというものである。

## 一 縦軸と横軸の設定

まず変動期という語句について筆者なりの解釈を施しておかねばならない。政治的・経済的・文化的レベルにおける変動の場合、主に政府の対内外的諸政策が、内外の累積的・突発的諸条件によって断層を生じ始め、それまでに通用していた政治・経済・文化等の知識や理念、常識が通用しなくなる、既成のものでは対応していけなくなる、そういつた新しい時代への過渡期を示すものと考ええる。つまり秩序の存在形態そのものが根本部分から変動(崩壊)し、危機意識のもとに新たな現実に適応した秩序が模索される時代と言える。

そういう意味で幕末維新时期を一つの変動期、変革期として捉えることはさしたる異論もないと思うが、では具体的にいつからいつまでをそれとして視野の中に入れるかとなると、研究者の視座や研究対象、或は研究方法に依ってかなりの差異が生じてくる。そこで筆者が、この変動期を具体的にどの様に設定するかという問題から始めたい。

### (1) 縦軸(時間軸)の設定

まず変動期の開始時期の設定である。幕末にあつて外国船がしきりに日本近海へと到り始め、異国船打ち払い令がでたのが一八二五年(文政八年)。そしてそれによつて国内の知識人たちの意識に少しずつ変化が見られるようになる。つまり変動、すなわち既存の秩序の崩壊が認識され始めたのである。たとえば各藩で様々な改革が始まり、学者たちの目が実学・蘭学にも向き始める。加えて飢饉などによる民衆の不满がつのり始める。これらの要因が一気に表出したのがまさに天保年間である。水戸藩では徳川斉昭が(天保元年)、長州藩では村田清風が(天保三年)藩政改革に乗り出し、熊本藩では横井小楠が実学党を結成して(天保一年)いる。また緒方洪庵が大坂に蘭学塾(適々斎塾)を開いた(天保九年)他、渡辺華山、高野長英らの蘭学者が世に出たのもこの時期である。そしてこれらの蘭学者が投獄された所謂蜜社の獄が天保一〇年。さらには不満を持った庶民たちの打ちこわしや一揆、これらをリードしていたのは他ならぬ知識人であり、その代表として大塩平八郎の乱(天保八年)などが挙げられる。

本書は太平であった江戸の世に累積した諸問題が一気に突出し、それまで訓詁学や考証学、或は抽象的な理や気の学、或は中国の歴史や詩文にいそしんでいた学者や知識人達に、より現実的な問題が押し寄せ始めたこの文政・天保年間（一八一九～四三）あたりを研究対象時期の出発点としている。この時期になると昔ながらの学問や読書のみならず、儒学者や旧守的な知識人たちは「迂儒」\*と称されるようになり、問題意識が眼前の「経世済民」へと移っていく。この「迂儒」とは将に変動していく時勢の中で、依然として旧体制にしがみつこうとする、今では役たたずの、それでも権力だけはもち続けている知識人達に外ならない。

そして幕末維新期を経た後、明治六年政変、所謂征韓論論争を経て自由民権運動が本格化し、士族反乱の終焉とともに顕在化していく。運動は政府の弾圧の中で新聞や演説会、或は演劇・演芸といった多種様々な方面で展開される一方、福島事件（明治一五年）や秩父事件（明治一七年）などの騒動を巻き起こし、とりあえず大日本帝国憲法発布（明治二二年）、第一回帝国議会（明治二三年）などという形でひとまずのまとまりを見せる。この明治二〇年代前半を筆者の「変動期の知識人」研究の到着点とする。もちろんこの後も変動は更に続くのだが、本研究がここで句切りをつけるのはこの縦軸に対する横軸の設定に基づく。

## (2) 横軸（構造軸）の設定

次に横軸、すなわち何処に視座をすえてこの文政・天保年間から明治二〇年代前半という約百年弱の時代を見るかという問題に移りたい。

さてこの時期を知識人（漢学者）に限定して見て行くわけであるが、彼らは漢学の知識を共通の基盤として持っていた。彼らは幼い頃から藩校や私塾に学び、中国古典の教養を身につけて行く。その教養が経史子集の全てに及ぶものであった事は当時の藩校や個人の蔵書目録を見れば一目瞭然である。当時を生きた知識人のすべてがこれら漢籍の教養を共通基盤として有しており、蘭学や実学は未だ主流とは言えなかった。加えて彼らは地方の諸藩出身の者でも江戸や大坂に遊学し、共通の師に学んだり、或は帰藩後に塾を開いて地元の若者達に師から学んだ事を



教授したりするから、そのネットワークはかなり広範囲に及ぶ。

たとえば、思わぬ文献で思わぬ人物の名が出て来ることがしばしばある。阿波藩の岡本韋庵<sup>\*11</sup>（一八三九～一九〇四）関係で二、三の例を挙げれば、彼の自伝には京都で米沢の雲井龍雄（一八四四～七〇）に会ったことが記されている。また仙台の阿部黙齋（一八二四～九〇）の詩集には岡本韋庵の序がついている。黙齋は維新後北海道を遍歴した知識人であるから、そこで北方を調査中の岡本韋庵と出会い知音となったものと思われる。さらには樽井藤吉（一八五〇～一九二二）の『大東合邦論』にも岡本韋庵が序文を寄せていた。これはその一例にすぎないが、これらのネットワークが当時の知識人達を各藩各主義主張で分類する以前に、同時代人として把握し、その特質を明らかにせねばならないことの必要性を如実に物語っている。

さて、先に変動期の終わりを明治二〇年前半に設定したが、それはその時期に到ると知識人達が必ずしも中国古典の教養を共通基盤として持たなくなっていくという事情に依る。知識人層にも新しい世代が入り込んで来ており、それまでとは同じ座標軸で論じられなくなってくる。つまり、維新後に西洋から流入してきた新知識を中心とし、中国古典は二次的なものとする知識人が増えてくるのである。たとえば土佐の植木枝盛<sup>\*14</sup>（一八五七～九一）などがその初期に於ける代表格と言え、彼の書いた文には西洋の知識や歴史等がふんだんに盛り込まれている。また津軽出身の新聞人、陸羯南<sup>\*15</sup>（一八五七～一九〇七）なども同様の範疇に入るのである。同時に彼らは、北村透谷<sup>\*16</sup>（一八六八～九四）・杉浦重剛（一八五五～一九二四）・徳富蘇峰<sup>\*17</sup>（一八六三～一九五七）らと共に、この変動期の文化をまとめる役割を担った存在でもあり、この変動期とりわけ維新时期を生き、そして死んでいった知識人（志士）達の評価・意義付けが、これらの知識人達からなされていくのである。

ところでこの時期を生き、中国古典を共通教養として持つ知識人と一口に言っても、生まれた家の格、育った地域、或は主義主張などによって様々な対立構造が生じる。同時代人としての彼らの全体的特質を把握するにしても、この対立構造を念頭から外すことはできない。先の時代の縦軸に対して、この対立構造を横軸とする。たとえばどの様な対立が見えるかというと、基本的なものとして次のようなものがあげられる。

まず、対象とする知識人が西南諸藩出身であるか、東北諸藩出身であるかということが大きな分岐点となる。この区分は当時の経済的な区分でもある。温暖で農業や林業などを始めとする多様な経済手段に恵まれる西南諸藩は、幕末期に到ると幕府を介さない独自の経済政策を展開して行く。これに対し、ほぼ稲作による経済手段しか持たない東北側は必然的に経済的援助を幕府に頼らざるを得ず、幕府抜きに経済的自立など考えられない状態であった。戊辰戦争が圧倒的火力を誇る西南側の勝利に終わったことはこの経済力の差に依るところが極めて大であった。<sup>\*18</sup> 加えて、この西南・東北の対立にさらに幕府の知識人が入ってくることは言うまでもない。

次に対象とする知識人が上士であるか、或は下士であるかという問題がある。これは知識そのものには大差はなくとも、知識が発現する場合に大きな差異を生み出す。たとえば幕末に於て語られる尊皇攘夷、佐幕開明、公武政体などのさまざまな主義主張の相違にはこの上士下士の相違が大きな影を残す。

さらに明治六年以降は政府と不平士族という対立構造が顕在化する。もちろんこれは明治初年度からすでに存在していたものだが、不平士族は先の戊辰戦争で敗北した東北諸藩の士族に加えて、新政府に不満を持つ西南諸藩の士族、中心は土佐藩であるが、かつて勝組であった彼らが今や負組として運動に参加し、やがてはその不平士族が平民をも呑込んで民権運動を展開して行く。事実、代表的な不平士族の反乱は長州が口火をきっており、二番目に当たる雲井龍雄陰謀事件以外はすべて西南諸藩によるものである。この構造の中で興味深いのが、維新時においては勝組であったにもかかわらず、明治六年政変以降負組に転じた知識人たちの思惟構造である。

以上簡単に三点ほど挙げたが、これらの対立構造が重層的に先の設定した縦軸の中で展開して行く。本書は上述した縦軸横軸を念頭において志士たちが残した漢詩を個別に見ていきながら、同時代人であった彼らがどのような共通する詩想を持っていたかを論じていく。

## 二 漢詩に見える諸モチーフからの検証

当時の知識人達の漢詩を見るに、教養の基盤が共通するだけに、実に興味深い現象が見られる。それは中国古典を典故としつつ、自らの詩想を表現するという現象である。それも詠み込まれるモチーフの共通性が極めて高い。

つまり当時の知識人たちは、中国古典の思想・文学・歴史を共通語としても有し、その枠の中で相互の詩想を理解し、心情を認識し合っていたということである。もちろん当時の知識人すべてがこの中国古典を典故として詩作を行っていたというわけではない。したがって彼らをすべて横一線に並べて概観することはできないが、おしなべてその傾向があることも否定できない。

そこで以下、代表的な詩作上のモチーフをいくつか挙げて、そのモチーフごとにいくつかの詩を例示してみたい。

### (1) 文天祥

まず、とりわけ幕末の志士たちを理解する際に見落としてはならないのが文天祥（一二三六―八一）である。志士たちは主に浅見綱齋の『聖賢遺言』に基づいて文天祥に接していたものと思われる。彼は宋の最末期、元軍に抗し続けたが捕らわれの身となり、彼を帰順させようとする元軍に屈することなく処刑された人物で、自らの節義を全うしたとして日本でも有名な一人であり、不屈の精神の象徴として詠まれる事が多い。特に彼の「正気之歌」はその序文もあわせて知識人達の志気を鼓舞するものとしてよく典故の対象となった。六十句にも渡る長古詩であるから全文を掲載する事はしないが、

当其貫日月 其の日月を貫ぬくに当たっては

生死安足論 生死安ぞ論ずるに足らんや

あるいは、

鼎鑊甘如飴 鼎鑊 甘きこと飴の如し  
求之不可得 之を求むれども得べからず

などの詩句が注目される部分である。周知の如く、水戸藩などに於ては藤田東湖（一八〇六～五五）を中心に文天祥の生様や「正氣之歌」が、当時の知識人達の指標として論じられていた。

以下、いくつか文天祥、或は「正氣之歌」に関わる詩を見てみたい。まずは米沢藩の雲井龍雄が慶応三（一八六七）年、京都鴨川の料亭で長州藩広沢真臣（一八三二～七一）に対して贈ったものである。

蘭氏元全趙 蘭氏 元を全くす

荊軻曾許燕 荊軻 曾て燕に許す

輸誠期貫日 誠を輸して 貫日を期し

決死誓回天 死を決して回天を誓ふ

皇道與花落 皇道 花と与に落ち

人心趁水遷 人心 水を趁おひて遷る

聽鵬邵子淚 鵬を聽く 邵子の淚

頌橘屈生篇 橘を頌す 屈生の篇

鼎鑊吾甘矣 鼎鑊 吾甘んず

塩梅君旃勉 塩梅 君 これ勉めよ

欲知丈夫志 丈夫の志を知らんと欲せば

請読獲麟編 請ふ読め 獲麟の編

(雲井龍雄「鴨子広沢岡松林武市伴諸君、席上贈広沢君」慶応三年)

四句目及び九句目の「正氣之歌」のみならず、実に多種多様な中国古典からの引用典故に基づく詩である。次も文天祥をモチーフとした雲井の詩である。

輸誠或不回天意 誠を輸すも或は天意を回せざらん

守節只須舍吾生 守節 只だ 須らく吾が生を舍つべし

脱却人間多少累 脱却す 人間 多少の累

横空正氣浩然盈 空に横たはる正氣 浩然として盈つ

(雲井龍雄「述懐」)

末尾部の「浩然」は『孟子』公孫丑上篇「吾、善く吾が浩然の氣を養ふ」によるが、文天祥自身「正氣之歌」及び序にこれを引き、「天地、正氣あり、……人に於ては浩然と曰ふ」と言っている。

次に長州藩にあつて志士達の精神的支柱として存在した吉田松陰(一八三〇〜五九)の詩を一つ示してみる。

生賦正氣歌 生きては正氣の歌を賦し

死留衣帶箴 死しては衣帶の箴を留む

生死安足論 生死 安ぞ論するに足らん

凛々不磷心 凛々たる不磷の心

(吉田松陰『縛吾集』道上詠史三十解・その二十八)

文天祥は元軍に捕えられ三年の土牢生活の後、燕京の柴市で処刑される。その際、衣帯の中に隠しておいたのが二句目の「衣帯の箴」である。

このほか吉田には「正氣之歌」に和した代表作「和文天祥正氣歌韻」もある。それは吉田が安政の大獄の時、萩から江戸へ檻送される際、檻中にて詠んだものであり、もちろん吉田の手元に「正氣之歌」があるはずもない。そのような状況の下で六十句にも及ぶ「正氣之歌」の韻に和しているからには、当然ながら「正氣之歌」を暗唱していたことになる。そして吉田の弟子の一人高杉晋作（一八三九―一八六七）には次のようなものがある。

囚室無苦為 囚室 為すに苦しむなし

拔書養良知 書を抜きて良知を養ふ

虚心而平氣 虚心にして平氣なり

書中自有師 書中 自ら師あり

讀至南宋滅 讀みて南宋の滅ぶに至り

独悲天祥節 独り天祥の節を悲しむ

臨死衣帯銘 死に臨む衣帯の銘は

使人為泣血 人をして泣血を為さしむ

爾来天下士 爾来 天下の士は

貪利不成仁 利を貪つて仁を成さず

嗟我雖愚鈍 嗟 我 愚鈍なりと雖も

要学天祥心 天祥の心を学ぶを要む

（高杉晋作「囚中作」元治元年五月十日、在秋野山獄）

これは高杉が野山の獄につながれていた際のものであるから、獄中に生きた文天祥が彼の精神的支柱として存在していたことを伺い知ることができる。換言すれば、知識人たちは獄中に捕らえられたり、敗北の淵に立たされたりした時、詩中に文天祥を詠み込んで、自らを文天祥に比し、その不屈の精神を具現化せんと試みるのである。

以上、文天祥をモチーフにした漢詩のごく一部だが、この文天祥を中心とした所謂慷慨の詩句という範疇がある。これは混迷する俗世、台頭する邪悪に対する志士達の悲憤を主たるテーマとする詩であり、この範疇に蔣相如や張良・荊軻などが入る。この範疇に属するものは概ね自らの不倒不屈の意志を表示するものとして使用される。もちろん人物に因って多少の差異はあるが、読み手が決定的な敗北感を抱くにはまだ至っていない一つの証左となる。

## (2) 遯卦と屈伸

モチーフとしては(1)であげた文天祥のグループよりも興味深いのが、この『周易』の遯卦と屈伸に基づくものである。それは時勢が全く自らの意にそぐわない状況に流れ、挫折し敗北感を味わった際に登場するものであり、先の文天祥の不倒不屈より読み手のボルテージが低い状況の時に登場する。

五経においてしばしば典故の対象となる『周易』だが、そこに説かれる陰陽消長の理が個人の、或は社会の盛衰に比されて引用される。繫辭下伝に「往くとは屈するなり。来るとは伸ぶるなり。屈伸、相ひ感じて利生ず。尺蠖(尺取虫)の屈するは、以て伸びんことを求むればなり。龍蛇の蟄するは、以て身を存せんとすればなり」という文があり、それは所謂「屈伸」を説くものである。つまり「屈」を敗北としてではなく、「伸」つまり飛躍のための準備期間、戦略的退歩として捉える考え方である。この「屈」の状態を示す卦が本章冒頭でも言及した「遯」になる。

まず「屈伸」をモチーフとする詩句を七つほど列挙する。

嗟汝辟性不世合 嗟 汝の辟性 世に合せず

草葉之中徒螻屈 草葉の中徒らに螻屈す  
(山田螻堂<sup>\*20</sup>「自題写真」)

病床一臥不復起 病床「たゞ臥せば復た起きず」  
梅雨蕭蕭螻屈洞 梅雨蕭蕭として螻屈洞なり  
(山田螻堂「腰痛経旬不愈」)

天也道従屈 天や道屈に従ふ  
鳳兮歌可嘉 鳳兮の歌嘉みすべし  
(雲井龍雄「雜詩十首(その十)」元治元年)

螻伸因善屈 螻の伸ぶるは善く屈するに因る  
龍蟄豈不騰 龍の蟄する豈に騰らざらんや  
(雲井龍雄「送白山盟兄」慶応元年)

決死不后期必伸 死を決して回さず必ず伸びんことを期し  
夙因鼎螻寄斯身 夙に鼎鑊に因りて斯の身を寄す  
(雲井龍雄「素堂兄在会、詩以戒貞暴憑、歩其韻」明治二年)

俛伏出胯下 俛伏 胯下を出づ  
簀卷置厕中 簀卷 厕中に置かる



烈夫不厭屈 烈夫は屈を厭はず

隱忍成大功 隱忍して大功を成す

(吉田松陰「出獄帰国之間、雜感五十七解」その三十)

螻屈龍伸丈夫志 螻屈龍伸は丈夫の志

作奴為僕又何差 奴と作り僕と為る 又た何ぞ差かん

(高杉晋作「船中次野唯人韻」元治元年十一月一、三日玄海灘上船中)

以上七つは「屈伸」に関わるものであるが、「辟性、世に合せず」「一たび臥せば復た起きず」「天や、道、屈に従ふ」等の詩句に(1)の文天祥をモチーフとした詩には見られなかった消極的・敗者のな心情の吐露を読み取ることができる。これらは「屈伸」の「屈」に重点がおかれているものと言える。またこれとは逆に「伸」に重点がおかれる詩句もある。たとえば、雲井の「送白山盟兄」がそれにあたる。特にここでは雲井が「龍蛇の蟄するは、以て身を存せんとすればなり」とする繫辭下伝の本文を「豈に騰らざらんや」と改めて、より積極的な意味あいを「龍蟄」すなわち「屈」に付与させている部分が注目される。いずれにせよ「屈伸」がモチーフとして使用される場合、それは知識人達がひとまず自らの敗北を認め、捲土重来を期す意志表明の色合いをもつ。

次に、「屈伸」とはまた少しく異なつたニュアンスをもつ遯卦を典故とする詩句をいくつか示してみたい。

滄浪遮莫清兼濁 滄浪さもあらばあれ 清と濁と

嘉遯鳳兮有古風 嘉遯鳳兮 古風あり

(雲井龍雄「掛川寄食鈴木處士宅、借資乞衣以自給、賦之以謝」慶応四年)

危言究竟錮斯身 危言は究竟 斯の身を錮し

斗室蕭然送五句 斗室 蕭然として 五句を送る

人似籠禽無所慕 人は籠禽に似て慕ぶ所なし

心如尺蠖欲求伸 心は尺蠖の如く伸びんことを求めんと欲す

遷喬安得吹嘘力 遷喬 安ぞ吹嘘の力を得ん

負屈尤知骨肉親 負屈 尤も骨肉の親を知る

早晚能成肥遯計 早晚 能く肥遯の計を成し

間居永與碧山隣 間居 永く碧山と隣せん

(大楽源太郎「危言」)

已矣四方志 已みなん 四方の志

西山肥遯時 西山 肥遯の時

(大楽源太郎「冬日作」)

「滄浪さもあらばあれ」や「已みなん四方の志」の詩句に一目瞭然の如く、よりポルテージの低下した心情を読み取ることができる。

ここで最も興味深い点は、雲井は遯卦九五の「嘉遯」を言い、大楽<sup>\*22</sup>(一八三四く七一、西山は号)は上九の「肥遯」を言っている部分である。雲井は生涯詩中で「肥遯」を言うことはなく、また大楽も「嘉遯」を言うことはなかった。この「嘉遯」(志を正しく保つていれば世から遯することができる)と「肥遯」(何物にも煩わされることなく遯することができる)の差異の淵源は、本章の(2)で提示した様々な対立構造に因ると思われるが、今後の検討課題としたい。

(3)その他 (屈原・陶淵明・鳳兮之歌・杜鵑)

最後にその外に散見される興味深いいくつかのモチーフを紹介しておく。

まず(2)で扱った屈原や遯卦と実際に関わった者達、すなわち屈原や陶淵明、或は(2)においても見られた狂接輿の「鳳兮之歌」<sup>\*24</sup>などをモチーフとしたものがある。これらは経である『周易』そのものをモチーフとする(2)のグループの発展形であり、陰陽消長の中に埋没していった中国史上の人物に自らの生様を投影させ、直接には吐き難き心情を吐露するというものである。

殺氣襲人難自持 殺氣人を襲ひて自ら持し難し

不堪能与世推移 能く世と推移するに堪へず

(雲井龍雄「募資金於諸侯(その一)」明治三年)

壯士由来有所思 壯士由来 思ふ所あり

所思遂不與時宜 思ふ所 遂に時宜と與にせず

誰知夜々孤燈下 誰か知る 夜々 孤燈の下

空唱屈平漁父辞 空しく唱ふ 屈平 漁父の辞

(高杉晋作「書、感三首」文久元年六月七日、在萩)

弔魂思忠死 弔魂 忠死を思ふ

涕淚拭還垂 涕淚 拭ひて還垂る

汨羅一江水 汨羅 一江の水

千古万人悲 千古 万人悲しむ

（高杉晋作「囚中作、屈平以此日没旧羅、因賦之弔魂」元治元年五月五日、在萩野山獄）

以上三首は、いずれも屈原及び『楚辞』をモチーフとする。特に『楚辞』漁父に於ける漁父の「聖人は物に凝滞せず、能く世と推移す」という語に対する屈原の、俗人を「酔」とし自らを「醒」とする反発が、当時の知識人達の屈原を自らの先駆者とし、一体視するきっかけの一つとなったことは疑いようがない。また屈原が最終的には汨羅に投身したという事実が、次に取り上げる陶淵明や接輿などよりも常に死を意識していた志士達の、より大きな指標であった。したがってモチーフとしての屈原は、抗う気概の反映に外ならないのである。

赴水人餐其落英 水に赴く人は 其の落英を餐す

楚騷文字万戸声 楚騷の文字「万戸」の声

遯世者采之東籬 世を遯する者 之を東籬に采る

晋朝遺逸千古名 晋朝の遺逸 千古の名

二家忠憤事雖異 二家の忠憤 事 異なると雖も

同借此花洩不平 同に此の花を借りて不平を洩らす

（山田夔堂「木滑子恭贈菊賦謝」）

聖人觀本達 聖人の觀 本 達す

夙將成負斉 夙に成負を將て 斉しくす

在世行吾義 世に在りて吾が義を行はば

何必歌鳳兮 何ぞ必らずしも鳳兮を歌はん

（吉田松陰「縛吾集」道上詠史三十解・その八）

山田の一、二句目は屈原をさし、三、四句目は陶淵明をさして、五句目で「二家」と言っている。また吉田の最終句は接輿をさす。これらのように、陶淵明の場合、屈原に比べて心に余裕を感じさせる詩作が多いことがわかる。この外、自らを中国史上白眉の人材（管仲・藺相如・張良・荊軻など）たちに比し、対立する権力者、或は時勢を秦の始皇帝などに比しながら、詩を詠んでいく例は枚挙に暇がない。

最後に混乱の予兆としての杜鵑に言及したい。ホトトギスの属性について言及した書籍は多いが、特に『本草綱目』『華陽国志』『見聞録』等の資料から「哀切・悽惻」「将乱」「別離」「嘔血」「居他巢生子」「隱」などの属性が得られる。これらの属性が隠喩として利用され、詩想が詠み込まれていく。

次に示すのは「将乱」としての事例である。

回首蒼茫浪速城 首を回らせば 蒼茫たり浪速の城

篷窓又聴杜鵑声 篷窓 又聴く 杜鵑の声

丹心一片人知否 丹心一片 人知るや否や

不夢家郷夢帝京 家郷を夢みず 帝京を夢む

（吉村黄庵「舟到由良港」文久二年）

寺田屋事件に連座した勤王の志士吉村寅太郎（一八三七～六三）が土佐へ護送される際、淡路の由良港で詠んだものである。動きつつある時代が「杜鵑の声」によって象徴され、そこから「蒼茫」「丹心」「夢帝京」の内情をも連想せしめる形となっている。

そしてもう一つ、雲井の作として人口に膾炙された詩を示しておきたい。<sup>\*25</sup>

斯身飢斯兒不育 斯の身飢うれば 斯の兒育たず

斯兒不棄斯身飢 斯の兒棄てざれば 斯の身飢う

捨是邪不捨非邪 捨つるが是か 捨てざるは非か

人間恩愛斯心迷 人間の恩愛 斯の心迷ふ

哀愛不禁無情淚 哀愛禁せず 無情の涙

復弄兒顔多苦思 復た兒の顔を弄して 苦思多し

兒兮無命伴黃泉 兒や命なくば 黃泉よみに伴はん

兒兮有命斯心知 兒や命あらば 斯の心知らん

焦心頻屬良家救 焦心 頻りに属す 良家の救ひを

欲去不忍別離悲 去らんと欲して忍びず 別離の悲しみ

橋畔忽驚人声 橋畔 忽ち驚く 行人の声

残月一声杜鵑啼 残月 一声 杜鵑啼く

〔原正弘「棄兒行」〕

先に示した杜鵑の「哀切・悽惻」「別離」「嘔血」「居他巢生子」等の属性が盛り込まれ子を捨てる母の心情が詠まれている。もちろんこれがオーソドックスな解釈には違いないのだが、この詩全体を暗喩として、「将乱」「隠」の属性を以て解釈することもできる。その際、母と子とがそれぞれ幕府と東北諸藩、或は明治新政府と東北諸藩を象徴していることが想起せられる。多様な解釈を許容する秀詩であると考ええる。

## おわりに

これらの中国古典を典故とした数々のモチーフは、概ね自らの志の成敗の反映であるから、ここに挙げた諸例は、

まさに變動期に於てこそ登場するものである。つまり、これらの漢詩はまさしく知識人達の、とりわけ變動期（遯卦の時代）に於ける彼らの氤氳<sup>いんくん</sup>の所産に外ならないのである。主義主張は百家争鳴の様を呈しているも、幕末維新时期に於ける知識人たちに共通する知識・心情の発現である。が故に、維新时期を生きた彼らを各藩各個の枠ではなく、同時代人として包括的に看取する際の一座標軸であることは疑いあるまい。

- \* 1 『後漢書』逸民列伝に「易（遯卦象伝）称、遯之時義大矣哉。又（蠱卦上九）曰、不事王侯、高尚其事」とある。
- \* 2 殷の三仁（微子・比干・箕子）については『史記』殷本紀や『論語』微子などに詳しい記述が見られる。
- \* 3 『史記』伯夷叔齊列伝に詳しい記述が見られる。
- \* 4 春秋末期の混乱に伴う知識人の隠逸について記してある代表的なものとしては『論語』微子などが挙げられる。
- \* 5 王莽の王位篡脱に伴う知識人の下野については『後漢書』逸民列伝に詳しい記述が見られる。また注1～5に関わる中国の隠者について総合的にまとめられたものとして、斯波六郎氏『中国文学における孤独感』（岩波書店、昭和三三年）、富士正晴氏『中国の隠者』（岩波新書、昭和四八年）、小尾郊一氏『中国の隠遁思想』（中公新書、昭和六三年）、神楽岡昌俊氏『中国における隠逸思想の研究』（ベリカん社、平成五年）などがある。
- \* 6 「迂儒」の他「俗儒」「腐儒」などの語もよく見られる。たとえば高杉晋作の「自笑」に「自ら哭す我が心の拙終身腐儒を学ぶ」とあり、また陸羯南の「不如意行」に「悔ゆ迂陋なる漢儒の説を信じ 摘章探句して殆ど身を誤るを」などとある。
- \* 7 士族反乱は細かなものまで挙げるとかなり多い。土佐立志社の『土陽新聞』二四号（明治二年二月一〇日発行）は、代表的なものとして長州脱退騒動、雲井陰謀事件、佐賀の乱、神風連の乱、秋月の乱、萩の乱、西南戦争の七つを挙げている。また士族反乱の研究についてまとめたものとしては後藤靖氏の『士族反乱の研究』（青木書店、昭和四二年）がある。
- \* 8 代表的なものとして、明治六年の新聞紙条目、同八年の新聞紙条例、讒謗律などが挙げられる。詳しい条項について

は『法令全書』巻八（内閣官報局、昭和五〇年）を参照されたい。

\* 9 運動の演劇演芸への展開に関しては川上音次郎らが夙に知られる所であるし、また植木枝盛が遊廓等で広めた「民権数え歌」、加えて出版関係では雲井の談義本『雲井龍雄実伝 徳川回復嚆龍浪』が明治一六年に世に出ている。これらは初期に於ては知識人を対象に展開されていた運動が、庶民層にまで波及していたことを実証するものである。

\* 10 たとえば内田智雄氏編の『米沢善本の研究と解題』（臨川書店、昭和三三年）などを見ると、藩校興讓館が有していた多岐にわたる漢籍には目をみはるものがある。また筆者自身が、その編集に関わったものとして杵築市教育委員会編『杵築藩関係古文書調査報告書』（杵築市立図書館、平成四年）があり、ここにも漢籍には事欠くことのない一通りの文献がそろっている。

\* 11 岡本韋庵については、その蔵書及び原稿が、徳島県立図書館の郷土資料室に千点近く収められている。

\* 12 『岡本氏自伝』（徳島県教育委員会、昭和三九年）一五八頁に「……則軒を知るに至り、則軒の門人など相知れるもの多く嘗て小島謙助といへるを伴ひ、余が清水谷氏の寓に尋ねられたる事あり。共に北地の事を談じ当世の事に及びたりしが、小島は極めて気概ある人物にて輔相以下に其人なきを嘆じ、終に罵詈して息まず。余は其人の壮なるに驚きたれども頗る過激に渉るほどなりければ、後に一郎に面して云々と語るに一郎も然る事にや思はれけん。某が専ら内事に奔走するを見て再び拓地の事をば議せざりき。小島は後に至り果して過激もて敗れを致せり。謂はゆる雲井龍雄といへるもの是なり。」とあり、実是的確な雲井評がなされている。

\* 13 『黙齋詩鈔古今體一百首』（明治二〇年序刊、岡本韋庵撰）

\* 14 植木枝盛に関しては『植木枝盛集』（岩波書店、平成三年）があり、研究書としては家永三郎氏『植木枝盛研究』（岩波書店、昭和三五年）を始めとして多数ある。

\* 15 陸羯南に関しては『陸羯南全集』（みすず書房、昭和六〇年）があり、研究としては大久保利謙氏「陸羯南の思想とその立場」（吉川弘文館、昭和六三年、『大久保利謙歴史著作集6』）、「陸羯南・三宅雪嶺・徳富蘇峰」（昭和六四年、同著作集8）、小山文雄「陸羯南」（みすず書房、平成一年）などがある。

\* 16 北村透谷に関しては『北村透谷全集』（岩波書店、昭和三〇年）があり、研究書として最新のものに色川大吉氏の『北村透谷』（東京大学出版会、平成五年）がある。北村は「富士山遊びの記憶」の中で雲井の詩を引いている。この問題については、色川氏の『明治の文化』（岩波書店、昭和四五年）や『新編明治精神史』（中央公論社、昭和四八年）に詳しい。



また『ドキュメント日本人3―反逆者―』（学芸書林、昭和四三年）所収の村上一郎氏「雲井龍雄の詩魂と反骨」及び桶谷秀昭氏「近代日本の反逆者」にも詳しく論じてある。

\* 17 徳富蘇峰に関しては、安藤英男氏の『蘇峰徳富猪一郎』（近藤出版社、昭和五九年）がある。彼の著書は極めて膨大であるが、中でも本研究に関わるものとして『吉田松陰』（民友社、明治四一年）がある。また明治期に於ける諸思想をまとめたものとして松本三之介氏の『明治精神の構造』（岩波書店、平成四年）があり、植木枝盛、陸羯南、徳富蘇峰らについて論じてある。

\* 18 この問題については秀村選三氏が『薩摩藩の基礎構造』序説（御茶の水書房、昭和四五年）に於て特に「西南辺境型領国」という語を以て言及しておられる。また石井孝氏も『戊辰戦争論』第一章第一節（吉川弘文館、昭和五九年）に於て秀村選三氏の論を取り上げて、経済的背景による維新期の諸国の関係について論じておられる。

\* 19 文天祥「正気之歌」を典故とする三・四・九句以外に、「藺氏元全趙」は『史記』藺相如列伝、「荆軻曾許燕」は『史記』刺客列伝、「聽鶉邵子涙」は陳繼儒『見聞録』、「頌橋屈生篇」は屈原『楚辭』、「請読獲麟編」は『春秋』をそれぞれ典故としている。

\* 20 山田夔堂（一八〇三―一八六一）、米沢藩の人。雲井は藩校興讓校で学ぶ前は山田の私塾杜宇山荘で学んだ。彼の「夔堂」という『周易』を典故とする号（山田の師である古賀個庵にも夔屈居という号があり、その影響もあろう）や「杜宇」を冠する私塾の名など、彼自身一流の知識人であった。ちなみに彼は安井息軒、塩谷宕陰とともに「江戸の三奇策」と呼ばれていた。詩集として今井晦堂編集の『夔堂遺稿初集』（求道館、明治一一年）がある。

\* 21 「滄浪迹莫清兼濁」は屈原『楚辭』漁父を、「嘉遯」は『周易』遯卦九五を、「鳳兮」は『論語』微子をそれぞれ典故としている。

\* 22 大楽源太郎に関しては、内田伸『大楽源太郎』（風説社、昭和四六年）がある。

\* 23 嘉遯は遯卦九五、肥遯は遯卦上九を示す。ともに六朝期の知識人たちの詩材として用いられた。たとえば『文選』には七例がある。嘉遯を示すものとして張景陽「七命八首」（卷一五）、趙景真「與嵇茂齊書一首」（卷四三）があり、肥遯の用例として謝靈運「入華子崗是麻源第三谷一首」（卷二六）、桓元子「薦礁元彦表一首」（卷三八）、石季倫「思婦引序一首」（卷四五）、夏侯孝若「東方朔画贊一首」（卷四七）がある。また陶淵明「自祭文」にも肥遯が見える。

\* 24 接輿とその「鳳兮之歌」に関しては『論語』微子に詳しい。同旨の説話は『莊子』人間世にも見られる。

\* 25 「棄児行」は従来雲井の作であるとされてきたが、安藤英男氏の考証によつて原正弘（一八五二～一九二七）の手になる偽作であることが証明された。これについては安藤氏の『雲井龍雄全伝』（光風社出版、昭和五六年）所収の「棄児行考」に詳しい。本詩の詳細な解釈については、本書第7章で行う。



## 第1章 雲井龍雄の詩想 — 慷慨と隱逸 —

### はじめに

幕末維新期を矢のように駆け抜け、明治三年一二月に二七歳の若さで処刑された米沢藩士雲井龍雄<sup>\*1</sup>（一八四四—七〇）は、歴史的には反乱を画した一不平士族として記される。例えば、昭和一六年に文部省が出した『維新史』には次のようである。

越えて翌（明治）三年十二月二十六日、米沢藩士雲井龍雄の陰謀事件が暴露して、一味と共に断せられた。罪状は、政体を封建制度の昔に復旧せんが為、兵力を以て在朝の大官を除かんとするにあつた。雲井は本名を小島龍三郎と称し、戊辰の役に賊軍に加はつて謹慎處せられ、二年東京の上つて集議院の寄宿生となつたが、幾許もなく退院を命ぜられ、爾来芝二本榎の上行寺及び円真寺に「帰順部曲点検所」なる標札を掲げ、諸藩脱籍の徒を鎮撫するを名として同士を糾合し、密議を凝らしてゐた。會々三年四月事發覺して捕縛せられ、遂に龍雄は梟首に、其の党斗南藩土原直鉄等十一人は斬罪に處せられたのであつた。斯くの如く陰謀は事前に暴露して纔かに事なきを得たが、……。〔維新史料編纂会『維新史』昭和一六年〕

この雲井龍雄の名が今日に至るまで伝わっているのは、彼の志士としての純粹な心情に基づく約二百首の秀逸なる漢詩による所が大きい。本章では主にこれらの詩を通して、雲井龍雄の基本的な心情の理解を試みたい。まず雲井龍雄の基本的志向を示す資料を二つあげてみる。

善諷子曰く、嗚乎。龍雄の才を以て、当時若し能く之を顕用せば、則ち渠ぞ未だ必ずしも叛賊と為るに甘んぜんや。天門の詩を觀れば以て知るべし。古より英雄・豪傑は、駕御の其の宜を失すれば、則ち往往にして怨望して叛賊と為ること、韓信・鯨布の如し。何ぞ独り龍雄を恠むのみならんや。其の後の江藤・西郷・前原の諸子の如きも、蓋し亦た是なり。嗚乎惜しいかな、と。(原漢文)〔蒲生重章『近世偉人伝』明治一四年)〕

夫れ龍雄の世に於けるや順逆の理を誤り、王師に抗すと雖も、要するに其の初志徳川氏の冤を雪ぎ、己らが藩祖の業を復せんと欲するの微意に出づるのみ。豈に自ら叛賊たるを甘ぜんや。其の奇計を出して屢しば敗るるも志氣猶ほ屈せず。幽せられては則ち之を詞藻に発して其の鬱を遣る。是れ天下傑出の士を以て目する所以なり。嗚呼、借しいかな。古來英雄豪傑の士、其の末路皆此の如し。豈独り龍雄も骨原露に帰するのみならんや。

(西村三郎『近古慷慨家列伝』明治二五年)

「駕御の其の宜を失す」「順逆の理を誤り王師に抗す」といった文が見えるが、「其の初志徳川氏の冤を雪ぎ、己らが藩祖の業を復せんと欲する」という一文が、最も端的に彼の心情を言い表したものと云える。

彼の生きていた時代・情勢、そして彼の立場を知るために、彼が慷慨家に列せられる要因となった事柄を雲井の漢詩に詠み込まれた心情を手掛かりにまとめてみた。およそ次の五点である。

1 第一次長州征伐では同盟を結んだ会津とともに幕府についておきながら、一転して長州と同盟を結んで討幕に移行し、加えて王政復古の際、公議政体(雲井は後藤象二郎を中心とする土佐藩の動きに最も賛同していた)に対してあくまでも討幕を主張し、そしてそれを強行した薩摩藩の節操なき行動。

2 戊辰戦争の際、奥羽越列藩同盟において仙台藩とともに盟主の位置にありながら、戦況不利と見るやいち早く降伏を決定した米沢藩の義理を欠いた政治。

3 維新後、集議院の寄宿生に登用しておきながら、情勢に合わないとして無理矢理退庁させた新政府の懐の狭<sup>\*4</sup>。

4 薩摩藩の陰謀と彼が考えている版籍奉還に早々に応じてしまった米沢藩庁の無見識さ。

5 困窮する旧幕臣及び士族に対する新政府の無対応。

いずれの要因も彼の仁義忠孝を重んじる気概の反映である。結果的には幕府よりの立場となるが、恐らく彼の胸中には尊攘もしくは開明、或は討幕もしくは公議政体といった、当時の志士たちが持っていた通常的心情は希薄であつたものと思われる。あくまでも彼の心中で重きをなしていたものは、義理・正義と云つた心情であらう。しかし幕末明治期における義は極めて多様であり、各藩・各個人に義が存する。そこを理解し得なかつた、或は妥協し得なかつた所に彼の性情の一端を垣間見ることが出来る。換言すれば、彼には将来的な政治的ビジョンが乏しく、抽象的精神論がそのほとんどであつたということになる。そしてそれは彼が詩人であつて、政治家ではなかつたことの一証ともなる。

また、今一つ言及しておかねばならないのは、彼が慷慨家・志士としての一面を持つ一方で、並外れた漢学の才があり、加えて山田夔堂（一八〇三〜六一）や安井息軒（一七九九〜一八七六）といった碩学に師事していたということがある。

少小説破万卷書 少小 読み破る 万卷の書<sup>\*5</sup>

欲討聖源遡泗洙 聖源を討ねて討ねて 泗洙に遡らんと欲す

（「会旧部曲将校於鷺湖。置酒更盟。醉後賦之」明治十一年）

読書破万卷 読書 万卷を破る

締交遍八州 締交 八州に遍し

〔示村山友之輔〕明治三年)

彼自身「万巻の書を読破した」と自負している。事実、彼が通っていた米沢藩の興讓館が有する蔵書はかなり質の高いものであった。読書家としての逸話の多い雲井龍雄の事であるから、相当数のものを読了していたことは想像に固くない。また、決して財政的には豊かでなかった江戸遊学中に、書肆を訪れ漢籍を購入したことがたまた日記などに記載されている。先の慷慨家・志士としての気概が、この学才を通じて漢詩に遺憾なく表現されることになる。

かくのごとき心情と学才とを持つていた彼の詩句をいくつか系統的に紹介しながら、本章を進めていきたい。

## 一 慷慨の詩句

本節では雲井がその詩に何を託したのか、また彼の志向はいかなるものか、という問題について見てみたい。まず彼の慷慨家・志士としての一面がよく表れている詩句を見てみる。

憂世非難救世難 世を憂ふるは難きに非ず 世を救ふは難し

誰令百姓免饑寒 誰か百姓をして饑寒を免れしめん

何年一炬燒秦尽 何れの年か一炬 秦を燒き尽くし

更約三章漢法寬 更に約せん三章 漢法の寬

〔退朝訪後藤参与僑居……〕<sup>\*8</sup>（その五）慶応三年）

頸血未能濺暴秦 頸血 未だ暴秦に濺ぐあたはず

風声鶴唳漫逡巡 風声鶴唳 漫りに逡巡す

〔偶作十首〕（その二） 明治元年

一番目の詩は慶応三年一二月の王政復古発令の直後に詠まれたもので、後藤参与とは土佐の後藤象二郎であり、「秦」とは討幕派の中心であった薩摩と長州を指す。ちなみに同詩の（その四）では薩長を「虺蜮の権」と形容している。また二番目の詩は、明治元年九月、戊辰戦争に於て米沢藩が政府軍に降服した時のもので、雲井がそのふがいなさを詠じたものである。

いずれも『史記』を典故とし、前者は高祖本紀の記述\*9に基づく。また後者の一句目「頸血未だ暴秦に濺ぐあたはず」は藺相如列伝の記述\*10に基づいている。秦の昭王によつて瑟を弾かされた趙王のために、甌を昭王に打たせようと脅迫した際の藺相如の台詞を典故として、藺相如のごとき勇氣と実行力を持ち合わせない自らを、或は米沢藩庁を恥じている。そして二句目の「風声鶴唳」の故事が、前句の自らの状況をさらに痛烈に非難している。

この二つは極めて解りやすい例であるが、雲井は自らの敵、それは薩摩とも、またそのように動いていく時勢ともとれるが、それを中国古代の秦帝国にたとえている。そして、この時勢という強大な敵に抗する弱者としての自分を、事実秦に抗した趙の藺相如、衛の荊軻、漢の張良などにたとえて詩中に織り込んでいる。雲井のこの中国古代の登場人物に自らを投影するという事例は枚挙に暇がなく、先の他に自らを藺相如にたとえているものとして、次のようなものがある。

叱秦応有藺 秦を叱する 応に藺あるべし

諭滕豈無韓 滕を諭す 豈に韓ナからんや

〔雑詩十首〕（その九） 元治元年



蘭氏元全趙 蘭氏元趙を全くし

荆軻曾許燕 荆軻曾て燕に許す

輸誠期貫日 誠を輸して貫日を期し

決死誓回天 死を決して回天を誓ふ

(「鴨子与広沢岡松林武市伴諸君飲、席上贈広沢君」慶応三年)

子貢説呉將救魯 子貢は呉に説きて將に魯を救はんとし

相如佐趙能抗秦 相如は趙を佐けて能く秦に抗ふ

(「述懐」明治二年)

「雑詩十首」は二二歳の彼が警衛のため高畠(領内屋代郷の主邑)に赴任していた折の作で、江戸遊学以前のものであるから、特に「秦」が何をさすということとはなく、素直に蘭相如や韓信の気概を敬愛して詠んだものと考えた方がよからう。

二番目の詩は、彼が藩命により探索方として京都に赴いていた頃のもので、当時彼は列藩の情報収拾に東奔西走している。薩長土を中心に討幕、公議政体と揺れ動く時勢のなかで、米沢藩自身がいかに対応し、行動していくべきかという指標を模索していた。そしてその中で知り合い親しくしていた広沢真臣(長州藩)<sup>\*13</sup>らと会した時に詠んだものである。

また三番目の「述懐」は米沢藩が版籍を奉還することを決議した際のものである。参考として、その際彼が藩庁宛に提出した意見書の一部をあげてみる。

群県論を主張するもの独り薩のみ。其の之を奨激翼政する者は、ひとり薩尾に付き、薩鱗に攀じ、利を見て義

を忘る無君無父の群少に過ぎざるのみ。「米沢藩庁宛意見書」明治二年三月四日

この文に明らかなように、彼は版籍奉還を薩摩の陰謀と見ており、ここにその彼の心情が描出されている。

以上に引用した藺相如・韓信・荆軻・子貢<sup>\*14</sup>は、いずれも国君や国家といった自分よりもはるかに上位の敵に単独たち向っていった者たちばかりで、雲井がこれらの孤軍奮闘した英雄たちに自らをオーバーラップさせ思慕したのも無理からぬ事と思われる。また抗う対象として秦帝国、とりわけ始皇帝が彼の詩中に登場する例は多く、雲井にとつて秦の始皇帝が痛烈な強権のイメージであったことがうかがい知れる。

また彼の詩に頻繁に登場する人物として漢の張良がある。

博浪沙中曾擊秦 博浪沙中 曾て秦を撃つ

零丁僅脱圮橋身 零丁 僅に脱す 圮橋の身

武昌今日相逢處 武昌 今日 相ひ逢ふの處

我是子房君老人 我は是れ子房 君は老人

〔席上贈錦織翁〕明治二年

子房嘗取履 子房 嘗て履を取る

圮上之老人 圮上の老人

從此摧其銳 此より其の銳を摧き

遂得殪暴秦 遂に暴秦を殪すを得たり

〔臥病〕(その七) 慶応二年

一番目は『史記』留侯世家の冒頭部<sup>\*16</sup>をまとめたが如き詩である。この詩は自らを張良にたとえることよりも、むしろ帰順部曲点検所に資金援助を申し出た錦織翁（相馬藩・錦織四郎太夫）を老人黄石公に喩えることに主眼が置かれているが、二番目の帰郷中に詠んだ「臥病」と合わせ考えると、彼の張良に対する思いが伺い知れる。藺相如と比べた場合、詩中に張良が登場する際の雲井の心情は明らかに異なる。藺相如には蛮勇に近い勇氣、張良には退く勇氣というイメージが付与されている。特に、黄石公との邂逅をきっかけに「鋭を摧き、遂に暴秦を殲<sup>たお</sup>すことを得たり」とする部分は、前年に江戸警衛の任となり、安井息軒の三計塾に入った雲井にとっては、歴史の表舞台に飛び出した感があったのではないだろうか。事実、江戸警衛の任に就いていた慶応元年（一八六五）一月から翌年の四月までの期間中、騒然とした国情を目のあたりにし、帰郷するや今度は京都探索の願いを藩庁に出して翌年の慶応三年（一八七六）一月に京都へ赴くなど、俄然活動的になっている。

このように、雲井は強大な敵秦帝国に臆する事なく抗った戦国秦漢時代の志士たちに自らを投影させている。そして、特に慶応年間以降の薩摩中心に進む現状をなんとかして打開し、時勢を一変しようという思いが先に示した「……席上贈広沢君」の詩に見える「死を決して回天を誓ふ」という句に余す所なく出ていると言ええる。

またその名が直接登場することはないが、雲井が南宋末の文天祥（一二三六～一二八二）を憧憬していたことは、雲井の詩集を一読すれば明瞭なものとなる。当時志士たちの間で元軍に抗して刑死した文天祥が英雄視されていたことは周知の事実であり、文天祥の「正氣之歌」に和して詩を詠むことが一つの流行となっていたことから考えると、当然の現れとも言えよう。

この外、雲井は中国における志士を評する文を巧みに詩中に織り込むこともしている。たとえば、『孟子』滕文公下及び万章下に見える

志士は溝壑に在るを忘れず、勇士は其の元を喪ふを忘れず。

という語を踏まえた詩句がいくつか見られる。

素甘奔走苦 素より甘んず 奔走の苦しみ

溝壑久為期 溝壑 久しく期を為す

〔雑詩十首〕(その六) 元治元年)

溝壑平生決此志 溝壑 平生 此の志を決す

道窮命乖何足異 道窮まり命乖くも 何ぞ異しむに足らん

〔題集議院障壁〕明治二年)

いずれも彼の志士たらんとする意気のあらわれであり、回天の願いの表現である。

さて、こういった慷慨の気風が彼の心中の多くを占めていたことは疑いないのだが、決してそれがすべてではない。極めて中国的なもう一つの思考の反映が彼の詩句には見られる。

## 二 隠逸の詩句

それは抗いながらも、強者の壁に如何ともし難い状況に陥った時、いかに処するかという問題である。本節では雲井の詩の中に強く光彩を放っているもう一方の隠逸句について考えてみたい。

不為幹乾轉坤之名臣 乾を幹らし坤を転ずるの名臣と為らずんば

須為嘲風弄月之逸民 須らく風を嘲し月を弄するの逸民と為るべし

〔同大俊師訪秋水翁於赤羽里……〕<sup>\*18</sup> 明治二年

ここに見られるのは自分の力を十二分に發揮できるような「名臣」の地位に我が身が置けないような状態であるならば、隠逸して「逸民」となれという思想であり、たとえば『論語』憲問篇に見られる「邦に道あらば穀す。邦に道なきに穀するは恥なり」などと共通する中国的思考である。また次のような詩句もある。

天也道從屈 天や道 屈に従ふ

鳳兮歌可嘉 鳳兮の歌 嘉すべし

〔雑詩十首〕（その十） 元治元年

鳳兮之歌我最愛 鳳兮の歌 我最も愛す

是非安足容我喙 是非 安ぞ我が喙を容るるに足らんや

〔予暇日閱郭青山集……〕<sup>\*19</sup> 明治二年

「鳳兮之歌」とは『論語』微子篇の接輿の故事を指す。<sup>\*20</sup> 微子篇の記述は隱者接輿が孔子を擲擻して歌ったものだが、おそらく雲井はこの歌の時代を憂える一面をとらえ、そこに自らの状況を織り込んで解したものと思われる。同じく『論語』微子篇を典故とした次のような詩句も見られる。

好與沮溺耦 好し 沮溺と耦し

莫答人問津 人の津を問ふに答ふるなし

睥睨天地裡 睥睨す 天地の裡

山水足寄身 山水身を寄するに足る

〔臥病〕(その三) 慶応二年)

孔子は子路から長沮・桀溺の話聞いて「憮然として」「鳥獸は與に羣を同じくすべからず」と言つて批判的だったのだが、<sup>\*21</sup>雲井はそれを「好し」とし、隠遁して山水に暮らすのもまたよいではないかと言つている。ほかに宋代の隱者林逋を<sup>\*22</sup>テーマとした詩句もある。

昨夜寒梅花下臥 昨夜寒梅の花の下に臥し

清香一枕夢林逋 清香一枕林逋を夢む

〔瓶梅〕(その二) 明治一一年)

前身知汝湖山種 前身は知る 汝湖山の種

居士当年處士逋 居士は当年の處士逋なるを

〔瓶梅〕(その五) 明治二年)

(その二) に於て雲井は林逋の夢を寒梅の花の下で見たといい、さらに(その五)では、梅の花に「君は湖山の梅の生まれ変わり」で、私はその梅の花を見ていた林逋の生まれ変わりだと言つて、自らを林逋に擬している。

この隠逸・隱者に関わる詩句は、薩長の権力が絶大なものとなつた維新後の詩作により多く見られることは疑いないのだが、元治元年の「雜詩十首」に既に「鳳兮の歌 嘉すべし」とあるから、早い時期から雲井にこの傾向があったことは否定できない。恐らく幼い頃から中国学によって得られた教養に根付くものであろう。

では、接輿・長沮・桀溺・林逋といった隱者を思慕する思惟構造とはどのようなものか。「鳳兮之歌」にあわせ

て『周易』の遯卦を引く詩がある。

滄浪遮莫清兼濁 滄浪 さもあらばあれ 清と濁と

嘉遯鳳兮有古風 嘉遯 鳳兮 古風あり

〔掛川寄食鈴木処士宅……〕<sup>\*23</sup>（その二）慶応四年）

前半部は『孟子』離婁上を踏ま<sup>\*24</sup>えている。ここで雲井は「さもあらばあれ」と言い、やや自棄的ではあるが、清濁相あることを承認し、必ずしも清であることに固執していない。つまり濁という状態に必ずしも抗う姿勢を見せていないのである。そして「志を正しく持つていれば無事隠遁することができる」という意味の『周易』遯卦の九五「嘉遯」を引いている。

性情としては一見相反するように思える慷慨と隱逸が、かくの如く雲井の中には同居していた。それも詩中より推せば、両心情ともに強い光彩を放っている。とすれば、雲井はこの両心情を矛盾としては捉えず、直結したものであるとして考えていたと見るのが妥当であろう。そしてそれは最後に示した『周易』遯卦をもって考えれば、それが極めて中国的思考、中国的隱逸であることが明らかとなる。

殺氣襲人難自持 殺氣 人を襲ひて 自ら持し難し

不堪能与世推移 能く世と推移するに堪へず

〔募資金於諸侯〕（その二）明治三年）

などとあり、「能く世と推移するに堪へず」<sup>\*26</sup>と言って、魚父に揶揄された屈原と同様の心情を吐露した、彼の慷慨と表裏一体の隱逸の構造を次に考えてみたい。

### 三 隱逸志向の構造

では、慷慨と隱逸が共存する雲井の心底にあったものは何だったのであろうか。戦乱・混迷の世にあつては、恐らく当然の処世の一つであつたらうと思われるこの生き方の指標を彼は何に求めたのであろうか。まず雲井の詩に見えた「鳳兮之歌」「長沮桀溺」の二つの説話を載せる『論語』微子篇からあたつてみる。

逸民は伯夷・叔斉・虞仲・夷逸・朱張・柳下恵・少連なり。子曰く、其の志を降さず、其の身を辱めざるは、伯夷・叔斉か。謂ふ柳下恵・少連は、志を降さず身を辱しむ。言は倫に中り、行は慮に中る。其れ斯れのみ。謂ふ虞仲・夷逸は、隱居して放言し、身は清に中り、廢は權に中る。我は則ち是に異なる。可もなく不可もなし。（『論語』微子）

ここで孔子は隱者（逸民）を

- 1 其の志を降さず、其の身を辱めず
  - 2 志を降し身を辱め、言は倫に中り、行は慮に中る
  - 3 隱居して放言し、身は清に中り、廢は權に中る
- に分類している。雲井が「鳳兮の歌」を好み、長沮・桀溺を好しとするのであるならば、彼は三番目を考えていたものと思われる。そしてこの思考は『論語』の

隱居して以て其の志を求め、義を行ひて以て其の道を達す。（『論語』季氏）

と主旨を同じくする。雲井は、ここに志と現状とがそぐわない場合の孔子の示唆があると感じたに相違なく、事実



『論語』内にはかくのごとき状況に対する言及がいくつか存在する。

士は道を志す。而して悪衣悪食を恥づる者は、未だ与に議するに足らざるなり。〔『論語』里仁〕

賢者は世を辟け、其の次は地を辟け、其の次は色を辟け、其の次は言を辟く。〔『論語』憲問〕

子曰く、篤く信じて学を好み、死を守りて道を善くす。危邦には入らず、乱邦には居らず。天下道あれば則ち見はれ、道なければ則ち隠る。邦に道ありて、貧しく且る賤しきは恥なり。邦に道なくして、富み且つ貴きは恥なり。〔『論語』泰伯〕

これらの文を見ると、雲井は聖源『論語』に自らの生様の指標を求めていた感がある。それでは雲井にとっての「隠居して以て其の志を求め、義を行ひて其の道を達す」る隠逸とはいかなるものであったのか。彼がよく詩中に引用するモチーフの一つである『周易』の一節を次に見てみたい。

往くとは、屈するなり。来るとは信（伸）ぶるなり。屈信（伸）相ひ感じて利生ず。尺蠖の屈するは、以て信（伸）びんことを求むるなり。龍蛇の蟄するは、以て身を存せんとするなり。〔『周易』繫辭下伝〕

これを典故とした詩句に、次のようなものがある。

蠖伸因善屈 蠖の伸ぶるは善く屈するに因る  
龍蟄豈不騰 龍の蟄するは豈に騰らざらんや

〔送白山盟兄〕（その二）慶応元年）

決死不回期必伸 死を決して回さず 必ず伸びんことを期し

夙因鼎鑊寄斯身 夙に鼎鑊に因りて 斯の身を寄す

〔素堂兄在会。詩以戒貞暴憑、歩其韻〕（その二）明治二年）

ここに示される「伸」「屈」は、尺取り虫が体を曲げるのは、体を伸ばして前進しようとするからであるという意味を持つものであり、雲井はこれに前進のための退歩という解釈を施している。これらの詩句を合わせ考えると、雲井にとつての隱逸とは「屈」であり「蟄」であつて、やがて「伸」「騰」するためのものだったことがわかる。したがつて、その隱逸志向が持つ意味は一時的退歩であつて、隱逸そのものに価値を見いだした上での求道的なものではない。換言すれば、雲井の隱逸は抗うことと連動するものであり、その一環であつたということになる。

そして先章の末尾部に於て示した『周易』遯卦をその精神的基盤とすることの淵源は古くは伯夷・叔斉の入山の故事から、王莽期に於ける知識人たちの下野、そして陶淵明に至る流れとして提えられ、その流れのまともと言えるものに『後漢書』逸民列伝がある。その冒頭部に見える逸民の定義を次に見てみたい。

易に称す、「遯の時義、大なるかな」<sup>\*27</sup>と。又曰く、「王侯に事へず、其の事を高尚す」<sup>\*28</sup>と。是を以て堯天に則

ると称すも、潁陽の高に屈せず。武美を尽すも、終に孤竹の掣を全くす。茲より以降、風流彌いよ繁し。長往の軌未だ殊へず、感致の数一に匪ず。①或は隱居して以て其の志を求め、②或は回避して以て其の道を全くし、③或は己を静かにして以て其の躁を鎮め、④或は危を去りて以て其の安を図り、⑤或は俗を垢として以て其の築を動かし、⑥或は物を疵として以て其の清を激す。然も其の吠敵の中に甘心し、江海の上に憔悴するを觀るに、豈に必ずしも魚鳥に親しみ林草に楽しまんや。亦性分の至る所と云ふのみ。〔後漢書〕逸民列伝 \*①、

⑥は著者が追記した)

ここで『周易』の遯卦象伝及び蠱卦上九を根本義として挙げ、そして隱逸を六つに分類している。雲井龍雄がいずれの分類に属するかは明言し難いが、いずれにせよ中国的隱逸のあり方とは、この遯卦(䷠)の義が示すところに集約されている。すなわち小人(陰爻)が時代・世界を席卷しつつあるという遯卦の義を、雲井は日本が薩摩・長州によって侵略されるという当時の状況を暗示するものと捉えたに相違ない。

では雲井がこの中国的隱逸の代表的存在とも言える陶淵明と同質の詩情を持つものであるかという点、そうとはかりは言えない。雲井の隱逸の構造に対するひとまずの結論を出すため、最後に淵明との差異について簡単に言及してみたい。

確かに雲井は詩中において「歸去來兮辭」をふまえて

回思時一粲 思ひを回らして 時に一粲すれば

昨非竟今是 昨は非にして今は是なるを覚ゆ<sup>\*31</sup>

〔臥病〕(その五) 慶応二年)

樂命復盍疑 命を楽しみて復盍ぞ疑はん<sup>\*32</sup>

淵明不我欺 淵明 我を欺かず

〔偶作〕慶応二年)

と言って淵明の境地に至ったことを示し、また『五柳先生伝』に基づいて

五柳高蹤夢久延 五柳の高蹤 夢久しく延ぶ  
醒吟醉臥好終年 醒吟醉臥 年を終うるに好し

〔春雨登樓〕不明

と言つて、彼の在り方に憧憬している。また陶淵明の詩中においても雲井と同じ詩情を伝えるものがいくつも見られ、たとえば長沮・桀溺に対しては

遙遙沮溺心 遙遙たり 沮溺の心

千載乃相関 千載にして 乃ち相ひ関はる

但願長如此 但だ願はくは 長に此の如くあらん

躬耕非所歎 躬耕は歎ずる所に非ず

〔陶淵明〕庚戌歳九月中於西田獲早稻

と言ひ、また『楚辞』漁父をふまえて

山澗清且淺 山澗 清く且つ淺し

可以濯吾足 以て吾が足を濯ふべし

〔陶淵明〕「帰園田居」(その五)

と言ふ。また秦の始皇帝に抗つた荆軻を讃えて「詠荆軻」という句を詠むなどしている。

しかしながら、雲井には淵明に見える積極的隠逸の志向がない。換言すれば、雲井の隠逸は外的要因があつて初

めて生じるものであり、雲井自身の内的要因からの隠逸はあり得ないということである。したがって先に言及したように、雲井の詩における隠逸の志向は求道性を伴わない隠逸、やむなしの強制退歩、すなわち消極的隠逸である。逆にそれは人生に対して積極的であることの証左ともなる。たとえば淵明の詩には、雲井の詩には見られない以下の如き積極的隠逸の詩情がある。

少無適俗韻 少きより俗に適ふの韻なく

性本愛丘山 性本 丘山を愛す

誤落塵網中 誤って塵網の中に落ち

一去十三年 一たび去って十三年

(陶淵明「帰園田居」(その一))

久在樊籠裏 久しく樊籠の裏に在りしも

復得返自然 復た自然に返るを得たり

(陶淵明「帰園田居」(その一))

人生似幻花 人生 幻花に似たり

終當歸空無 終に當に空無に歸すべし

(陶淵明「帰園田居」(その四))

吾生夢幻間 吾が生 夢幻の間

何事繼塵羈 何事ぞ塵羈に繼がる

(陶淵明「飲酒」(その八))

人生(俗世)を「塵網」とし「樊籠」「幻花」「夢幻」とする淵明の消極的・否定的立場が、逆に彼の隱逸への積極的態度を明示している。淵明にとって隱逸は一時的退歩ではなかった。この点を考え合わせた時、改めて雲井龍雄が慷慨家として列挙されることの妥当性を見い出すことができる。つまり、結局は時代の流れに抗しきれず不平士族として処刑された彼は、時勢という塵芥にまみれた籠中の詩人としてその存在を位置づけることができる。そして彼自身その位置づけを厭わない存在だったのではないだろうか。

おわりに

かくの如き一時的退歩としての隱逸の思想に裏打ちされていた彼は、抗う時も敗れ退く時も常に自らを正当化し、そして説明し得た。太政官の命によって東京へ檻送させられた彼は次<sup>\*33</sup>のような詩作をする。

天數有消長 天數に消長あり

人道有隆汚 人道に隆汚あり

所以賢也聖 賢たり聖たる所以

行藏或相殊 行藏 或は相殊なる

唯吾狷而急 唯だ吾狷にして急

不能與化俱 化と俱にするあたはず

自立多崖異 自立 崖異多く

心跡每易孤 心跡 毎に孤になり易し

唯有区区志 唯だ区区の志あり

死生誓不渝 死生誓つて渝らず

臨難豈苟免 難に臨み 豈に苟も免れんや

知冤未自誣 冤を知るも 未だ自ら誣ひず

雖有愧前哲 前哲に愧づるありと雖も

猶足立懦夫 猶ほ懦夫を立たしむるに足らん

〔呈息軒先生〕(その二) 明治三年

既に死を予期していたと思われる雲井が、師である安井息軒に宛てて詠んだ最後の詩である。一句目に「天教に消長あり」といって、運命を不可避のものとして承認し、賢者聖人たり得る根柢など時と共に推移するものであるとして決して自らの行動を否定的に捉えていないし、「前哲」には及ばないが、「懦夫」を動かすぐらいのことはできた<sup>\*34</sup>とした彼の「区区の志」に対する自負を読み取ることにはたやすい。回天を為し得なかつた自らを「不遇」とする事実上の敗北宣言である。

しかし、彼自身が心中に想起していたものは「子曰く、志士仁人は、生を求めて以て仁を害することなく、身を殺して以て仁を成すことあり、と」(『論語』衛霊公)だったのでないだろうか。そして雲井の精神の一端はここに見える「成仁」という語に凝縮されているように思われる。もちろんこの場合の「仁」はあらゆる儒家規範を包括するものとして捉えた方が妥当であろう。つまり、かの幕末明治期にあつて奔走した志士たちの心情の基盤或は尺度のほとんどが他藩や外夷に対しての自藩あるいは日本であつたのに対し、雲井は純粹なまでに人間の本来的あり方を追求していた感がある。それ故に雲井詩は普遍性を持ち得た。だからこそ後に明治六年政変とそれに続く佐賀の乱、そして西南戦争などに至つて顕在化する自由民権にかかわる運動の中で甦ることができたのであろう。これについては本書第6章、及び第7章で詳説する。

\*1 雲井龍雄については安藤英男氏に一連の著作があり、本稿に於した詩句、及びその字句の異同、そして製作年などはすべてそれに基づいている。尚、詩題・字句・製作年等がはっきりしない著作については、以下の安藤氏の諸研究（『雲井龍雄詩伝』（昭和四二年、明治書院）、『雲井龍雄研究伝記篇』（明治書院、昭和四七年）、『雲井龍雄研究詩伝』（明治書院、昭和四八年）、『新稿雲井龍雄全伝』（光風社出版、昭和五六年））をあわせ考えた上で判断した。

\*2 「天門の詩」とは明治二年一〇月の集議院を退院させられた時に詠んだ「題集議院障壁」をさす。注4を併せて参照されたい。

\*3 『瘴癘紀行』には八月晦日付に「国論一変、我が事終矣を悟り、終に復た言はず」とある。米沢藩庁が降伏の意を示したのが八月二八日であったから、二日後に雲井は降伏を知ったことになる。ちなみに九月一五日仙台藩降伏、同二二日会津落城と続く。

\*4 雲井が集議院を退院させられた事情については彼が柿崎家保に宛てた手紙がよく伝えている。やや長きに渡るが、その冒頭の一部を示しておく。

扱小子事集議院に寓し漸々光芒發露、危言激論、日夜發憤罷在候内、此程判官権判官より密々説得には、近來諸省諸司の内より、雲井龍雄は米の賊魁、去歲諸處出沒、官軍に害を為す事少なからず、たとへ今日悔過自新とは申すとも、生々しき賊魁を延英の寮魁ならしむる事、集議院諸員の識なしといふべしとの事なれども、三五人までは判官権判官より夫れ夫れ説破いたし居候へども、近日制度司杯よりは、こぞつて激論も有之、加ふるに足下此院にありても言行はれ謀従はるべきにあらず、よつて暫時退院ありて都門に飄然遊學し、機を覘ひ時を待たれ候へ、しかし院より命を下し足下を退くると申候ては、其の辞令もなし、又曖昧に退け候ては、世の疑も猶又深かるべし、よつて足下病に托し、しばし退院保養と称せよとの事に御座候……。

またこの時に詠んだ詩が注2に示した「題集議院障壁」であり、そこには

天門之窄窄於甕 天門の窄きは甕よりも窄し

不容射鉤一管仲 容れず射鉤の一管仲

とあつて、『史記』管晏列伝の管仲が後の桓公に弓を引きながらも宰相として任命された故事を典故として、自分を追い



出した明治新政府の懐の狭さを嘆いている。なお、この詩が詠まれたのは明治二年一〇月三日のことであるが、東京の米沢藩邸に於いて書き記されていた『東京御帳』（『米沢市史資料篇4 近現代史料1』所収）には、翌三年一月二八日付に

集議院 昨日以切紙御用の儀有之候間、今日巳之刻出頭可致旨申来候付、罷出候処、御書付御渡ニ相成候左之通

小嶋龍三郎

当院寄宿生被免候事

正月 集議院

右之通御達ニ相成候付、人江右之趣申達候事

とあるから、正式な退院は四ヶ月後となる。

\*5 杜甫の「奉贈韋左丞丈二十二韻」に、杜甫が昔の自分を「読書破万卷下筆如有神」と詠んでいる。雲井の詩の中で漢詩を典故とするものは多いが、中でも陶淵明、杜甫、韓愈、文天祥の詩を用いたものが多い。

\*6 興讓館が有していた蔵書に關しては内田智雄編『米沢善本の研究と解題』（臨川書店、昭和三十三年）に詳しい。

\*7 たとえば彼が初めて江戸を訪れた慶応元年の日記には、「（五月）九日 日本橋通を散歩。山城屋佐兵衛にて韓子相求む。

……十日 芝辺を散歩。岡田屋嘉七より『鬼谷子』求め来る。……（閏五月）十二日 松本同道、本町辺を散歩。横山町書林・和泉屋金左衛門より、『清朝三大家文集』求め来る」などがある。また翌年の父及び兄宛書簡には「此間水府缺所の武士の蔵本多分都下の書林へ払ひ候由にて、和泉屋金右衛門より入来ニて好書籍を撰び取る可き旨申し来り候ニ付、則ち参り候處、世の中ニ稀なる本文天祥ノ全集、范仲淹ノ文集、范純仁ノ全集、陳龍川ノ全集、等御座候ニ付き、文天祥集ハ高金ニて手が届かず、外三部ハ式両式分ニ付き、無理とは思ひ申し候へども、誠に欲しき本ニ付き、相求め度く存じ、諸付會料も乏しく相成り候間、関口殿より六両借請け申し候」とあり、彼が無理をしつつも精力的に漢籍を購入していたことがわかる。

\*8 原題は「退朝訪後藤参与僑居。参与出述懷五篇命次韵。酒間走筆塞其責」。

\*9 『史記』高祖本紀に「漢元年十月……（沛公）召諸縣父老豪傑曰、父老苦秦苛法久矣。誹謀者族、偶語者弃市。吾与諸侯約、先入闕者王之、吾当王関中。与父老約、法三章耳。……」とある。

\*10 『史記』藺相如伝に「於是相如前進缶、因跪請秦王。秦王不肯擊缶。相如曰、五步之内、相如請得以頸血濺大王矣」

とある。

\* 11 『晋書』謝玄伝に「余棄甲宵遁、聞風声鶴唳、皆以為王師已至、草行露宿、重以飢凍、死者十七人」とある。

\* 12 『史記』淮陰公列伝を典故としたものである。引用は長きにわたるので省略する。

\* 13 雲井は対長州については、この広沢真臣をパイプとしていた。『広沢真臣日記』にもわずか一カ所ではあるが、明治元年（慶応四年）四月一三日付に「園井亭に而飲飯、甲村休五、土州武知八十衛外に二人、肥後林某外二人、米沢小島龍三郎、杯招会へ行」と雲井の名が見える。また詩題に見える他の人物は岡松壘谷（豊前）、林半七（長州）、武市八十衛（土佐）、伴修吉（長州）である。

\* 14 『史記』刺客列伝を典故としたものである。

\* 15 『史記』仲尼弟子列伝を典故としたものである。

\* 16 『史記』留侯世家に「良嘗学礼淮陽。東見倉海君。得力士、為鉄椎重百二十斤。秦皇帝東遊、良与客狙擊秦皇帝博浪沙中、誤中副車。秦皇帝大怒、大索天下。求賊甚急、為張良故也。良乃更名姓、亡匿下邳。良嘗聞從容步遊下邳圯上、有一老父衣褐、至良所、直墮其履圯下、顧謂良曰、孺子、下取履。（老父）曰、……十三年孺子見我濟北、穀城山下黄石即我矣。……」とある。

\* 17 韓愈「潮州刺士謝上表」に「陛下即位以来、躬親聽斷、旋乾轉坤、関機闔開、雷厲風飛、日月清照、天戈所麾、莫不寧順」とある。

\* 18 原題は「同大俊師訪秋水翁於赤羽里。歛飲痛醉。至午夜而帰。師作醉時歌、以呈翁兼似予。予亦賡一歌、以似師兼贈翁」。

\* 19 原題は「予暇日閱郭青山集。有天地為衾月為枕句。弄吟數回、意甚愛之。因自号枕月居士。賦之以述志。」

\* 20 『論語』微子に「楚狂接輿歌而過孔子。曰、鳳兮鳳兮、何德之衰。往者不可諫、來者猶可追。已而已而、今之從政者殆而。孔子下欲与之言。趨而辟之。不得与之言」とある。また『莊子』人間世にも同旨の文が見える。

\* 21 『論語』微子に「長沮桀溺耦而耕。孔子過之。使子路問津焉。……（桀溺）曰、滔滔者天下皆是也。而誰以易之。且而与其從辟人之士也。豈若從辟世之士哉。耒而不輟。子路行以告。夫子憮然曰、鳥獸不可与同群。吾非斯人之徒与而誰与。天下有道、丘不与易也」とある。

\* 22 『宋史』林逋伝に「林逋字君復、杭州錢塘人。少孤、力学、不為章句。性恬淡好古、弗趨榮利。家貧衣食不足晏如也。

初放遊江淮間、久之歸杭州、結廬西湖之孤山、二十年足不及城市。……」とある。

\* 23 原題は「掛川寄食鈴木廼土宅。借資乞衣以自給。賦之以謝」。

\* 24 『楚辭』漁父にも「滄浪之水清兮、可以濯我纓。滄浪之水濁兮、可以濯我足」とある。

\* 25 『易』遯卦九五に「嘉遯、貞吉」（爻辭）、「嘉遯貞吉、以正志也」（象伝）とある。また、雲井龍雄が参照していたかどうかは甚だ疑問であるが、項安世の『周易玩辞』には「已為嘉耦而猶遯者子房也」とあって、遯卦九五の嘉遯を子房（張良）に比している。

\* 26 『楚辭』魚父の「魚父曰、聖人不凝滯於物、而能与世推移」をふまえている。

\* 27 『周易』遯卦彖伝に「遯亨、遯而亨也。剛当位而応、与时行也。小利貞、浸而長也。遯之時義大矣哉」とある。

\* 28 『周易』蠱卦上九に「不事王侯、高尚其事」とある。この爻は俗世から隠遁して、自らの志を尚くする、というほどの意である。

\* 29 ちなみに逸民列伝の原注では①（隠遁して自らの志を追い求める）は長沮・桀溺を示すものとしている。また雲井の性情から推せば⑤（世俗を汚れたものとし、自らの気概を奮う）なども近いものがある。

\* 30 この中国的隠逸については陶淵明の伝を載せる『宋書』隠逸伝の冒頭部にもその定義付けがなされており、「易（坤卦六四文言伝）曰「天地閉、賢人隱」。又（乾卦初九文言伝）曰「遯世無悶」。又（蠱卦上九）曰「高尚其事」。又（履卦九二）曰「幽人貞吉」。論語（憲問）「作者七人」、表以逸民之称。又（微子）曰「子路遇荷蓑丈人、孔子曰、隱者也」。又（憲問）「賢者避地、其次避言」。又（微子）「虞仲・夷逸、隱居放言」。品目參差、稱謂非一、請試言之。夫隱之為言、迹不外見、道不可知之言也」とある。またこの問題については小尾郊一氏が『中国の隠遁思想』（中公新書、一九八八年）において明快に説明しておられる。

\* 31 「歸去来兮辞」に「寔迷途其未遠、覺今是而昨非」とあって、役人であった頃を「昨」として否定し、隠遁した「今」を是としている。

\* 32 「歸去来兮辞」に「聊乘化以歸尽、樂夫天命復奚疑」とある。また「庚子歲五月中從都還阻風於規林」（その二）にも「当年詎有幾、縦、心復何疑」と類似した句が見られる。

\* 33 『東京御帳』によると三年七月二〇日付に

米沢藩

其叛雲井龍雄儀、御用有之ニ付嚴重警衛致シ、至急東京江差出事

庚午七月

太政官

とあり、また八月一八日付に

雲井龍雄東京府江罷出候処、同府断獄御役人御呼出御口達左之通

揚屋入申達候事

右御達相濟否、御作法ニ依而束縛之上揚屋入

とあって、雲井の処刑直前の動きを伺い知ることができる。なお、七月二〇日付の太政官からの雲井差出命令は『太政官日誌』では明治庚午第二八号に記載されている。

\* 34 「猶足立儒夫」については陶淵明の『読史述』の第一章「夷齊」に、「貞風凌俗、爰感懦夫」との類似した一句が見られる。



## 第2章 高杉晋作の詩想 — 「狂」と「儉生」 —

### はじめに

本書の序章において、幕末維新期から自由民権運動期へと至る知識人（漢学者）の、漢詩による思惟・志向の考証を核としながら、当時の時代精神の諸相を再編成しようとする試みを提示した。本章は、その各論の一つとして、長州藩士高杉晋作（一八三九〜六七）の漢詩を考証し、彼の詩想の一端を明らかにせんとするものである。とりわけ、文久二年の上海渡航を境に変容する「狂」と「儉生」という二つのモチーフに着目して論を進めていくことにする。

尚、高杉晋作に関する基本的な知識は、従来の夥しい研究書・一般書に譲ることとし、本章では高杉の詩と書簡を中心と考えていく。<sup>\*1</sup>

### 一 吉田と共にあった頃

高杉が久坂玄瑞（一八四〇〜六四）や桂小五郎（一八三三〜七七）らと共に吉田松陰（一八三〇〜五九）の高弟であり、彼の松下村塾に学んだことは周知の事実であるが、彼は安政四年（一八五七）にその門を叩く以前から藩校明倫館でも学んでいた。<sup>\*2</sup> 高杉が一八、九歳の頃である。その当時彼が詠んだ詩に次のようなものがある。

人生元一夢 人生元一夢

須尽逸豪娛 須らく逸豪の娛しみを尽すべし

自笑我心拙 自ら笑ふ 我が心の拙

終身学腐儒 終身 腐儒を学ぶ

(高杉晋作「自笑」安政三・四年頃)

変動する時代であるから、学生達の問いは当然の如く、経世済民に関わる事がら、即ち日本の情勢・列国の意図・藩政のゆくえなどであった。しかし明倫館に限らず、当時の藩校の教師達が講ずるものは、中国古典を基とした旧態然とした経学や兵学などが主流であった。ここに見える「腐儒」は、「迂儒」「俗儒」などとともに、当時の若者が藩校の儒学者達を非難する語として頻度の高いものである。このことは、結局、明倫館での講義は高杉を始めとする若者たちのニーズに答えられるようなものではなかった、ということを示している。では若者のニーズに答えられるような教師とはどのような存在だったのか。それは若者と同じ感性を持った、新しい視点を有する者であった。勝海舟(一八二二〜九九)、安井息軒(一七九九〜一八七六)、佐久間象山(一八一〜一六四)、広瀬淡窓(一七八二〜一八五六)、そして長州に於いては、安政三年勤王思想を有した僧黙霖(一八二四〜九七)と論争し、論争敗北の後に一気に討幕へとステップアップした経歴を有するほどの過激さをもった吉田松陰がまさにそれであった。<sup>\*4</sup>では、高杉が何を求めていたか、また、吉田との間にどのような応答がなされていたのかを書簡から見てみたい。まず高杉の久坂宛書簡である。

僕、愚鈍と雖も、文章家と為り著述を致し、天下の書生に名を知られんの、経学を致し黙言持重空言を以て、人をだましたいの、博学になり天下の俗物に名を知「ら」りたいの、と申すかしこがりは、もうと仕りたく御座なく候。<sup>\*5</sup>(安政六年四月一日)

「かしこがり」という在り方や、「空論」という語に彼は強い嫌悪を懐いている。もちろん、これは単なる学問の

否定ではなく、実践（行）の伴わない学問（知）の否定、所謂「知行合一」の思想であることは言うまでもない。このことの論証は、彼と吉田との往復書簡の中に見える。

僕（吉田）、足下（高杉）と交を納むるは、ただ読書稽古の為のみに非ず。固より將に報国の大計を建てんとすればなり。<sup>\*6</sup>（安政五年二月一二日）

「読書稽古」は目的ではない。それらは「報国の大計を建」という目的のための手段にすぎないことを、ここで吉田は言っている。また高杉の吉田宛に

孰れ外夷いづ私はねほ何れ相叶いづはず候故、……私儀以為らく、何れ天下戦争一たび始り致さずては、外患去り申さざる候。<sup>\*7</sup>（安政五年一〇月六日）

とあって、「外夷」「外患」に対する意識の強さを見て取ることができる。加えて吉田の高杉宛に

今日天下の事、実に空言にては行はれ申さず。……今の時勢、最早墨行と申す時には之れなき様覚え候。<sup>\*8</sup>（安政五年一月一八日）

とあり、吉田の言にも「空言」なる語が確認できる。両者の時宜に即した学問を媒介とする師弟関係を垣間見ることができる。いずれも陽明学的「知行合一」に根ざした知識の実践化を述べている。いわば実践を伴わない知識人、所謂頭でっかちな知識人の否定に他ならない。互いの認識の重点が実行に<sup>\*9</sup>あったことが確認できる。

高杉が決して学問そのものを否定していないことは先に記した。つまり学問（読書）から得た知識の実践に重き



を置いていたということである。このことは次の清水清太郎（一八四三〜六四）への詩からも了解できよう。

江頭分手日西傾 江頭分手すれば日西に傾く

遊子此時客心驚 遊子 此の時 客心驚く

一語寄君君記取 一語君に寄す 君記取せよ

読書勿作読書生 読書するも読書生と作る勿れ

〔臨別示清水清太郎〕文久二年一月三日

「読書するも読書生と作る勿れ」とは、学問は決しておろそかにしてはならない、しかしそれだけで終わってはならない、学問で得た知識を実践せよ、ということである。この高杉の立場は、まさに師吉田の教えに他ならない。

## 二 上海渡航

さて、文久二年（一八六二）、二四歳の時、高杉は第一次上海遣使の一員として上海に旅立つ。<sup>\*10</sup> 当時の中国は太平天国の乱（一八五一〜六四）の末期にあり、上海も毎日のように砲声が鳴り響く状況であった。当時の志士たちの中でも、実際に外夷に侵される中国を目の当たりにした例は少なく、極めて貴重な体験であると言わざるを得ない。とりわけ実践を旨とする高杉の試作・行動に大きな影響を与え、高杉はこの上海渡航を機に「狂生」へと変質していく。本節では高杉が上海渡航時に記した『清遊五録』<sup>\*11</sup>を手がかりに、彼が上海で何を見、何を感じたのかを検証する。

当時の上海の情況については『航海日録』の五月六日の上欄外記に

支那人は外国人の役する所と為る。憐れむべし。我が邦遂に此のごとからざるを得ざるか。防に務むることは是れ祈る。<sup>\*12</sup>（『航海日録』）

とある。また『上海掩留日録』の五月二一日に

熟つら上海の形勢を觀るに、支那人は尽く外国人の便役のため、英法の人街市を歩行すれば、清人皆避けて傍に道を譲る。実に上海の地は支那に属すと雖も、英仏の属地と謂ふもまた可なり。<sup>\*13</sup>（『上海掩留日録』）

とあつて、所謂夷狄の跋扈する上海を甚だ遺憾としている。これは「支那上海港の形勢及北京風説大略」と記された文中で、

日本にも速に速に速に攘夷の策を為さずんば、遂に支那の覆轍を踏むも計り難しと思しなり。<sup>\*14</sup>（『支那上海港の形勢及北京風説大略』）

と上海渡航を振り返って記していることから理解できよう。ここに見て取れるものは、外圧の圧倒的な威力の高杉自身の確認と、このままでは日本も中国と同様の結果に至るといふ危機意識である。それは常々亡き師吉田が説いていたことの実体験であった。もともと高杉が実践主体の行動型知識人でなければ、上海での経験もさしたる影響をもたなかつたであろう。しかし彼の場合、その実践性故に「狂」が顕在化する。『外情探索録』の清人との筆談の中に次のような発言が見える。

弟、頗る狂生、興に乗じて暴言を發す。<sup>\*15</sup>（『外情探索録』）

ここで高杉は自らを「狂」と評し、また次のようにも言っている。

常に貴国の奇士王守仁の人と為りを欽慕す。<sup>\*16</sup>（『外情探索録』）

王守仁（王陽明）の名が見えることから、高杉の言う「狂」が陽明学的な「狂」であることが認識せられるが、もちろんこれは吉田的な、つまり吉田によつて潤色された「狂」であると考えるのが自然であろう。また、次のような一節もある。

采薇観菊、皆是狂なり。近世此狂なし。故に聖道凌夷せらる。<sup>\*17</sup>（『外情探索録』）

「采薇観菊」は、伯夷・叔斉と陶淵明をさす。<sup>\*18</sup>ともに隱逸的在り方を示すものとして、日本においても広く知られている。「狂」とは一見相反して捉えられがちな概念であるが、実は同じ心情の異なる現れである。これらの「狂」の淵源は古く、『論語』に次のような文が見られる。

子曰く「古者は民に三疾あり。今や或は是れも之れ亡<sup>な</sup>きなり。古の狂や肆<sup>し</sup>、今の狂や蕩<sup>とう</sup>。古の矜<sup>きよう</sup>や廉、今の矜や忿<sup>ふん</sup>戾<sup>い</sup>。古の愚や直、今の愚や詐のみ」と。（『論語』陽貨）

子曰く「中行を得て之に与せずんば、必ずや狂狷か。狂者は進みて取る。狷者は為さざる所あり」と。（『論語』子路）

また『孟子』は次のように「狂」を伝える。

(万章) 曰く「……何を以て之を狂と謂ふや」と。(孟子) 曰く「其の志嚶嚶然たり。古の人、古の人と曰ふも、其の行ひを夷考すれば、焉これを掩おほはざる者なり。……」と。(『孟子』 尽心下)

また『論語集註』には「狂」に「狂とは、志願の太高なるなり」「狂とは、志極めて高くして行ひ掩おほはれざるなり」という注釈がほどこされている。ここに示される「狂」概念を総合すれば、およそ次のような定義付けができればよい。つまり「狂」者とは、決して背徳的な負のイメージではなく、高い志をもつて、妥協することなく、己の信ずる所を行う者なのである。

そしてこの「狂」は、単に『論語』解釈史のみならず、歴史的にも、古代より評価されるべき者として位置付けられ、正史には独行列伝という項が設けられて、狂者を語り継いでいくようになる。とりわけ、その先駆けとなった『後漢書』独行列伝では、『論語』を引用しつつ次のような文を冒頭に置く。

孔子曰く「其の中庸を得て与せずんば、必ず狂狷か」と。又云ふ「狂者は進みて取る。狷者は為おほざる所あり」と。此れ蓋し周全の道を失ひて、諸を偏至の端に取れる者なり。然らば則ち為おほざる所あるも、亦将に必ず為す所あらんとする者なり。既に進みて取ると云ふも、亦将に取らざる所あらんとする者なり。此の如きは、性の尚ほ分流して、為否の適に異なるなり。(『後漢書』独行列伝)

また陽明学に於ては「狂」は次のように語られる。

我、今こゝこの良知を信じ得ば、真是真非は、手に信まかせて行ひ去ゆき、更に些かの覆蔵を著けず。我、今纔かに箇の狂者の胸次に做り得たり。使もし天下の人、都すべて我が行ひは言を掩おほはずと説くも也また罷やめん。(『伝習録』 卷下 一一一)

ここで陽明は、良知の命ずるままに実践する主体を「狂者」と呼び、世俗の声に左右されることのない一者として規定している。また『伝習録』巻中の顧東橋宛書簡の中に見られる「抜本塞源論」の「豪傑の士の、待つ所なくして興起する者」<sup>\*19</sup>も同義とみなしてよからう。

ここに陽明学的な「良知」の発現を「狂」概念とともに位置付け、さらにそこに吉田的な「狂」が付加される。たとえば『講孟箚記』巻四の下に次のような形で吉田の「狂」解釋が見られる。

『孟子』尽心下篇の「孔子は、中道を得て之に与せずんば、必ず狂猥か」を引いて、最上を「中道の士」、次を「郷原の人」とし、「猥者」「狂者」は決してよいものではないとしながらも、孟子の生きた乱世の時代を考えれば、「猥者」や「狂者」でなければ道を行い守ることはできなかつたとする部分である。

孟子 戦国の時に生まれ、其の道遂に流俗迂世に合はず。……孟子の任、至重至大、必ず気力雄健、性質堅忍の士を得て、其の盛業を羽翼するに非ずんば、何ぞ其の任を負荷するを得んや。是を以て孟子の狂者を重んじ、猥者を之に次ぎ、郷原を惡むの心事を付度すべし。孔子と雖も亦た同じ。（『講孟箚記』巻四下）

そして、幕末の今も孟子の生きた戦国時代と同様であるとし、

是の時に当りて中道の士の遽に得べからざるは、古今一なり。故に此の道を興すには、狂者に非ざれば興すことあたはず。此の道を守るには、猥者に非ざれば守ることあたはず。則ち其の狂猥を渴望すること、亦た豈に孔孟と異ならんや。

と述べている。<sup>\*20</sup>

以上のような危機的時代に於ける「狂者」の実効性を説く思想が、上海渡航によって高杉の中で、具体的な形で

結実し、彼は帰国後一変した姿を見せることになる。ただし、それが単純な攘夷論でなかったことは確かであり、<sup>\*21</sup>このことは

単身嘗到支那邦 単身嘗て支那の邦に到る

火艦飛走大東洋 火艦飛走す 大東洋

交語漢韃与英仏 語を交ゆ 漢韃と英仏と

欲捨我短学彼長 我が短を捨てて彼の長を学ばんと欲す

〔無題〕元治元年四月七日、在野山獄

という詩の「我が短を捨てて彼の長を学ばんと欲す」という語がよく物語っている。<sup>\*22</sup>この上海渡航以後に高杉詩に発現する「狂」「儷生」については、次節で述べる。

### 三 「狂」と「儷生」

本節では高杉の詩を考える場合に最も重要な位置を占める「狂」と「儷生」という二つのモチーフについて考えてみたい。そしてこの二つのモチーフが、先の上海渡航と大きく関わっていることは言うまでもない。

#### (1) 「狂」に関して

高杉晋作が名のつた雅号の中には「狂生」「狂夫」「東洋一狂生」「西海一狂生」「東狂」等、「狂」字を冠するものが多く存する。先にも少し言及したように、この「狂」は師吉田はもとより、多くの志士たちが詩中に使用したモチーフではある。<sup>\*23</sup>しかし、それが現実と相即不離に結びついていたかは別の問題である。

さて高杉の「狂」概念は、明らかに上海より帰国した後に発現したものである。というのも高杉には渡航前年に次のような詩作があるからにほかならない。

不問人間狷与狂 問はず 人間の狷と狂と

致誠塵世是忠良 誠を塵世に致すは是れ忠良

請看紅紫滿園色 請ふ看よ 紅紫滿園の色

独有桜花存国光 独り桜花の国光を存するあり

(「有執御命、賦小詩二首、録一」文久元年三月一日)

ここで一旬目に本書第1章に於て言及した『論語』の「狷」と「狂」の概念が提示されている。二旬目との関わりから、荒廃した時代に「誠」を貫くことこそが問われるものであり、その際、「狷」「狂」は問われるべき事ではないとする高杉の心情を読み取ることができる。しかしながら、ここでは明らかに「忠良」「誠」に重きがおかれ、形態としての「狷」「狂」への高杉自身の注目度は低い。

師である吉田自身、「狂」を自称した存在であるから、その教えを受けていたことは疑いない。しかし、それが現実に現れるとなると、そこには何らかの契機が必要となつてこよう。高杉の場合、それが上海渡航であった。

さて上海より帰国した後、高杉は狂拳へと走る。帰国直後の七月の無断での汽船購入事件、十一月三日の横浜の公使館襲撃計画<sup>\*24</sup>、一二月一二日の御殿山の英国公使館襲撃<sup>\*25</sup>と止まる所を知らない。彼の胸に去来する「狂」の真意は何だったのか。

まず彼が無断で汽船を購入した際、桂宛の書簡に記した文から見てみたい。

狂拳の義は在京の節より決心致し居り候事なれ共、……弟狂拳一件の義申し上げず共、国を思ひ君を思ふの心

深き人なれば分かる事には候へ共、……右故此の度も断然独志狂放のそしりを顧みず、この狂拳には及び候。一点寸志天下鬼神に負ざる事、我が心に誓ひ居り候。<sup>26</sup>（文久二年閏八月）

ここに「国を思ひ君を思ふの心」から「独志狂放のそしりを顧みず」に、狂拳に及んだと明示してある。次は、横浜各国公使館襲撃を予定していたその日の詩作である。

欲補邦家急 邦家の急を補はんと欲し

抛身致寸誠 身を抛なげつて寸誠を致す

任他塵世客 任まも他あら塵世の客の

呼我作狂生 我を呼びて狂生と作すに

（十一月十三日、将赴金沢斬夷人・文久二年）

この詩では「狂生」が「塵世の客」と対比されて詠まれていく。「塵世」たる「邦家」に「寸誠」を貫くという行為に対し、世間の者たちが私を「狂生」と呼ぶことなど気にはとめない、というものである。ここに高杉が言う「狂」は極めて相対的な概念であり、それは世間一般との認識の差から生じたものと見ることができ、したがって、その「狂」は「一般人とは異なる」という意を含んでいる。即ち「目覚めぬ大衆」<sup>\*27</sup>と「目覚めた一者（自己）」との対立という図式の提示である。上海での実体験に裏打ちされた、すなわち見せかけのスタイルでも、単なる詩作上のモチーフでもない「狂」を詩中に見て取ることができる。先の詩との差異は、前者が自らの「狂」を問わず、しかも桜花に目をやる余裕があるのに対し、後者は「邦家の急」の語に象徴されるように、自らの「狂」に対する自覚的な開き直りが感じられる点にある。

これは以下三句についても同様である。



為国破産家亦輕 国の為に産を破る家 亦た輕し  
不辭世上喚狂生 世上の狂生と喚ぶを辭せず  
友人猶有不忘義 友人に猶ほ義を忘れざるあり  
昨日門頭呼我名 昨日 門頭に我が名を呼ぶ  
〔囚中作〕・元治元年五月八日、在萩野山獄

宿志平生有所期 宿志 平生 期する所あり  
放狂不管世人疑 放狂 世人の疑ひに管せず  
秋風昨夜吟魂冷 秋風 昨夜 銀魂冷やかなり  
獨立江頭折柳枝 獨り江頭に立つて柳枝を折る  
〔謾吟〕・慶応元年八月浣、捫虱處

我生寄節士 我が生は寄節の士  
異于世塵人 世塵の人に異なる  
訪汝遂何事 汝を訪ぬるは遂に何事ぞ  
惟將愛其心 惟だ將に其の心を愛さんとす  
〔訪偉娘喜世子即吟、楠樹逸史〕・慶応二年正月、在関

それぞれ「世上」と「狂生」、「世人」と「放狂」、「世塵の人」と「寄節の士」とが対比させられている。すなわち高杉の「狂」とは、彼の絶対的「狂」を意味するものではなく、世俗との対立の中から生まれた、数少ない覚醒者としての相対的「狂」に他ならないのである。

そして、「狂」であるが故に、この時勢に対応できるとするのが次の詩である。

内憂外患迫吾州 内憂外患 吾が州に迫る

正是邦家存亡秋 正に是れ邦家存亡の秋とよ

将立回天回運策 将に回天回運の策を立てんとす

捨親捨子亦何悲 親を捨て子を捨つ 亦た何ぞ悲まん

〔題焦心録〕・元治元年一〇月、在萩

内姦如狼虎 内姦は狼虎の如く

外賊是豚羊 外賊は是れ豚羊

烽火四隣起 烽火 四隣に起り

亦当發我狂 亦た当に我が狂を發すべし

〔次某韻〕・慶応元年六月五日、在捫蝨處

いづれも「内憂・内姦」「外患・外賊」に対処するには「狂」でなければならぬ、という詩想が存する。前者には「狂」という概念は見えないが、「親を捨て子を捨つ」というフレーズは、世間的常識からの逸脱を示唆するものであり、意味するものは「狂」に等しい。

## (2) 「儷生」に関して

高杉の詩を考える場合の、もう一つの重要なモチーフが「儷生」である。これはたとえば『論語』衛霊公に

志士仁人は、生を求めて仁を害することなし。身を殺して以て仁を成すことあり。

とあるように、志士とは、自らが死ぬことによつて仁を成就できる時には死を選ぶ存在であり、そういう時に何もせずに生きながらえることを「生を偷む」とするのである。

この記述以来、「生を偷む」ことは、志士として最も恥ずべき行為として語られることになる。高杉の詩にも「偷生」をモチーフとしたものは多数見られ、それは上海渡航以前より存する。

好得故人為佚遊 好し 故人を得て佚遊を為す

新詩佳酒可消憂 新詩佳酒 憂を消すべし

唯慙身与歳時老 唯だ慙づ 身の歳時と与に老ゆるを

心事齟齬夏又秋 心事は齟齬す 夏又秋

〔贈寺島生〕文久元年六月一日)

自慙少壮老無為 自ら慙づ 少壮無為に老ゆるを

身苦俗彊又怨誰 身は俗彊に苦しむ 又誰をか怨まん

人生浮沈順逆事 人生の浮沈 順逆の事

一任天命与天資 一に天命と天資とに任ぜん

〔和作来訪乃賦小詩〕文久元年六月二十日)

しかし、これらの詩を見ると、「偷生」が単なる詩作上のモチーフとして用いられていた感がある。というのも、両首に見える「唯だ慙づ 身の歳時と与に老ゆるを」「自ら慙づ 少壮無為に老ゆるを」というフレーズは、本来若

い時に実感を以て語られるものではない。加えて、真の「儉生」という認識は、「死を決す」べき状況に於て、それをしなかつた際に初めて生まれるものであるからに他ならない。上海に渡航して高杉は、初めて師吉田の教えを実体験する。すなわち「大事」の明確な認識は上海で為されるのである。したがって、渡航以前の高杉にとって「儉生」が詩作上の常套語以上の何ものでもなかつたことは想像に難くない。それは帰国直後の桂苑の書簡の中にはつきりと記されている。

勤王の志は一朝一夕の事にはござなく候。必竟今日までは儉生仕り候は、成る丈には国と与に仕りたき故にござ候。国と与にするの時節は今日を失ひては千万年待ちてもござなき義と存じ候。<sup>\*28</sup>（文久二年八月二十六日）

生を投げ出す（仁を為す）べき時は今をのぞいて他にはない、とする高杉の「儉生」概念は単なる詩作上のモチーフではなく、実感としての強い嫌悪の対象として述べられていくようになる。

五十駅程幾往還 五十の駅程 幾たびか往還す

更慙狂士老塵間 更に慙づ 狂士の塵間に老ゆるを

客窓夜々寒燈下 客窓 夜々 寒燈の下

夢裏猶看故国山 夢裏 猶ほ見る 故国の山

〔途上偶感〕文久三年三月上旬

儉生決死任時宜 生を儉むも死を決するも時宜に任ず

不患世人論是非 世人の是非を論ずるを患へず

嘗在先師寄我語 嘗て先師の我に寄するの語在り

回頭追思涙空垂 頭を回して追思すれば涙空しく垂る

〔囚中作〕元治元年四月一日)

酬国胆心万古存 国に酬ゆる胆心 万古に存す

偷生愧我負鴻恩 生を偷んで愧づ 我が鴻恩に負くを

〔毛利登人平生議論与宍戸合、憶其決死之心、亦応同也〕慶応元年五月)

同舍友朋尽忠死 同舍の友朋 尽く忠死し

独君与我有偷生 独り君と我とのみ生を偷むあり

合心従是嘗辛苦 合心 是より辛苦を嘗めん

欲学景清与幸盛 学ばんと欲す 景清と幸盛と

〔贈佐世八十郎〕慶応元年九月)

いづれも「偷生」をモチーフとしたものではあるが、上海渡航以前とは趣を異にしている。とりわけ慶応元年に詠まれた三首目と四首目には師吉田の恩に報いることなく生き続けていることへの、そして前年の元治元年の禁門の変に関連して忠死した久坂玄瑞・来島又兵衛(一八一六〜六四)・真木和泉(一八一二〜六四)・毛利登人(一八二一〜六四)などの朋友に遅れをとって生き続けていることへの慙愧の念を読み取ることができる。この後死に至るまで、高杉は一方で劳咳に侵されながら、自らが最も嫌悪した「偷生」に自らが身を置いていることへのジレンマと戦いつつ生きることになる。次節では、そういう状況の中で新たに隠棲志向が発現する彼の末期の詩作を考えてみたい。

#### 四 末期の詩作

慶應年間の頃、高杉は長州藩の海軍総督という地位にあった。しかしながら、労咳の病状は日増しに悪化し、慶應二年十月には、その職も解任される。たとえば前原彦太郎（佐世八十朗、一誠・一八三四～七六）宛書簡中には、

小生も先日、酒樓まかりこし候日より、少々発熱の氣相鎮まり候ところ、又々胸を痛み昨日は少々たんへ血もまじり候位の事ござ候。<sup>29</sup>（慶應二年二月二日）

とあって、病状の進行が確実に高杉の身体を犯していることを伺い知ることができるといえる。そういう状況の時、それまでの高杉には見られなかった「逸民」への志向が詩中に垣間見られるようになる。その前後の詩作を考えてみたい。長州藩家老から放蕩をたしなめられた際の詩作である。

東国行情未可謀 東国の行情は未だ謀るべからず

潜心只待起兵秋 潜心 只だ待つ 兵を起すの秋<sup>と</sup>

俗人不識佯狂志 俗人は識らず 佯狂の志

内患却多于外憂 内患は却って外憂より多し

〔游萩城訪悠悠老人〕・慶應二年、一、二月頃）

先にも言及したように、もともと高杉の「狂」は「世俗」との対立の中で語られ、その俗世の理解を求めるような性質のものではなかったはずである。たしかに、この詩も「俗人」と「佯狂（いつわりの狂）」との対比ではある。しかし、ここで注目すべきは「佯狂」と言って、自らの「狂」を偽りのものとしている点にある。本来、良知の発

現による「狂」に真も偽も存在するはずはなく、ここで高杉が「佯狂」と言い、自らの「狂」を偽と言うことは、先の相対的「狂」概念とも関連して、彼の理解者のいない孤独感によって吐露された、いわば弱音にほかならない。このことは四句目の「内患（目覚めぬ日本人）」は「外憂（諸外国の圧力）」よりも多いとする語句からも明らかである。

加えて当時の高杉は、病身故に「狂」を行為として現実社会に示し得なくなっていた。これはまさに高杉が最も嫌悪した「偷生」にほかならず、加えて理解者もない彼は、晩年ジレンマと孤独感の中で生き続けなければならなかった。とりわけ、孤独感は次のような形で詩作上にも現れている。

万物元来有始終 万物元来始終あり

人生況少百年躬 人生況や百年の躬 少なし

競名争利营营没 競名争利营营として没す

不識何娛存此中 識らず何の娛しみか此の中に存せん

（「終宵難眠、寤寐之間、得七絶三首」・慶応二年一月、在捫蝨處）

「万物元来始終あり」という『周易』的なフレーズの中に、高杉の死の意識を読み取ることができる。加えて「競名争利营营として没す。識らず何の娛しみか此の中に存せん」というフレーズには、名誉や利益を求める事への虚無感があり、それは先の詩に見えた高杉の心情の証左ともなる。

また次のような詩も見える。

売刀買山住 刀を売り山を買うて住む

閑臥独怡怡 閑臥して独り怡怡たり

多病雖辭客 多病客を辭すと雖も

寸心豈負時 寸心 豈に時に負かんや

作書書更拙 書を作せば書更に拙

探句句成遲 句を探れば句成ること遅し

恨我少年日 恨むらくは 我 少年の日

学兵不学詩 兵を学んで詩を学ばざるを

〔山中偶成〕・慶応二年一月頃、在捫蝨處

かつて「区々として腐儒を学ぶ」と詠んだ高杉自身の自らの人生への回顧である。心とらいた状態の中で、初めて高杉は自らを振り返る余裕を得たと言える。加えて上記二作にはこれまで見られなかった「終」の意識・「怡怡（こころ和らぐさま）」の心境という詩情が盛り込まれている。

最後に慶応三年四月一〇日に没した高杉が遺した同年の詩句から、彼の死直前の詩想を考えてみる。まず慶応三年元旦の詩作を見てみたい。父宛の書簡中に見えるものである。

遁世無用人間礼 遁世には無用なり 人間じんかんの礼

不帽不袍只隱睡 帽せず袍せず 只だただ隱睡いんすいす

市中君子頻奔馳 市中の君子は頻りにしき奔馳ほんちし

山裡病夫夢結時 山裡の病夫は夢結ぶの時

入門剥啄投刺去 門に入り 剥啄はくたく 刺を投じて去る

初知今朝是元日 初めて知る 今朝は是れ元日なるを

〔拙策二首 一〕・慶応三年元旦、在捫蝨處、書簡中



ここにはつきりと上海渡航後に見られた「世俗との対立」から「世俗からの逃避」への変化を見て取ることできる。そして「人間の礼」「時間の粹」が自分には無用のものであり、「隠睡して夢を結ぶ」ことを主意としている。この「隠睡」を破る者が他ならぬ鶯であった。死直前に詠まれた次の詩である。

一朝檐角破残夢 一朝 檐角に残夢を破る

二朝窓前亦弄吟 二朝 窓前に亦た弄吟す

三朝四朝又朝朝 三朝 四朝 又た朝朝

日日懇来慰病痛 日日懇来し病痛を慰む

君於方非有旧親 君は方に於て旧親あるに非ず

又非寸恩在我身 又た寸恩の 我が身にあるに非ず

吾何於我誤看識 吾何ぞ我に於て看識を誤る

吾素人間不容人 吾素人間 人に容れられず

故人責吾以詭智 故人 吾を責むるに詭智を以てす

同族目我以放恣 同族 我を目するに放恣を以てす

同族故人尚不容 同族 故人 尚ほ容れず

而君容吾遂何意 而るに君 吾を容る 遂に何の意ぞ

君勿去老梅之枝 君 去るなかれ 老梅の枝

君可憇荒溪之湄 君 憇ふべし 荒溪の湄

寒香淡月我所欲 寒香淡月は我が欲する所

為君執鞭了生涯 君が為に鞭を執って生涯を了らん

(「数日来鶯鳴檐前不去、賦之与」・慶応三年二月前後、在捫蝨處)

「隠睡」する自分の「残夢」を破る鶯の設定である。この詩は、単純に夢うつつの状態の時、鶯の鳴き声で目覚めたことを意味しない。というのも、最末尾部の「君が為に鞭を執つて生涯を了らん」という語が、「残夢を破る」と対応しており、鶯の鳴き声によって、「故人」「同族」から容れられなかったことによる孤独感を超克し、高杉は再び「狂」として終わることを決意しているからである。

自らを「狂」として生きてきた高杉の、死を前にした独白である。毎朝美しい鳴き声を伝える鶯とはうらはらに、「狂」として世に抗い続けてきた自分に「故人 吾を責むるに詭智を以てす」「同族 我を目するに放恣を以てす」とあるように、周囲の目は冷ややかであった。結局、誰からも理解されず孤立無援となり、「隠睡」に入った高杉は、鶯によって「残夢を破」られ、再び戦場へ赴く決意をするという詩意である。

## おわりに

誰からも理解されることのなかった「良知」に発現する高杉の「(佯)狂」の背後に存した真意、それは師吉田から教えられ、そして上海で追体験した「儉生」への嫌悪であった。自らを「目覚めた一者」として位置づけ、俗世を「真狂」としたことへの当然の帰結として、彼は常に孤独感にさいなまれた。そして、この孤独感がさらなる「狂」を誘発した。それでも高杉が生きていけたのは、辞世の句として有名な「おもしろきこともなき世をおもしろく」という精神であった。すなわち高杉の「狂」は、世俗との対立を意味すると同時に、そこから生まれる孤独感を正当化する自浄能力をも有していたのである。いわば彼は「狂」を名のつた真の「狂」であり、それは純粋な「良知」の発現者であったことを意味する。その意味に於て、野村望東尼(一八〇六―六七)の「すみなすものは心なりけり」という下の句は、まさに高杉の理解者と呼ばれるにふさわしいものと言えるのではないだろうか。

\*1 高杉の詩・書簡等に関しては、堀哲三郎『高杉晋作全集』（新人物往来社、一九七四年）を底本とし、特に詩については高杉晋作記念館所蔵の『東行自筆遺稿』（二種）、『草稿』、『甲子残稿』、『捫蝨處草稿』と対照した。その際、記念館学芸員一坂太郎氏（当時）に御助力いただいた。感謝申し上げる。

\*2 東行先生五十年祭記念会編『東行先生遺文』（民友社、一九一六年）所収の年譜（以下「年譜」と略記）の安政四年に「二月十四日、先生萩明倫館入舎生を命ぜらる」とある。また同年に「是年先生吉田松陰の松下村塾に入る」とある。

\*3 「腐儒」「俗儒」「迂儒」等、すべて同義である。例を二、三挙げるならば、たとえば新聞『日本』の社説で有名な陸羯南（一八五七～一九〇七）の「不如意行」（『陸羯南全集』（みすず書房、二〇〇七年）巻一〇所収、一九二頁）に

悔信迂陋漢儒説 悔ゆ迂陋なる漢儒の説を信じ

摘章探句殆誤身 摘章探句して殆ど身を誤るを

とある。また勝海舟の『氷川清話』（角川文庫、一九七二年）には

毎度ながらしゃくにさわるのは、今日の漢学者だ。人を感化する道徳も、世を救済する経綸もまるでないくせに、修身齊家だとか、治国平天下だとか、ほらを吹きまわったり、それでなければ、役にもたない詩賦文章をひねくったり、よせばよいのに訓詁考証にこせこせしたり、それでいて、当人はあつぱれ天下の儒者だといってとくいきがるのが、おれにはおかしい。こんなやつらはひっきよう社会のごくつぶしだ。居候だ。

などである。

\*4 反幕・倒幕・討幕の概念規定については、『思想の海へ（5）——倒幕の思想・草莽の維新——』（社会評論社、一九九〇年）に於て寺尾五郎氏が解題で詳細に論じておられる。

\*5 『高杉晋作全集』（上）所収。一〇〇頁。

\*6 『高杉晋作全集』（上）所収。四一頁。

\*7 『高杉晋作全集』（上）所収。六四頁。

\*8 『高杉晋作全集』（上）所収。七四頁。

\*9 青山忠正氏は『幕末維新奔流の時代』（文英堂、二〇一〇年）六九頁に於て「松陰が松下村塾で、門人たちに教えて

いた内容は、こうしたエネルギーを闇雲な力のままに終わらせず、現実の行動に具体化させていく方法だったのではないかと述べておられる。

\* 10 幕末期に行われた四回にわたる幕府の上海遣使については宮永孝氏が『高杉晋作の上海報告』<sup>レポート</sup>（新人物往来社、一九九五年）に於て詳細に論じておられる。また奈良本辰也氏の『高杉晋作』（中央公論社、一九八六年）、田中彰氏の『日本の近世（18）』第4章「幕末期の危機意識」（中央公論社、一九九四年）も高杉の上海渡航について詳しく言及しておられる。

\* 11 『清遊五録』の序に次のようにある。

予は支那行の命を受け、……予因りて策を決し、江戸を発し、崎港に到り、幕吏某に陪従して、支那上海港に遊ぶ。其の間、聞見せし所を録して一冊子と為し、遊清五録と謂ふ。航海日誌・上海掩留録・外情探索録・内情探索録・崎陽雜録、是なり。（『高杉晋作全集』（下）所収。一四一頁）

\* 12 『高杉晋作全集』（下）所収。一四四頁。

\* 13 『高杉晋作全集』（下）所収。一五九頁。

\* 14 『高杉晋作全集』（下）所収。一五一頁。

\* 15 『高杉晋作全集』（下）所収。二二二頁。

\* 16 『高杉晋作全集』（下）所収。二〇七頁。

\* 17 『高杉晋作全集』（下）所収。二二二頁。

\* 18 「采薇」は『史記』伯夷・叔斉列伝に於ける所謂「采薇之歌」の

登彼西山兮 彼の西山に登り

采其薇矣 其の薇を采る

以暴易暴兮 暴を以て暴に易え

不知其非矣 其の非を知らず

神農虞夏 神農虞夏

忽焉没兮 忽焉として没す

我安適歸矣 我安くにか適に帰せん

于嗟徂兮 于嗟徂かん

命之衰矣 命の衰へたるかな

に基づき、「観菊」は陶淵明の「飲酒其五」の

結廬在人境 廬を結びて人境に在り

而無車馬喧 而も車馬の喧しきなし

問君何能爾 君に問ふ何ぞ能く爾ると

心遠地自偏 心遠く地自ずから偏なり

採菊東籬下 菊を採る 東籬の下

悠然見南山 悠然として南山を見る

山氣日夕佳 山氣 日夕に佳し

飛鳥相与還 飛鳥 相与に還る

此中有真意 此の中に真意あり

欲弁已忘言 弁せんと欲して已に言を忘る

に基づく。

\*19 『伝習録』巻中の顧東橋宛書簡に見えるもの。またその淵源は『春秋左氏伝』昭公九年の「伯父、若し冠を裂き冕を毀り、本を抜き原を塞ぎ、専ら謀主を棄つれば、戎狄と雖も其れ余独りに何かあらん」という記述による。またこれについては荒木見悟氏の

活発発地な良知の自己内衝動に身を任せる時、もはや世評をかえりみ、右顧左眄する余裕はない。世間から「狂を病み心を喪った」人間と呼ばれてもかまわぬではないか。「天地万物一体の仁は、疾痛切迫、やめようと思っても、おのずからやめられないものがある」というのである。こうして陽明はみずからを「狂者」（常識はずれの人間）に位置づけ、豪傑同志の士とともに、手を取り合つて、社会悪に挑戦しようと呼びかけるのである。（『近世儒学の発展―朱子学から陽明学へ―』・『世界の名著 朱子・王陽明』五三頁、中央公論社、一九七四年）

という解説が最もわかりやすい。

\*20 吉田の「狂」に関する認識については、溝口雄三氏の『李卓吾』（集英社、一九八五年）が明解である。氏はそこで

李卓吾の「童心説」に対する吉田の「真仮」論に言及しておられる。

\* 21 当時の攘夷論が単純に反開国論とは結びつかないことは周知の所であるが、これについては注4既出の寺尾五郎氏の解題が詳しい。また青山忠正氏は注9既出の著作六二頁に於て、水戸藩や長州藩の対幕府用の政策としての攘夷を「ためにする攘夷」として論じておられる。

\* 22 ちなみに田中彰氏は『高杉晋作と奇兵隊』（岩波書店、一九八五年）の中で、同詩を引いて高杉のナシヨナリズムが単なる攘夷主義ではないことの例証とし、加えてこれらの体験で得た西洋の知識が民兵組織奇兵隊結成の一つの伏線となつたと述べておられる。また青山忠正氏は注9既出の著作六五頁に於て吉田の攘夷論に言及し、それを「単に夷狄を攘うのではなく、夷狄を制し、皇国の武威を世界にふるうハイレベルの国家論」と位置づけておられる。

\* 23 吉田の「狂」をモチーフとした詩について二、三示すと、『東行前日記』に

人譏狂頑兮 人は狂頑と譏り

郷党衆不容 郷党の衆は容れず

あるいは

嗟我狂悖士 嗟我 狂悖の士

檻車送関東 檻車 関東に送らる

などといった詩が見られる。またこの外、佐久間象山や西郷隆盛、武市瑞山等、「狂」をモチーフとした詩作は枚挙に暇がない。これに関しては嶋岡晨氏が『志士たちの詩』（講談社現代新書、一九七九年）の中で論じておられる。

\* 24 「年譜」には「先生、志道聞多・久阪玄瑞等と横浜各国公使館を襲ひ、外国公使を刺さんとして果さず。尋で其志を貫かんとし之が血盟書を作る」とある。また『維新史料綱要（4）』（東京大学出版会、一九六六年）文久二年十一月十三日に「幕府、外国奉行竹本正明・目付沢簡徳ヲ神奈川ニ派遣シ、萩藩士高杉晋作等ノ暴挙ニ備ヘシム」（『枢密備忘』）、「是夜、萩藩世子毛利定広、馬ヲ馳セテ蒲田梅屋敷ニ抵り、藩士高杉晋作等ヲ召還シテ外人襲撃ノ挙ヲ論止ス」（『武市瑞山関係文書』ほか）とある。

\* 25 「年譜」には「先生、志道聞多・久阪玄瑞等と御殿山新築中の英国公使館を焼く」とある。また、『維新史料綱要（4）』（文久二年十二月十二日）に「萩藩士高杉晋作・同久坂玄瑞・同有吉熊次郎・同大和弥八郎・同長嶺内蔵太・同伊藤俊輔・同白井小輔・同赤禰幹之丞・同堀真五郎・同福原乙之進・同山尾庸造・同志道聞多、御殿山ニ建築中ノ英国公使館ヲ火ク」

『枢密備忘』ほか」とある。

\* 26 『高杉晋作全集』(上) 所収。二二二頁。

\* 27 吉田の「狂夫の言」の冒頭に「天下の大患は、其の大患たるを知らざるに在り。……」とあり、高杉の「塵世の客」の考え方の基本がここに見られる。

\* 28 『高杉晋作全集』(上) 所収。二二四頁。

\* 29 『高杉晋作全集』(上) 所収。五七四頁。

\* 30 『周易』の「消長」「屈伸」の理論は敗北の中で作詩上のモチーフとして用いられる。もともと人生には浮き沈みがあるという意味合いを持つこの言葉は、作詩者が「長」「伸」の状態にある時はほとんどモチーフとしては登場してこない。たとえば雲井龍雄の「呈息軒先生」(その二)は彼が東京へ檻送され死刑を待つ時に詠まれたものだが、そこにも

天数有消長 天数に消長あり

人道有隆汚 人道に隆汚あり

という同旨のフレーズが見られる。

\* 31 福岡藩の尊攘派歌人野村望東尼と高杉の交友については夙に知られた所である。ちなみに西郷隆盛には「比丘尼に贈り奉る」という詩があり、

雌鴿驚雄夏夏声 雌鴿 雄を驚かす 夏夏の声

頻呼朋友励忠貞 頻りに朋友を呼びて忠貞を励ます

翁然器重邦家宝 翁然 器は重し 邦家の宝

最仰尊攘万古名 最も仰ぐ 尊攘万古の名

と詠んでいる。

### 第3章 西郷隆盛の詩想 —みずからへのまなざし—

#### はじめに

先に言及した雲井と高杉はともに激しい性情と詩想とを有し、「偷生」を嫌悪しながらも労咳に冒されて「偷生」を余儀なくされ、自己矛盾を抱えつつジレンマの中で作詩を続け死に至ったという経歴を持つ。しかし両者の詩想は、異なった形に具現化されていた。東北の敗者として終始辛酸を舐め続けた雲井が管仲・藺相如・張良といった中国屈指の政治家を自らに喩えたり、「嘉遼」「鳳兮」といったモチーフを多用したりしたのに対し、維新の原動力とも言える長州の高杉は上海渡航以後「内憂外患」「狂」といったモチーフを多用して詩作を行うという、そこに時代や地域の反映も看取し得た。

本章はこのテーマの各論の一つとして、幕末から明治初期にかけての雄、薩摩藩士西郷隆盛の漢詩をとりあげる。西郷は思想的・精神的な方面において何を問題とし、それにどう対処してきたのか。そして何よりも西郷は自らを如何なる存在として位置づけていたのか。本章では、西郷が残した漢詩を手がかりに、これら問題について考えてみたい。

西郷に対する史的アプローチは様々な方向から試みられ、その数も膨大なものであるが、彼の漢詩を正面から対象とした研究はほとんど見られない。この点からも従来の西郷理解に対して何らかの新機軸が提出できればと考える。

\*

明治一〇年西南戦争の際、官軍として従軍した旧会津藩家老山川浩が次のような和歌を残している。



薩摩人 見よや東の 大丈夫が 下げ佩く太刀は 利きか鈍きか

戊辰戦争の時、最後まで主戦派であったとされる山川の無念を、今度は自らが官軍となって晴らせる、という胸の高ぶりが詠み込まれている。

ところが、かかる状況下にあっても、西郷個人に対しては、大久保利通の次男牧野伸顕の、

西郷は全国の士族に圧倒的な人望があった。奥羽、石川、水戸等、皆そうであって、士族はすべて西郷の人物を仰いでいた。（『回顧録』）

という証言、或いは大町桂月の

隆盛は明治十年に叛旗を翻したり。されど、今日、日本国民は、隆盛を崇拜するものこそ多けれ、国賊と目するものは、絶えて無かるべし。（『桂月全集第五卷』）

という証言がある。つまり西郷自身の評価は全く衰えることがなかったという指摘であり、また西南戦争の首魁としての西郷に対しても次の福沢諭吉、重野安繹、洪沢栄一の証言の如くである。

乱の原因は政府に在りと云ふて可なり。……之（西郷）を死地に陥れたるものは政府なりと云はざるを得ず。（福沢諭吉『明治十年丁丑公論』）

十年の変は、隆盛、之を主とすと雖も、其の党の之を激成して、隆盛も亦制止するあたはず。（薩藩史研究会

編『重野博士史学論文集下巻』<sup>\*9</sup>

一身の利害を没却して、他のために計るといふ寛仁の態度は、維新三傑の内でも特に大西郷に其の著しきを見る。併し後日になつて冷静に考へて見ると、大西郷は余りに仁愛に過ぎて、遂に其の身を過らるるに到つたと云はなければならぬ。彼の明治十年の乱が起つたなぞも、畢竟大西郷が部下や門弟に對し余りに仁愛に過ぎた結果であつて、仁愛に過ぐる余り、其の一身も同志の仲間に犠牲として与へられたので、遂に彼の如き始末となつたのであると察せられる。〔青淵回顧録上巻〕<sup>\*10</sup>

この点は官報『東京日々新聞』の福地源一郎<sup>\*11</sup>を以てしても、

西南の乱は実に西郷翁の志にあらずして、……其身を以て羽翼の犠牲に供したる者なりと云はざる可からず。  
〔明治文学全集十一〕所収「福地桜痴集」<sup>\*12</sup>

と言わしめるほどであつた。

これらの証言<sup>\*13</sup>に明らかかなように、幕末維新期の様々な対立構造の枠組みを超えた部分が西郷にはあつた。そして西南戦争時における西郷評に関して言えば、それは彼をとりまく者たちの意志であり、西郷は彼らの御輿にまつりあげられたのだとするものが多い。<sup>\*14</sup>しかし、西郷をとりまく者たちを育ててきたのは西郷本人に他ならない。換言すれば、彼らは西郷の生き様を見続けてきた者どもであつた。

本章は、こういつた西郷本人の「仁愛に過ぎ」「犠牲に供す」という性情に関わる諸問題について、西郷の詩文及び当時の西郷評を手がかりに考えていこうというものである。

\*

『西郷隆盛全集』<sup>\*15</sup>に収録されている西郷詩は全部で一七九首である。さて、西郷の詩作に関しては、岡谷某の次のような証言がある。

詩は余り感服した詩もないようでござります、何にせよ精神より出づるので……。〔史談会速記録第十一輯〕<sup>\*16</sup>

ここに言う「感服した詩」が、どういったものを意味するのかは断言できないが、次の重野安繹の証言と合わせ考えれば、多分に技巧的なものを意味するものと思われる。

西郷の詩は、拙者が国や大島に居る時分は直してやつた。拙者と離れてからは、川口良次郎といふ人に詩を直して貰った。又児玉源之丞天雨にも直して貰った。(薩藩史研究会編『重野博士史学論文集下巻』<sup>\*17</sup>)

またこの証言から、西郷は自らの詩を常にこれらの人物に添削してもらっていたことになり、それは逆に死後にその詩が本人の意志に関係なく改竄されることは少なかったとも考えられる。

本章では、あくまで西郷の心情は詩中に吐露されているとの立場を取って、考証を進めていきたい。そして西郷にとって重要な時期の詩作から、その時々彼の心情をさぐろうと試みる。その際、重要な時期として選択したのは以下の三期である。

第一期 流刑時

第二期 戊辰前後

第三期 六年政変時

本来ならばここに西南戦争時という項目もあってしかるべきなのだが、この際の漢詩は全く残されていない。また詩中に詠み込まれた西郷の心情から、その特徴を浮き彫りにしようとも試みる。今回注目したのは次の二点であ

る。

1 屈原・伯夷・叔齊・張良・韓信

2 理想とする生き方

なお、この節で論じる詩は制作年がはっきりとせず、前者の分類に組み込めないという事情もある。以下、この順にそって考証を進めていく。

## 一 流刑時の詩

西郷の流刑は幕末二度に及んだ。一回目は一八五九年（安政六）二月から翌年一月に至るまで奄美大島に流された。これは僧月照庇護に関わる罪に因るもので、月照庇護を藩庁が拒むと知るや、月照とともに入水自殺を図る。結果、月照のみ水死し、西郷は九死に一生を得る。その際、西郷が詠んだ

大君の 為には 何か惜しからん 薩摩の瀬戸に 身は沈むとも

という和歌は残っているが、はっきりと大島流刑時の作と断定できる漢詩はない。しかしながら、この月照死亡事件が後の西郷に大きな影響を与えたことは十分に考えられ、重野安繹も次のように述べている。

南洲は此の事あつてより後は、自分が死損<sup>そこな</sup>つて、和尚に気の毒であると云ふ考が、脳髓に留つて居て、終始死を急ぐ心持があつたものと思はれる。（薩藩史研究会編『重野博士史学論文集下巻』\*18）

ここに重野が言う西郷が生涯持ち続けたという「死を急ぐ心持」が、実際どれほど西郷の中にあつたかは知りよ

うもないが、捨て置くことはできまい。これに関して重野は、

生死を見ること何とも思はない。死を見ること帰するが如しといふ風も、禅学から余程助けて居る。(薩藩史研究会編『重野博士史学論文集下巻』<sup>\*19</sup>)

とも言い、西郷の「死を見ること帰するが如し」という心情を禅学の影響としている。同様の言は大久保利通の証言の中にも次のように見られる。

西郷は従来甚だ感情に敏く、謂はゆる多感の丈夫なり。而して其血性燃ゆる如き熱情を制し来りて、事物に対し枯木冷灰し去らんと欲し、此に於て禅を学べり。惟おもふに無為恬澹を以て身を処し、又世を処するは、或は感情過甚の人に益する所あらん。然りと雖も西郷の禅は西郷の望に副はず、反て西郷を意外の地に導き去れり。即ち禅は彼に益せずして彼を害し、妙にも感情を変化し傲世\*20の氣風を生ぜり。傲世は隱逸と相随伴す。是れ禅学家の常に免れ難き病なり。西郷も実に此に陥れり。彼れ袖を払うて故山に歸臥せるも、斯病一の誘因と為れるなり。彼れ若し隱逸を悦ばず、飽くまで世俗に混じ、俯仰時務を視て専心国事に従はば、何ぞ官を去るを須もちひんや。又何ぞ慘劇を演じて奇禍に罹る可けんや。(前島密・市島謙吉編『鴻爪痕』<sup>\*21</sup>)

この証言で注目すべきは「禅は彼に益せずして彼を害し、妙にも感情を変化し傲世の氣風を生ぜり。傲世は隱逸と相随伴す」という部分であり、「傲世の氣風」「隱逸」等の語は、先の「死を急ぐ心持」「死を見ること帰するが如し」とともに西郷理解のキーワードとなろう。

二回目は一八六〇年(文久二)六月から一八六四年(元治元)二月に至るまで、徳之島(文久二八月まで)からさらに沖永良部島へと流された。これは下関待機という島津久光の命に反して京都で活動してしまつた事に対す

る罪であり、西郷の独断による活動が「実に逆心之者」（『島津久光公実紀』「老臣喜入撰津に与へる書」<sup>\*22</sup>）と判断された。

その沖永良部流刑時に西郷がいくつかの詩を残している。二首ほど見てみたい。

獄裡氷心甘苦辛 獄裡の氷心 苦辛に甘んじ

辛酸透骨看吾真 辛酸 骨に透つて吾が真を見る

狂言妄語誰知得 狂言 妄語 誰か知り得ん

仰不愧天況又人 仰いで天に愧ぢず 況や又人をや

（四八「偶成」<sup>\*23</sup>）

朝蒙恩遇夕焚阨 朝に恩遇を蒙り夕に焚阨せらる

人生浮沈似晦明 人生の浮沈 晦明に似たり

縦不回光葵向日 縦ひ光を回らさずとも葵は日に向ひ

若無開運意推誠 若し運を開くなくとも意は誠を推す

洛陽知己皆為鬼 洛陽の知己 皆鬼と為り

南嶼俘囚独窃生 南嶼の俘囚 独り生を窃む

生死何疑天附与 生死 何ぞ疑はん 天の附与なるを

願留魂魄護皇城 願はくは魂魄を留めて皇城を護らん

（一一二「獄中有感」）

天歩艱難繫獄身 天歩 艱難 繫獄の身

誠心豈莫慙忠臣

誠心 豈に忠臣に慙はづることなからんや

遙追事跡高山子

遙かに事跡を追う 高山子

自養精神不咎人

自ら精神を養ひて人を咎めず

(一二六「偶成」)

一首目の「仰いで天に愧はぢず」、二首目の「人生の浮沈、晦明に似たり」などから明白なように、西郷は罪を得た事自体は残晦していない。自らは一首目「氷心(清廉潔白な心)」の持ち主であり、二首目「誠を推す」のみであるとの詩意である。そしてむしろ流刑なるが故に、自らの職責を全うできない事へのいらだち、すなわち二首目の「洛陽の知己、皆鬼と為り、南嶼の俘囚、独り生を窃ぬすむ」が、彼の心を支配していたと見た方がよからう。ここに言う「洛陽の知己」とは、寺田屋事件(文久二年四月)において久光の命を受けた同じ薩摩藩の鎮撫使に上意打ちされて死んでいった有馬新七以下の薩摩尊攘派をさすものであろう。重野安繹が「沖ノ永良部にて別号を屈虫と書いた書状を……」(薩藩史研究会編『重野博士史学論文集下巻』<sup>\*25</sup>)と証言しており、西郷自身がこの流刑を「屈<sup>\*26</sup>」の状態として受け止めていたことは疑いようがない。と同時に、かかる現状は三首目「天歩(天運)」のなせるわざでもあり、寛政期における勤王の志士であり、寛政の三奇人の一人である高山彦九郎<sup>\*27</sup>を追い求めて「自らの精神を養い」「人を咎め」ることはすまいとも言ふ。ここで敢えて高山彦九郎を引くのは、或いは寺田屋事件で死んだ有馬新七が「今高山彦九郎」とあだ名されていたことにも関連しよう。

また、後に流刑時を回顧して詠んだ次のような詩がある。

世上毀誉輕似塵

世上の毀誉 軽きこと塵に似たり

眼前百事偽耶真

眼前の百事 偽か真か

追思孤島幽囚樂

追思すれば孤島幽囚の樂しみ

不在今人在古人 今人に在らず 古人に在り

(九九「偶成」)

この詩がいつ詠まれたものか定かではないが、この詩の中で流刑当時を「追思すれば孤島幽囚の楽しみ」と回想していることから推せば、この詩が詠まれた時に西郷が置かれていた状況はより厳しいものであったに相違なく、前半の「世上の毀誉、軽きこと塵に似たり、眼前の百事、偽か真か」は、その際の彼の苦悩を想像するに余りある。流刑時は、まだ西郷にとっては平穏な時期であったと言つてよい。そして、「幽囚の楽しみ」という語は、西郷自身を苦しめるものが、或いは西郷にそう思わせているものが「他(者)」であることを同時に想起させる。換言すれば孤独は彼にとって「楽しみ」の範疇に入り得るものであった。

## 二 戊辰前後の詩

元治元年、沖永良部より帰還して後、明治元年(一八六八)に至るまでの期間が、西郷にその名を為さしめた時期である。蛤御門の変から二度にわたる長州征伐、薩長連合、王政復古のクーデター、鳥羽伏見の戦い、江戸城の無血開城、戊辰戦争、版籍奉還、廃藩置県。これらすべての維新創業にかかわる諸事に西郷の名が見え隠れする。西郷の生涯において、最も彼自身の性情にかなった輝ける時と言つてよい。以下、この時期の西郷の詩を順を追っていくつか見てみたい。

まず、元治元年の第一次長州征伐の頃の作である。

一日貪閑軍務中 一日閑を貪る軍務の中

拳鞭奔馬到高雄 鞭を挙げ馬を奔せて高雄に到る



赤心難競丹楓樹 赤心競い難し丹楓の樹

霜氣侵肌圧髻紅 霜氣肌を侵し髻を圧して紅なり

(三)「高雄山」元治元年)

ここで自らの心情を「赤心(まごころ)」とし、それを「丹楓」すなわち紅葉に例えていることに注目したい。<sup>\*28</sup>  
この第一次長州征伐の際、勝海舟と会見し、西郷は長州討伐という強硬路線を変更して長州藩の謝罪恭順を求めようになる。そして奇兵隊等諸隊の屯集地である下関に入る。その際、自ら危地に入って事態を收拾しようとする心境を詠んだものが次の詩である。

誓入長城不顧身 誓って長城に入る身を顧みず

唯愁皇国説和親 唯だ皇国を愁へて和親を説く

譬投首作真卿血 譬<sup>たと</sup>ひ首を投じて真卿<sup>まこと</sup>の血と作る<sup>な</sup>とも

自是多年駭賊人 是より多年賊人を駭<sup>おどろ</sup>かさん

(一〇四)「偶成」元治元年)

三句目に引かれる顔真卿は、まさにこの時の西郷そのものであった。唐の安祿山の乱に於て、当時平原太守であった彼は弟の顔杲卿とともに義兵を挙げて安祿山軍の後方を脅かし、また李希烈のクーデターの際には、そこへ赴いて諭そうとして拘留され殺害されるという経歴を持つ。とりわけ後者の李希烈説得の図式に、西郷は自らの長州説得をオーバーラップさせた。

次に戊辰戦争終結後の詩をいくつか見てみたい。まず戊辰戦争から帰郷して明治元年から二年あたりの頃の作である。

柴門曲臂絶逢迎 柴門 臂を曲げて逢迎を絶つ

夢幻利名何足争 夢幻の利名 何ぞ争ふに足らん

貧極良妻未言醜 貧極まつて良妻未だ醜を言はず

時来牲贖心遭烹 时来らば 牲贖 心に烹に遭ふべし

願遁山野畏天意 願はくは 山野に遁れて天意を畏れ

飽易荣枯知世情 飽くまで荣枯を易へて世情を知らん

世念已消諸念息 世念 已に消えて諸念息<sup>や</sup>

烟霞泉石满襟清 烟霞泉石 襟に満ちて清し

(五三「失題」明治元、二年)

二句目の「夢幻の利名、何ぞ争ふに足らん」は、西郷が他の所謂維新の功臣とは一線を画していたことの一つのあらわれであろう。たとえば『西郷南洲遺訓（以下『遺訓』と略記）<sup>\*29</sup>』において、彼自身、当時を次のように述懐している。

万民の上に位する者、己れを慎み、品行を正くし、驕奢を戒め、節儉を勉め、職事に勤勞して人民の標準となり、下民其の勤勞を気の毒に思ふ様ならでは、政令は行はれ難し。然るに草創の始に立ちながら、家屋を飾り、衣服を文<sup>かざ</sup>り、美妾を抱へ、蓄財を謀りなば、維新の功業は遂げられ間敷<sup>まじき</sup>也。今と成りては、戊辰の義戦も偏<sup>ひとへ</sup>に私を営みたる姿に成り行き、天下に對し戦死者に對して面目無きぞとて、頻りに涙を催されける。（『遺訓』四）

西郷はここで他の維新の功臣たちを「偏<sup>ひとへ</sup>に私を営みたる姿に成り行き」と言う。その前文の「草創の始に立ちながら、家屋を飾り、衣服を文<sup>かざ</sup>り、美妾を抱へ、蓄財を謀り」とは、まさに彼らの姿なのである。西郷が理想とす

る国事にかかわる者のあるべき姿とは、これとは全く逆の

命もいらす、名もいらす、官位も金もいらぬ人は、仕末に困るもの也。此の仕末に困る人ならでは、艱難を共にして国家の大業は成し得られぬなり。……道に立ちたる人ならでは彼の気象は出ぬ也。(『遺訓』三〇)

であつた。しかし、これら「私を営みたる」者たちに対し、西郷が何をしたのかといえれば先の「失題」の一句目に見える「逢迎を絶つ」のみで、何か事を為したというわけではない。これは伊藤博文が

大人物ではあつたが寧ろ創業的の豪傑で守成的の人とは云へない。(中央新聞社編『伊藤侯井上伯爵山県侯元

勲談』)

と言つた如く、彼が「創業の臣」にすぎなかつたことの証左ともなる。また先の四句目「時来らば、牲贖、応に烹に遭ふべし」は、直後の西郷を暗示するフレーズであり、次の明治四年、朝命に応じて上京する際のものと同わつてくる。前年一二月、勅使岩倉・副使大久保が来鹿し、西郷への出仕を促す。そして、久光の許可を得てからの上京である。その際に詠まれたものが次の詩である。

去来朝野似貪名 朝野に去来するは名を貪るに似たり

竄謫余生不欲榮 竄謫の余生 榮を欲せず

小量応為莊子笑 小量 応に莊子の笑ひと為るべし

犧牛繫杙待晨烹 犧牛 杙に繋がれて晨烹を待つ

(三二二「失題」明治四年)

上京することは自らの本意ではないことが全編にわたって示されている。西郷にとつてそれは夢幻の「名を貪る」行為に他ならず、「榮を欲」しない自分が上京するということは、殺される日待つ生け贄の牛に等しいという詩意である。先の「牲牷」とともに、この「犧牛」も西郷の本意とは異なる行動を強いられる際のフレーズである。三句目に見える「応に莊子の笑ひと為るべし」とは、この「犧牛」が『莊子』列禦寇篇の犧牛寓話を踏まえたものであるからに他ならない。すなわち毅然として招聘を断つた莊子は、きつと断り切れなかった自分の「少量（度量の小ささ）」を笑うに違いないという詩意である。

しかし西郷の本意に反して、同年六月には正三位・参議となり、七月には廢藩置県を断行。そして十一月には後の明治六年政変のきっかけともなる岩倉・大久保・木戸らの欧米渡航となる。翌五年七月には陸軍元帥兼参議、近衛都督となり、十一月に久光より一四箇条にわたる非難書がつきつけられる。西郷の思いとは全てにおいて逆行していると言えよう。

### 三 明治六年以後の詩

次に明治六年政変、所謂征韓論論争に於て西郷が敗れ、下野した際の詩を時間の流れにそつて見てみたい。まず、六年八月、遣韓大使の内命を受け、朝鮮出發を待ち望む際のものである。

酷吏去来秋氣清 酷吏 去り来つて 秋氣清く

鷄林城畔逐涼行 鷄林城畔 涼を逐つて行く

須比蘇武歲寒操 須べからく比すべし 蘇武歲寒の操

応擬真卿身後名 応に擬すべし 真卿身後の名

欲告不言遺子訓 告げんと欲して言はず 遺子の訓<sup>\*32</sup>

雖離難忘旧朋盟 離ると雖も忘れ難し 旧朋の盟

胡天紅葉凋零日 胡天の紅葉 凋零の日

遙拝雲房霜劍横 遙かに雲房を拝すれば霜劍横たはる

(四七)「蒙使朝鮮国之命」明治六年八月

三、四句目に蘇武・顔真卿の名が見える。蘇武は前漢武帝の時に、匈奴に抑留され一九年後に帰国した経歴を持ち、顔真卿は先にも示したように、李希烈が背いた時に勅を奉じて行つて彼を諭そうとし、逆に脅迫されるが屈することなく殺された人物である。すなわち蘇武は抑留を、顔真卿は死を示すものとして使用されており、この時の西郷の朝鮮渡航の覚悟を代弁するモチーフとなっている。加えて、自らの心情(丹心)を「紅葉」に比することの多かった西郷が、ここで「紅葉凋零」と詠んで、紅葉の落ちる様を示していることにも着目したい。

次は同年一〇月、遣使論が破れて下野した際のものである。

独不適時情 独り時情に適せず

豈聴歛笑声 豈に歛笑の声を聴かんや

雪羞論戰略 羞はぢを雪すすがんとして戰略を論ずれば

忘義唱和平 義を忘れて和平を唱ふ

秦檜多遺類 秦檜 遺類多く

武公難再生 武公 再生し難し

正邪今那定 正邪 今 那なぞ定めん

後世必知清 後世 必ず清を知らん

(一三五)「辞闕」明治六年一〇月

一句目の「独り時情に適せず」は、この時の西郷の心情を一言であらわしたものと見える。もともと征韓論は明治元年末より岩倉・木戸といった、今回征韓反対派の中心となった者たちが口火をきったものであった。西郷の使節派遣論は、その流れを汲んだものでもあり、その岩倉と木戸によって反対されたということは、西郷にとって納得できないものであつたろう。このことは五、六句目に宋の高宗時代の宰相秦檜と武將岳飛が引かれていることから明らかである。金と対立していた宋の時代、宰相秦檜は高宗の意も受けて、主戦派の武將岳飛が金に勝つことを喜ばず、岳飛を殺すことを条件に金と和睦し、高宗に讒言して岳飛を獄死させた。自らを武公（岳飛）に喩えての心情の吐露である。そして、今はいずれが「正」であり「邪」であるのか判別し難い（「正邪、今、那ぞ定めん」）が、後の人々は必ず自分を「清」として認めてくれるであらうとする。また冒頭の「独り時情に適せず」のフレーズは『楚辞』漁父辞の「聖人は物に凝滞せずして、能く世と推移す」に反論した屈原の生き様を想起させる。すなわち彼自身が自らの生き方を改めて時流に合致させるということは少なくともなかったように思われる。彼が最も輝いていた元治元年から明治初年までは彼の性情と時流がたまたま合致していたと見るべきであろう。西郷が屈原を意識していたことは第四節で引用する「偶成」に「離騷」を引くことから明らかであり、ここに彼の屈原的自己意識を見出そうとすることはたやすい。

次は下野して鹿兒島に帰り着いた際のものである。

我家松籟洗塵縁 我が家の松籟 塵縁を洗ひ

満耳清風身欲仙 満耳の清風 身仙ならんと欲す

謬作京華名利客 謬りて京華名利の客と作り

斯声不聞已三年 斯の声 聞かざること已に三年

（二八「偶成」明治六年二月）

ここでは、策を弄して西郷の朝鮮渡航を阻んだ岩倉・大久保・木戸らを「塵」と言い、ここ数年の東京での自分を「謬りて京華名利の客と作り」と表現している。明治初年の帰省中の詩に見えた「夢幻の利名、何ぞ争ふに足らん」「牲贖、応に烹に遭ふべし」「犧牛、杙に繋がれて晨烹を待つ」と呼応する詩情である。そして中央の喧騒から逃れ得た西郷を待つものは「満耳の清風」であり、「身、仙ならんと欲す」という、本来、西郷が求めていたであろう姿を詠んでいる。また、

山老元難滞帝京 山老 元より帝京に滞まり難く

絃声車響夢魂驚 絃声車響に夢魂驚く

垢塵不耐衣裳汚 垢塵 衣裳の汚るるに耐へず

村舎避来身世清 村舎 避け来りて身世清し

(六四)「投村家喜而賦」明治六年)

には「垢塵」という表現が見え、先の「塵」とともに、「汚るるに耐へず」とする西郷の政府に対する意識を見て取ることができる。もちろんこの「衣裳」は西郷の「水心(清廉潔白な心)」に他ならない。彼が強く望むものはあくまで「身世清し」であった。そして同年末に詠んだ詩では、

白髮衰顔非所意 白髮 衰顔 意とする所に非ず

壯心横劍愧無勲 壯心 劍を横たへて勲なきを愧づ

百千窮鬼吾何畏 百千の窮鬼 吾何ぞ畏れん

脱出人間虎豹群 脱出す 人間虎豹の群

(一四二)「除夜」明治六年)

と言ひ、ここでは朝鮮渡航に関して「勲なきを愧づ」と回顧した上で、故郷への帰還を「人間虎豹の群」からの脱出と位置づけている。しかし翌年春には

塵世逃官又遯名

塵世 官を逃れ又名を遯<sup>のが</sup>れ

偏怡造化自然情

偏<sup>ひじへ</sup>に怡<sup>よろこ</sup>ぶ 造化自然の情

閑中有味春窓夢

閑中 味あり 春窓の夢

呼覚曉鶯三兩声

呼<sup>あ</sup>び覚<sup>さま</sup>す 曉鶯三兩声

(九六「偶成」明治七年)

と詠んでおり、「塵世、官を逃れ又名を遯<sup>のが</sup>れ、偏<sup>ひじへ</sup>に怡<sup>よろこ</sup>ぶ、造化自然の情」に加えて、「閑中味あり」の語は、西郷が明治二、三年当時の「逢迎を絶」っていた頃の心境にたちもどつていることが看取できる。以下の二句は翌七年及び八年の作とされる詩である。

半生行路咲吾非

半生の行路 吾が非を咲<sup>わら</sup>ひ

瀟洒清風入曉幃

瀟洒<sup>しょうしゃ</sup>たる清風 曉幃<sup>\*33</sup>に入る

請看疎烟短牆処

請ふ看よ 疎烟短牆<sup>とこ</sup>の処

紅塵離去少炎威

紅塵離れ去つて 炎威<sup>あ</sup>少なきを

(一四六「偶成」明治七年)

官途艱險幾年勞

官途 艱險 幾年か勞す

恰似輕舟風怒号

恰<sup>あ</sup>も似たり 輕舟 風の怒号するに



昨日非於鋤下覺 昨日の非は鋤下に於て覺り

半生齡可卷中逃 半生の齡は卷中に逃るべし

山遊無累真狸兔 山遊 累なし 真に狸兔

獵隱有宮唯銃斃 獵隱 宮あり 唯だ銃斃

誰識滿襟清賞足 誰か識らん 滿襟清賞足り

峰頭閑月万尋高 峰頭の閑月 万尋高きを

(三三)「偶成」明治八年)

それまでの風に翻弄される「輕舟」の如き自らの非を笑い、「紅塵」「炎威」から逃れ去って田舎でのんびりと生活することの楽しさを詠んだのが前者、荒波に翻弄される小舟に自らを例え、現在の「山遊」「獵隱」を至上としたのが後者である。詩想としては、ほぼ同一のものと考えてよからう。

以上、流刑時から明治六年政変時までの詩をいくつか見てきたが、ここに一貫して感じられるのは西郷の対立者(幕府・新政府)を「濁」とし、自らを「清・静」とするイメージであろう。そして、自らの胸中については、さらに「紅葉」「仙」「閑」など様々な広がりをも以て表現がなされている。

#### 四 屈原・伯夷・叔齊・張良・韓信

歴史上の人物や事柄を詩中に詠み込むという行為は、自らをそこに投影することであることが多い。たとえば雲井龍雄が詩中において自らを管仲や藺相如、張良に投影したことは先に論じた。屈指の政治家たらんとした彼の心情の吐露である。西郷の場合も、先節までに引用した詩中で、自らを顏真卿・蘇武・岳飛などに比していた。本節では、これら意外に西郷が自らを投影していた中国史上の人物を提示してみたい。<sup>\*34</sup>

まず南島流罪中の作で、自らを屈原にオーバースラップさせたものである。

雨帯斜風叩敗紗 雨は斜風を帯びて敗紗を叩き  
 子規啼血訴冤譚 子規 血に啼き冤を訴へて譚しかまひす  
 今宵吟誦離騷賦 今宵 吟誦す 離騷の賦  
 南竄愁懷百倍加 南竄の愁懷 百倍加はる  
 (一一)「偶成」

中国における流刑者として、最も古く且つ著名な者は、戦国末期の楚の懷王・頃襄王に仕えた賦家屈原であろう。前漢初期には既に彼の名は悲運の流刑者としてのイメージが固まり、たとえば前漢文帝期の賈誼は左遷された際に、自らを屈原にオーバースラップさせ「弔屈原賦」を詠んでいる。ここでは二句目に「子規ホトケシス」を登場させ、吐血しながら自らの無実を訴える様を詠んで、三句目の屈原の「離騷の賦」と対応させている。また、次のように自らを伯夷・叔斉に例えた詩も存する。

世間多少失天真 世間 多少 天真を失ひ  
 貧富廉貪未了因 貧富廉貪 未だ因を了せず  
 請看摘薇夷叔操 請ふ看よ 薇わらびを摘みし夷叔の操  
 貴於値十五城珍 値十五城の珍よりも貴し  
 (九八)「詠史」

殷王朝末期の高潔の隠士である伯夷・叔斉も「退く者」としてのイメージであり、帰郷時の西郷とオーバースラップ

プする。通常、周の武王に殷の紂王討伐の非を訴え、入れられぬと見るや首陽山に入り餓死した故事が有名であるが、伯夷・叔斉の兄弟は、その父孤竹君との間に次のようなエピソードを持つ。すなわち、孤竹君は自らの第三子叔斉に君位継承を依頼するのだが、孤竹君の死後、叔斉は長兄伯夷をさしおいて君位を継承することを拒否。そして、当の伯夷も父の遺志をまげて継承することを拒否し、兄弟ともども亡命し、周の西伯（文王）のもとへ赴く。かかる伯夷・叔斉の行状の評価は、西郷があくまで先君斉彬の遺志を継がんとして行動しようとしたことと無関係ではあるまい。また一句目に見える「世間、多少、天真を失ひ」というフレーズも注目ししよう。「天真」を失っているのはあくまで「世間」であり、自らは「操（高節）」を保っているという自負心がここに読み取れる。加えてその高節が『史記』藺相如伝などに見られる「値十五城の珍（和氏の璧）」と比較されているということは、西郷の価値観が強烈に示されていると思われる。

続く二首は漢の高祖劉邦の二人の功臣、張良と韓信を詠んだものである。ともに前漢王朝創業の功臣でありながら、張良は天寿を全うし、韓信は逆賊として誅殺され、明暗を分ける。まず、張良を詠んだものである。

守哲無如鈍 哲を守るは鈍に如くはなく

風容似女仙 風容 女仙に似たり

胸中何物在 胸中 何物か存る

圯下枕書眠 圯下 書を枕にして眠る

（七〇「題子房図」）

一句目の「哲を守るは鈍に如くはなく」は、張良を鑑とした自らへの戒めと取るべきであろう。とりわけ明治以降の西郷の生き方は、ここに言う「鈍に如くはなし」と無関係であるとは思えない。事実、張良は漢王朝成立後は

一線から退き、半ば隠棲したが如き様相を呈する。

これに対し、非業の最期を遂げたのが「またくぐり」の逸話で知られる大將軍韓信である。

盛名令終少 盛名<sup>よ</sup>終わりを令くするは少なく

功遂竟淪亡 功遂<sup>つひ</sup>げて竟に淪亡す

恠底<sup>あや</sup>勝間志 恠しむ底<sup>なん</sup>ぞ勝間の志

封王忽自忘 王に封ぜられて忽ち自ら忘る

(二〇一)「題韓信出胯下図」(明治二、三年)

「盛名」を得ることの危うさ。それに奢り「勝間の志」を見失って「淪亡(滅びる)」してしまった韓信の轍を踏まぬよう、自らを戒めたものと考えてよからう。明治二、三年の頃の詩であることを考慮に入れれば、第二節で言及した「夢幻の利名」を争う他の功臣たちを痛罵したものと考えられ、それが強い自らへの戒めともなっている。この張良・韓信を詠み込んだ二首に関連して、次の「才子」を論ずる詩を見てみたい。

才子元来多過事 才子<sup>あやま</sup>元来多く事を過る

議論畢竟世無功 議論畢竟世に功なし

誰知默默不言裡 誰か知らん默默<sup>うち</sup>不言の裡

山是青青花是紅 山は是れ青青花は是れ紅なるを

(五一)「偶感」

この詩の一句目に見える「才子、元来、多く事を過る」<sup>あやま</sup>は明らかに先の韓信の姿に、また黙々として不言をつら

ぬこうとする意志は張良の「鈍に如くはなし」と連動する。ここに見える「才」という語は、「鈍」とともに西郷を理解するためのキーワードの一つとなろう。『遺訓』にも次のような語がある。

今の人、才識有れば事業は心次第に成さるるものと思へ共、才に任せて為す事は、危くして見て居られぬものぞ。体有りてこそ用は行はるるなり。（『遺訓』三九）

張良たらんとし、韓信を非とした西郷の扱ひ所がまさにここにあると考えられる。そして、これらの詠史詩を見た時、西郷が心の有り様を問題として持ち続けていたことは疑いなく、これについては彼自身

総じて人は己れに克つを以て成り、自ら愛するを以て敗るるぞ。…事業を創起する人、其事大抵十に七八迄は能く成し得れ共、残り二つを終る迄成し得る人の希れなるは、…功立ち名顕はるるに随ひ、いつしか自ら愛する心起り、恐懼戒慎の意弛み、驕矜の気漸く長じ、其成し得たる事業を負み、苟も我が事を仕遂んとて、まづき仕事に陥り、終に敗るるものにて、皆な自ら招く也。（『遺訓』二一）

と述べている。次節でこの問題について触れてみたい。

## 五 「才」と心と

先節までに考証を及ぼした西郷の詩を改めて見たとき、いくつかのキーワードが一つのまとまりを持つものであることに気づく。すなわちそれは、「死を急ぐ心持」「死を見ること帰するが如し」「生死何ぞ疑はん」「自ら精神を養ひ」「幽囚の楽しみ」「孤独」「赤心」「丹楓」「氷心」「塵」「垢塵」「塵世」「清」「鈍」「才」などの諸語である。

これらを以て、これまで見てきた西郷という人物を描写しようとするれば、「塵」「垢塵」「塵世」に対立する自分は「丹楓」の如き「赤心」、「清」なる「水心」の持ち主であるが故に、「孤独」にならざるを得ない。しかし「死を見ること帰するが如」く「生死」を疑うこともない「精神」を養い、「鈍」を悟った自分にとっては、それも「楽しみ」である、ということになるうか。

これに関連して、同時代人たちの西郷に対するコメントの中によく出てくるのが彼の無欲ぶりを評するものである。

南洲翁は誰が教へたともなく無欲である。(徳富猪一郎『西郷南洲先生』<sup>\*35</sup>)

彼の行為の何処にも野心的な処がない。出世を目的として行動した形跡がない。(武者小路実篤『西郷隆盛』<sup>\*36</sup>)

彼ほど人生の欲望の少ない人を知らない。(内村鑑三『代表的日本人』)

かかる評価は、同時に西郷が自ら言う「赤心」と相関するものと考えてよい。そしてこれについては西郷自身、強く意識していたようであり、『遺訓』にも次のような文が見える。

廟堂に立ちて大政を為すは天道を行ふものなれば、些<sup>いささか</sup>とも私を挟<sup>さしはさ</sup>みては済まぬもの也。いかにも心を公平に操り、正道を蹈み、広く賢人を選挙し、能く其職に任ふる人を挙げて政柄を執らしむるは、即ち天意也。(『遺訓』一)

己れを愛するは善からぬことの第一也。(『遺訓』二六)

ここに「己」が問題となり、そして西郷を論ずる場合に欠かせない「敬天愛人」というテーゼが浮上することになる。「敬天愛人」については内村鑑三が

『敬天、愛人』は、彼の全人生觀の要約であつた。（内村鑑三『代表的日本人』）

と言うが如く、西郷にとって最も重要なテーゼであることは言うまでもない。西郷本人の言をかりれば、

道は天地自然の道なるゆゑ、講学の道は敬天愛人を目的とし、身を修するに克己を以て終始せよ。（『遺訓』  
二二）

道は天地自然の物にして、人は之を行ふものなれば、天を敬するを目的とす。天は人も我も同一に愛し給ふゆゑ、我を愛する心を以て人を愛する也。（『遺訓』二四）

ということになる。<sup>\*37</sup>

では以下、西郷が詩の中で如何なる生き方を理想としていたか、また自らに、さらに若者たちに何を課していたのかを見、彼の心情を明らかにしてみる。まず自らの心を詠んだものから見てみたい。

我有千糸髮 我に千糸の髮あり

髣髴黒於漆 髣髴として漆<sup>\*38</sup>よりも黒し

我有一片心 我に一片の心あり

皓皓白於雪 皓皓として雪よりも白し

我髮猶可斷 我が髪は猶ほ断つべし

我心不可截 我が心は截つべからず

(一九「失題」)

何者にも汚されることのない自らの「皓皓」たる心の提示である。ことさらに自らの「皓皓」たる心の提示は、「我が心は截つべからず」と合わせ考えれば、自尊心のあらわれと言うよりは、むしろ汚されまいとする信念の表象と言えよう。この見方は、次の一首においてもあてはまる。

座窺古今誦陳編 座して古今を窺ひ陳編を誦ずれば

富貴如雲日幾遷 富貴雲の如し日に幾たびか遷る

人不知吾何慍有 人の吾を知らざるに何の慍ることか有らん

一衣一鉢任天然 一衣一鉢天然に任せん

(五〇「失題」)

「人の吾を知らざるに何の慍ることか有らん」は、当時西郷を取り巻く人々が、西郷本人の心底を全く理解していなかったことの裏返しと考えた方がよからう。すなわち、これらの「自」「己」は、「他」とのかかわりの中で詠まれており、それは対立するものとして描かれている。たとえば次の一首はより明確に自と他の断絶を示すものと言える。

深遮塵世樹陰清 深く塵世を遮って樹陰清く

幽鳥為誰窓外鳴 幽鳥誰が為に窓外に鳴く



最喜山中免官賦 最も喜ぶ 山中 官賦を免れ

曾無俗吏叩柴門 曾て俗吏の柴門を叩くなきを

(九三「偶成」)

ここで「他」に属するのは「塵世」「官賦」「俗吏」であり、「自」に属するのは「深」「清」「幽」である。また次の詩も同様である。

平生忠憤気 平生 忠憤の気

磅礴満寰宇 磅礴ほうはくとして寰宇かんうに満つ

自得安心法 自得す 安心の法

成敗守吾愚 成敗 吾が愚を守る

(一五四「偶成」)

四句目の「成敗、吾が愚を守る」は、成功失敗を眼中におかず、自らの愚直を全うするとの意であり、先に示した「鈍に如くはなし」とともに、西郷の立場を示すものと言える。そして西郷のこの生き方は、つきつめれば他者とのかけひきなど必要としない己一人の世界の希求へとつながっていく。

この視点に立てば、たとえば『遺訓』に見える

人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして、己れを尽て人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし。(『遺訓』二五)

という記述などは「天を相手にする」ことの主張と見るよりは、「人を相手にする」ことへの嫌悪と見て取った方が妥当のように思われる。また、

山中独楽有誰争 山中の独楽 誰あつてか争はん

晚酌無魚芹作羹 晚酌 魚なく 芹を羹あつものと作す

自隔人声虚澹極 自ずから人声を隔てて虚澹極まり

清風明月有余贏 清風 明月 余贏あり

(六三)「山中独楽」

駆犬衝雲独自攀 犬を駆り雲を衝ついて独り自ら攀よじり

豪然長嘯断峰間 豪然 長嘯す 断峰の間

請看世上人心險 請よ看よ 世上人心の險

涉歴艱於山路艱 涉歴 山路の艱よりも艱なり

(三四)「山行」明治二、三年)

前者の「山中の独楽、誰あつてか争はん」、後者の「請ふ看よ、世上人心の險、涉歴、山路の艱よりも艱なり」も、いずれも己一人の世界を詠じたものに他ならない。

これについては徳富蘇峰の「南洲翁は情の人であり、徳の人であるが、度量はあなた方の思ふ程大きな度量ぢやない。さう清濁併せ呑む人ぢやない。清は呑むけれども、濁は嫌ひ、……」（『西郷南洲先生』<sup>\*41</sup>）という証言もその証左となろう。

武者小路実篤は小説『西郷隆盛』の中で「敗めて死んだと言ふよりは、自分で死を安じて迎へた感じだ」（『西郷

隆盛<sup>\*42</sup>』と言っている。

西郷はそこに他者の存在しない、真の「閑中の楽しみ」を求めたのであろうか。

或いは、彼は「小量」たる「犠牛」であり、明治という怒風に翻弄された「軽舟」にすぎなかったのであろうか。とすれば「敬天愛人」というテーマも、むしろ人間関係に翻弄され続けた西郷の処世の中から生まれた自らへの戒めなのかもしれない。

## おわりに

『東京日々新聞（以下『日々』と略記）』に於て反乱が確報として掲載されるのは明治一〇年二月二〇日付であった。それ以前の判然としない間は、暴拳の真偽、暴拳の担い手が、確証なしとされながらも掲載されている。とりわけ担い手が私学校党であることは動かないのだが、それに鹿児島全県の士族が荷担しているのか、そして西郷が動いているのが議論的的となっている。ただし『日々』は最後まで西郷擁護の立場を取っている。その例を示してみたい。

まず西郷が神風連の乱、秋月の乱に呼応しようとする者たちへの訓告を告げるエピソードの掲載である。

昨年十月下旬、熊本暴動、続て山口県騷擾の警報あるや、当地にての伝聞は実に天下大乱に至るべきの趣也。此時、西郷氏、私塾生徒を集めて告て曰「人心の向背は時勢の順逆によりて決す。一とたび方向を謬れば、悔とも追ふ可らず。慎まざるばある可らず。今や九州各藩の士族及び長州前原一誠の徒、朝憲を蔑棄し私憤を逞せんとす。天下の人心一たび之に靡くときは、実に国家の一大事也。県官を暴殺するが如きは、大丈夫の恥る所なり。方今、朝家の政令一も道理に背けるものなし。何ぞ不平を鳴らす可けん。今の時に方りては、鹿児島士族は上京して暴徒を芟除し、上は朝廷を護し奉り、下は万姓を安んじ、更に退て身耕力食し、以て臣子の本

分を尽す可きなり」と。是に於て左袒する者一万余人、……。〔『日々』一月二六日〕

度重なる不平士族の乱にあつても、『日々』ですら西郷のクーデターはあるまいという立場を取る。しかし、西郷のクーデターが発覚した後、二月二三日付『日々』に西郷を評して次のように言っている。

西郷の西郷たる所以の者は何に在る。……氣宇凜乎、廟堂の高に居ては、則ち其民を忘れず、江湖の遠に居ては、則ち其君を忘れず。説客蒯通の背を見るあるも肯て淮陰（韓信）の不逞を学ばず、豎子韓（信）・彭（越）の兵を挙るあるも肯て鯨布の狂愚に倣はず。実に人臣の大節あるを以てなり。今輒ち叛人となる西郷、既に西郷ならず。諸君は猶西郷ならざるの西郷に畏服せんと欲するか。〔『日々』二月二三日〕

ここに西郷は本來說客蒯通の言葉に自分を見失ってしまった韓信のような人物ではなかったはずだとの悲痛な思いが吐露されている。「盛名」に自らを見失った者として韓信を否定し、さらに韓信の如き「才」を「多く事を過る」ものとして危険視した西郷が、韓信に比されるとは、実に皮肉な結末と言わざるを得ない。

\*1 山川浩（一八四五〜九八）。会津藩士。幕末は京都守護職となった松平容保に随従し、維新以降は斗南権大参事として開拓と家臣団統率にあたる。後、陸軍省に入り、佐賀の乱や西南戦争に参加した。なお以下の和歌は会津若松市内の博物館に所蔵された軸による。

\*2 牧野伸顕（一八六一〜一九四九）。薩摩藩士。大久保利通の次男であり、岩倉具視らの遣外使節にも同行。後に西園寺内閣の一次の文相、二次の農商相、山本内閣の外相などを歴任した。

\* 3 西郷隆盛全集編集委員会編『西郷隆盛全集（全六巻）』（大和書房、以下『全集』と略記）第六巻二三二頁。

\* 4 大町桂月（一八六九〜一九二五）。高知出身。評論家、随筆家。明治二九年、帝国大学国文科を卒業し、以降文筆業に入った。

\* 5 『全集』第六巻七九頁。

\* 6 重野安繹（一八二七〜一九一〇）。薩摩藩士。明治期の歴史学者、漢学者。藩校造士館で学んだ後、江戸の昌平黌に進む。維新後は文部省・太政官に出仕し、修史局の中心となって『大日本編年史』の編纂の準備に従った。

\* 7 渋沢栄一（一八四〇〜一九三一）。武蔵国の豪農の家に生まれ、幕末、一時尊王攘夷運動の志士であったが、一八六四年、一橋家に任せ、後幕臣となり、遣欧使節の一員として渡欧。維新後は大蔵省官吏となり、以後は財界に関与していった。

\* 8 福沢諭吉『明治十年丁丑公論』（講談社学術文庫、一九八五年）

\* 9 『全集』第六巻二二七頁。

\* 10 『全集』第六巻一四五頁。

\* 11 福地源一郎（一八四一〜一九〇六）。明治の新聞記者、文学者。長崎の医師の家に生まれ、漢学・蘭学・英学を修め、幕末は通訳として幕府に仕える。二回にわたって幕府使節として渡欧した。維新後は大蔵省に出仕し、財政制度調査のため渡米。岩倉使節団にも随行。帰国後『東京日日新聞』に主筆として入社。後半生は文人として生きた。

\* 12 『全集』第六巻二二六頁。

\* 13 この他、土佐立志社の機関誌『海南新誌』『土陽新聞』などにおいても西郷を擁護する論説が展開されている。これについては本書第六章において詳細に論じた。

\* 14 たとえば大久保利通や牧野伸顕、山川健次郎の以下ような証言がある。

（大久保の伊藤博文宛書簡）此度の暴挙は、必桐野以下班々之輩におひて、則決せしに疑なく、……。〔回顧録〕、『全集』第六巻三二五頁）

（高橋新吉が）当地の状況は想像以上に險悪で、桐野らが中心になって過激派の勢力が盛んでどうにも手の付けようがないと言つて来たが、……。〔回顧録〕、『全集』第六巻三三八頁）

西郷に熊吉という忠僕があつて、その熊吉が菊次郎に話したところによると、征韓論が決裂してから数日後に西郷が

- 家に帰って……（熊吉が）これからのことはどうなるのでしょうかと聞いたところが、西郷は「実に困る。桐野などがなかなか手に余る。何とかしようとして、初め士族を率いて北海道に行くことを考え、次ぎに征韓論を主張したが、これもうまく行かぬ。いよいよ仕方がないから鹿児島に引込む他ない」と言ったということである。（『回顧録』、『全集』第六卷二二九頁）
- （西南戦争時の西郷）恐らく兎分に昇ぎあげられてどうにも始末がつかなくなつたものであらうと思ひます。（『日本及日本人』所収東寧生「山川健次郎博士の南洲観」、『全集』第六卷二六五頁）
- \* 15 『全集』第四卷。
- \* 16 『全集』第六卷五四頁。
- \* 17 『全集』第六卷一三六頁。
- \* 18 『全集』第六卷一一〇頁。
- \* 19 『全集』第六卷一三四頁。
- \* 20 世の中の人を軽く見ること。
- \* 21 『全集』第六卷六三頁。
- \* 22 『全集』第六卷一五〇頁。
- \* 23 この番号は『全集』に付されたものである。
- \* 24 一八六二年（文久二）四月二三日、京都伏見の寺田屋において、薩摩藩士有馬新七ほか尊攘激派が薩摩藩兵に殺害された事件。新七らが久光入京を機に挙兵し、幕府の改革を実現しようとしたものを、久光は暴発として捉え抑えた。
- \* 25 『全集』第六卷一一二頁。
- \* 26 『周易』繫辭伝の「尺蠖の伸ぶるは其の能く屈するに因る」に基づく。本書第1章でも言及しているが、志士らが敗者となり、次なる「伸」を期する際に詩中のモチーフとして使用した。
- \* 27 高山彦九郎（一七四七〜九三）。江戸後期の勤王家。現群馬県太田市の生まれ。忠孝仁義の人を訪ねて諸国を遊歴した。また高山に蒲生君平・林子平を加えて寛政の三奇人という。筆者は太田市の高山彦九郎記念館を訪問した際、記念館の職員の方々にお世話になった。深く感謝する次第である。
- \* 28 「丹楓」というモチーフは、慶応二年十月十五日、鹿児島から小松帯刀と共に薩摩の汽船三邦丸で上京の途上船中で

詠んだ詩中にも見える。

連歳投危十月天 連歳 危きに投ず 十月の天

黒烟南北飛火船 黒烟 南北 火船を飛ばす

朝威不奮縦奸計 朝威奮はず奸計を縦にす

身作丹楓帝辺散 身は丹楓と作つて帝辺に散らん

(二七二「慶応丙寅十月上京船中作」慶応二年十月)

\* 29 『西郷南洲遺訓』(岩波文庫)を参照した。

\* 30 『全集』第六卷二五頁。

\* 31 『莊子』列禦寇篇に「或ひと莊子を聘せんとす。莊子、其の使に応へて曰く「子、夫の犠牛を見るか。衣するに文繡を以てし、食はすに芻菽を以てす。其の牽かれて太廟に入るに及びて、孤犢と為らんと欲すと雖も、其れ得べけんや」とある。

\* 32 「告げんと欲して言はず遺子の訓」は、楠木正成の子供には何の遺訓も遺さないという遺訓を踏まえる。

\* 33 さっぱりして清らかなさま。

\* 34 中国古典以外で最も頻度の高いものは、所謂建武の中興、すなわち後醍醐天皇と楠木正成を中心とする者たちを詠んだものである。以下、簡単にいくつか提示しておく。

まず、楠木正成の遺臣恩地左近が、正成の命で正行を河内の故郷に連れ帰つたために、湊川の一戦に参加できなかった事件を詠んだものである。

一戦貪生非懼死 一戦 生を貪る 死を懼るるに非ず

名分大義莫間然 名分 大義 間然するなし

幾回挫計寒奸肝 幾回か計を挫いて奸肝を寒からしむ

成敗不論高節堅 成敗 論ぜず 高節堅し

(一六「詠恩地左近」)

次に、後醍醐天皇救済のために奔走した児島高德を詠んだもの。

吁嗟雖莫范蠡功 吁嗟 范蠡の功なしと雖も

先命投機志気雄 命に先んじて機に投ずる志気雄なり

十字血痕花色在 十字の血痕 花色在り

龍顔一笑認孤忠 龍顔 一笑 孤忠を認む

(九「児島高德」)

次は楠木正成を詠んだものである。

奇策明疇不可謨 奇策 明疇 謨るべからず

正勤王事は真儒 正に王事に勤むる 是れ真儒

懷君一死七生語 懷ふ 君が一死七生の語

抱此忠魂今在無 此の忠魂を抱くもの 今 在りやなしや

(二七「題楠公函」)

\* 35 『全集』第六卷一八四頁。

\* 36 『全集』第六卷二五七頁。

\* 37 「敬天愛人」に関して、田中惣五郎が『大西郷の人と思想』（昭和一八年、今日の問題社刊）の中で述べている部分は

特筆に値する。彼はまず

西郷にとつての敬天とは、為政者としての士族が政治にたづさはる際に持つ心構へであつたと思はれる。武士出身の西郷の思想は、士と農とはおのづから別のものであり、農は愛すべく、士は敬むべしとするにあり、士の政に携はることを飽くまで肯定したのであり、ただその際の為政家の態度は、あくまで私を棄てて公につき、天に則してこれを行ふべしとするにあつた。

と言ひ、西郷の言う「敬天」とは「私を棄てて公につき、天に則してこれを行」うものであつたとしながらも、そこには士農の別があつたとし、この点に関してさらに

西郷の思想は、封建的なものと近代的なものとの混合にあり、四民平等の代りに、士の平等と民の平等とを良心的に計らうとしたものであり、士と民との区別に対しては、なほ当然あるべきものとしてこれを認めていたといへる。と述べている。さらにこの思想と西南戦争を関連づけて

政府要人の敬天的態度の闕如と批判し、この敬天愛人にそぐはざる政府の欠漏に対して、はげしき憤りを発したのが、



明治十年の乱の基底的原因であつたと観すべきであらう。  
としている。

\* 38 髪の毛の長いさま。

\* 39 みちふさがること。

\* 40 天地のこと。

\* 41 『全集』第六卷一九五頁。

\* 42 『全集』第六卷二六〇頁。

## 第4章 水戸志士の咆哮 —狂拳をささえるもの—

### はじめに

本章ではまず第一節で桜田門外の変・坂下門外の変に関わった志士たちの詩文をその用例として見る。特にこの二つの事件を取り上げるのは、それが政府要人殺害というテロであり「狂拳」であるからに他ならない。また事件ごとに詩文を取り上げるのではなく、参加者たちの詩想という点から見ていく。続く第二節では、二つの事件にかかわった志士の多くが水戸藩士であったことに着目し、彼等の思想を育てた水戸学について藤田東湖の詩文を手掛かりに論じていくこととする。

なお、本章で使用した漢詩は明治期に出版された漢詩集をベースとし、後の研究を適宜参照した。

### 一 桜田門外の変・坂下門外の変

まず最初に両事件について簡単に説明しておこう。

桜田門外の変（万延元年）は將軍継嗣問題や五カ国との通商条約調印問題、さらに安政の大獄などに基づく大老井伊直弼への反感から、水戸藩と薩摩藩の有志一八名による井伊直弼要撃事件である。たとえば蓮田市五郎\*1と黒沢忠三郎\*2の事件直後に詠まれた次の詩は、生々しさを残すと同時に、彼らの達成感を読み取ることができる。

欲挽頹波回世運 頹波を挽きて世運を回らさんと欲す

一朝斬破奸臣頭 一朝斬破す奸臣の頭

微軀縦使為齏粉 微軀たどひ 縦使 齏粉と為るとも

凛々英名千載流 凛々たる英名は千載に流れん

(蓮田市五郎 三月三日、於閣老龍野侯邸、口吟)

白刃争飛雪 白刃 飛雪と争ひ

斬仇酬主恩 仇を斬つて主恩に酬ゆ

今朝吾事畢 今朝 吾が事畢おはる

芳臭任人言 芳臭 人の言に任す

(黒沢忠三郎「絶命詞」)

また坂下門外の変(文久二年)は、水戸浪士と各地の志士が、老中安藤信正を襲撃し負傷させた事件である。安藤信正は井伊直弼の遺策を継承して和宮降家を実現させるとともに、天皇制の廃止を考えるなどしていた。このことについては当時外国奉行であった堀利熙の「安藤対州閣下<sup>\*</sup>に上る書」が示す所でもある。この書簡が実際に堀利熙の手によるものかどうかは極めて疑わしいのだが、これについて岡本章庵は

其の安藤氏に遺りし書は、或は其の手筆に非ずと称す。而して安藤氏は聡敏忠誠にして、決して書中に云ふ所の如きに非ず。……然れども当時其の書は天下に伝播し、家家之を誦し、復た一人も之が為に弁駁する者なきは何ぞや。(『大日本中興先覚志』堀利熙)

と記しており、これが堀の手によるものとして当時の人々に読まれていたという事実は見過ごせない。本書簡において安藤信正は、外国公使に媚を売ってその為すがままに対応し、あまつさえ天皇を廃する件を真剣に考える者と

して語られる。尊王攘夷の思想を持つ水戸志士たちにとっては、天皇を著しく汚す者に映ったに相違ない。また、当時の水戸藩は保守派が勢力を得て、攘夷激派は立場を失っていた。そこでこの水戸藩尊攘激派が中心となり安藤信正を襲撃したという見方もある。

以下、三つの視点(1)狂・(2)丹心・(3)孝)にそって論を進めていきたい。

### (1) 狂

「<sup>\*4</sup>狂」に関して、まず「行動できる者」としての「狂者」とその行為「狂拳」について考えてみたい。藤森天山と吉田松陰の「<sup>\*4</sup>狂」に関する言を示してみる。

賛に云ふ「布衣にして国を憂ふるは陳亮<sup>\*5</sup>に似たり。正義して禍を買ふは范滂<sup>\*6</sup>に似たり。衆皆其の狂を笑ふ。独り曰く「今の時は何の時ぞ。吾、人の狂ならざるを怪む。嗚呼、是れ真に狂と謂ふべけんや」と。(藤森天山「肖像自賛并序」)

人は狂頑<sup>そじ</sup>を譏り、郷党は衆容れず。身は国家に許し、死生吾れ久しく斉しくす。至誠<sup>\*7</sup>にして動かざるは古より未だ之れあらず。(吉田松陰「肖像自賛并序」)

藤森は時として人は「狂者」にならねばならない時があるとし、その際に「狂者」となり得ない者(行動しない者)を「真狂」と呼んでいる。ちなみに高杉晋作・雲井龍雄らは「狂者」の対極を「儉生<sup>\*7</sup>」と呼んでいる。また吉田は「至誠」から出た行為であるから「狂頑」のそしりも意に介さないと言う。いずれも「動く」ことの原理として「狂」があったと言ってよい。

次の二首は桜田門外の変に参加した関鉄之助<sup>\*8</sup>と黒沢の詩である。

枉就幽囚還故郷 枉まげて幽囚に就きて故郷に還る

姓名在世寧辭狂 姓名世に在り寧なぞ狂を辭せんや

(関鉄之助「冬夜獄中謾吟」)

呼狂呼賊任他評 狂と呼び賊と呼ぶも他の評に任ず

幾歳妖雲一旦晴 幾歳の妖雲一旦に晴る

正是桜花好時節 正に是れ桜花の好時節

桜田門外血如桜 桜田門外 血は桜の如し

(黒沢忠三郎「絶命詞」)

井伊直弼を襲撃した後の作である。長きに渡る逃避行の果てに縛につき水戸へと送還された関、そして黒沢のもとに狂者と呼ばれてもかまわないという心情が詠まれている。関は桜田義士としての名は世に広まるだろうと言い、黒沢は井伊殺害によって数年来の「妖雲」が一気に晴れわたったと言う。

次に坂下門外の変にかかわった河本杜太郎\*9と兎島強介\*10の詩を見てみよう。

疎狂憂国不憂身 疎狂 国を憂えて身を憂えず

愴慨曾期救此民 愴慨 曾かて此の民を救はんと期す

(河本杜太郎「逸題」)

一笑椒山胡詮輩 一笑す 椒山・胡詮\*11が輩

空将疏奏逆豪権 空しく疏奏を将もて豪権に逆ふ

(児島強介「獄中作(その一)」)

河本の詩に「国を憂えて身を憂えず」「此の民を救はん」とあり、ここに我が身よりも国や民を優先するという、「狂拳」が国家・民のための行為であることを見てとることができる。また児島の詩には直接「狂」という文字はないが、直諫の士として知られる椒山・胡詮を笑うという態度は、もはや諫めるという常識的な方法では解決できない所まで情勢が悪化していることの証であり、「狂拳」以外の解決策がないことを暗示している。これに関連して言えば、長州藩の久坂玄瑞が桜田門外の変を詠んだ詩の中にも

又不見翟義敬業徒切齒 又見ずや 翟義・敬業 徒らに切齒し

胡詮椒山空憤死 胡詮・椒山空しく憤死せしを

(久坂玄瑞「応天正気歌」)

とあって、椒山・胡詮に王莽排斥に失敗した翟義と則天皇帝排斥に失敗した徐敬業を加えた同様のフレーズがある。「狂拳」に及ぼんとする者が、「狂拳」という手段以外ではもはや打開できない状況に至っていることを示す事例として、当時よく使用されていたものと思われる。また、坂下にかかわった大橋訥庵<sup>\*13</sup>の次のような詩もある。

電発既看衆忽倒 電発 既に看る 衆忽ち倒る

淋漓血滴雪如華 淋漓 血滴りて 雪華の如し

子房博浪真迂拙 子房 博浪 真に迂拙

徒雇他人権副車 徒に他人を雇ひて副車に権す

(大橋訥庵「題桜田斬奸」)

ここでは始皇帝殺害の実行を他人の手に委ねて失敗した張良を「迂拙」として非難し、「狂拳」に及んだ桜田一八士を讃えている。

以上、「狂」が決断力・行動力・実践力であることが、志士たちの共通認識として存在していたことが理解せられよう。そして実行された「狂拳」は国難という公的な現場に対する「報国」に他ならない。またその「報国」の思いがあればこそ、従容として縛りに就き死を迎えることができたとと言える。これは当時文天祥やその「正気之歌」が作詩上のモチーフとしてよく用いられたことと関連しよう。

## (2) 丹心

第3章の西郷の詩想で述べたように、「狂拳」も汚れなき「丹心」「赤心」より発したものでなければ単なる暴力に過ぎない。直接作中に表現するか否かは別として、「狂」「狂拳」の主張には当然の如く「丹心」も伴う。他に「氷心」「皓皓たる心」など、いずれも純粹な汚れなき心を形容したものであり、さらに「丹心」「赤心」の「赤」から心を「紅葉」や「火」に形容したり、「氷心」「皓皓たる心」の「白」から心を「雪」に形容したりする派生形もある。桜田の蓮田・関・斎藤監物、坂下の河野躰三の詩を見てみよう。

今日杞憂一日深 今日杞憂一日深し

孤忠欲挽夕陽沈 孤忠挽かんと欲す 夕陽沈む

休言身死無功效 言ふを休めよ身死して功效なしと

必有明神鑒赤心 必ず明神ありて赤心を鑒みん

(蓮田市五郎「幽居雜詠」)

洋夷未驅身先死 洋夷未だ驅れず身は先に死す

一片丹心好奏天 一片の丹心好し 天に奏す

(蓮田市五郎「幽居雜詠」)

仰不愧天寧愧世 仰いで天に愧ぢず 寧ぞ世に愧ぢんや

丹心如火亦明誰 丹心火の如きも 亦誰にか明さん

満山風雪吟懷豁 満山の風雪吟懷豁し

正是從容就義時 正に是れ 從容 義に就く時

(関鉄之助「被縛將帰郷国即得一絶」)

瘦梅微雪兩無塵 瘦梅 微雪 兩つながら塵なし

慙殺尋常汚俗人 慙殺す 尋常汚俗の人

永唱尊攘之大義 永く唱ふ 尊攘の大義

願看継述更加新 願はくは看ん 継述 更に新を加ふるを

(関鉄之助「晚冬歩某氏韻」)

報国丹心嗟独力 報国の丹心 独力を嗟き

回天事業奈空拳 回天の事業 空拳を奈せん

(斎藤監物「題兎島高德書桜樹」)

生来兩度決必死 生来 兩度 必死を決す

二十五年又迎春 二十五年 又 春を迎ふ



丹心一片斃不已 丹心 一片斃れて已まず

再生又掃大羊塵 再生 又掃ふ 大羊塵

(河野頭三「壬戌元旦」)

いずれの詩にも「丹心」「赤心」の語が見えるほか、関の「晚冬歩某氏韻」に見える塵なき「梅」と「雪」は作者の心の純粹さを喩えたものと考えてよい。

おおむね「丹心」と言う場合、「天」「義」「尊攘の大義」「報国」などとあるように、それは天皇・国家・天に対して言うことが多く、「忠」が念頭に置かれ、次の(3)において述べる「孝」と対を為している。公私それぞれの場におけるあるべき姿と考えられる。

また次のように「報国尽忠」といった形で勤王を伝える河本の詩もある。

奮然決起掃榛荆 奮然決起して榛荆を掃ひ

一劍直当百万兵 一劍 直ちに当らん 百万の兵

成否元来是天耳 成否は元来是れ天のみ

欲留報国尽忠名 留めんと欲す 報国尽忠の名

(河本杜太郎「絶命詞」)

成果の有無は天命によると詠まれているので、「報国尽忠」の精神こそが重要であるとする河本の心情を読み取ることができる。そのほか蓮田に

生前恩沢報無処 生前の恩沢 報ゆるに処なし

除奸聊知效寸忠 奸を除き 聊か寸忠を效す

(蓮田市五郎「無題」)

道理貫肝義埴胸 道理は肝を貫き 義は胸に埴つ

従容笑処死生中 従容として笑ひて処す 死生の中

安知一片忠魂鬼 安ぞ知らん 一片の忠魂の鬼

夙夜儼然護皇宮 夙夜 儼然として皇宮を護らん

(蓮田市五郎「幽居雜詠」)

といった「忠」を詠み込んだ詩がある。さらに「幽居雜詠」には「皇宮を護らん」とあって、勤皇思想を確認することができるといえる。これに関連して、桜田の蓮田・河野、坂下の平山兵介・<sup>\*16</sup>広木松之介の詩に見える「皇道」「至尊」「天恩」「皇基」という形の勤皇思想を見ておこう。

皇道久衰頹 皇道 久しく衰頹す

誰能戴至尊 誰か能く至尊を戴かん

姦曲重慘毒 姦曲 慘毒を重ね

醜虜勢吐吞 醜虜 勢 吐吞す

不有迅雷断 迅雷の断あらずんば

争支狂浪翻 争でか狂浪の翻るを支へん

嗟予深感激 嗟 予 深く感激し

先士報天恩 士に先じて天恩に報ず

(蓮田市五郎「無題」)

誓掃胡塵出鄉関 胡塵を掃はんと誓ひて郷関を出づ  
瘦馬瓢々遙故山 瘦馬 瓢々として故山を遙かにす

二十四年天恩重 二十四年 天恩重し

拳鞭直去暮雲間 鞭を挙げて直ちに去る 暮雲の間

(河野頭二「将出家郷書感」)

丈夫拋義死何悲 丈夫は義に抛る 死何ぞ悲しまん

成敗在天寧可期 成敗は天に在り 寧ぞ期すべけんや

骸骨縦消武州土 骸骨は縦たひ武州の土に消ゆるとも

精神留欲護皇基 精神は留まりて皇基を護らんと欲す

(平山兵介「辞世」)

雖傾倒千瓢 千瓢を傾倒すと雖も

無由扶正氣 正氣を扶く由なし

不如留精靈 精靈を留むるに如かず

千載護皇基 千載 皇基を護らん

(広木松之介「謝投酒瓢」)

平山の「成敗は天に在り 寧ぞ期すべけんや」は、先の河本の「絶命詞」に見えた「成否は元来是れ天のみ」と

同質のフレーズであり、「皇基を護らん」とする精神が重要であるとする思いを見てとることができるともいえる。

以上、「丹心」について再考した。心の純粹さを示す「丹心」「赤心」等の語が、時に「忠」と連動して「大義」「国」「皇道」「皇基」に向けられていることが了解せられよう。

### (3) 孝

最後に「孝」の確認をしておこう。「狂者」の行為が「丹心」による報国のためのものであったとしても、それは「孝」をないがしろにしてよいということではない。「狂」の背景に「丹心」とともに「孝」が存在することが強調される。ここには「忠」と「孝」が一体となった思想が背景に存しなければならぬが、それについては次節で言及する。もちろん「狂者」として国事に奔走する以上、不孝を働くことは回避できない。だからこそ、その思いを作中に残していく。桜田の蓮田、坂下の小山鼎吉・河本・児島の詩を見てみよう。

嗟余十歳喪父親 嗟余十歳父親を喪ひ

成立一仰慈母訓 成立一に仰ぐ慈母の訓

大義不成忠孝廢 大義は成らず 忠孝は廢す

一生心事向誰陳 一生の心事 誰に向って陳べん

(蓮田市五郎「囚居雜詠」)

既以一身託劍銃 既に一身を以て劍銃に託す

只悲慈母碎心腸 只だ悲しむ 慈母の心腸を碎くを

(蓮田市五郎「幽居雜詠」)

欲明大義正華夷 大義を明らかにして華夷を正さんと欲す

頑鈍豈凶失事宜 頑鈍 豈に凶らんや 事宜を失するを

身死功名難共得 身死して 功名 共に得難し

業空忠孝兩相虧 業空しく 忠孝 両つながら相虧く

一念至此欲腸斷 一念 此に至りて腸断せんと欲す

淋漓只看血淚垂 淋漓 只だ看る 血淚の垂るるを

二十八年夢乍覺 二十八年 夢乍<sup>なごま</sup>ち覺め

一片清氣大空帰 一片の清氣 大空に帰る

(蓮田市五郎「幽居雜詠」)

人生得失本悠悠 人生の得失 本 悠悠

奇変如斯亦曷憂 奇変 斯の如きも 亦 曷<sup>なん</sup>ぞ憂えん

唯為北堂老親在 唯 北堂老親の在るが為に

数行涕淚落難留 数行の涕淚 落ちて留め難し

(小山鼎吉「就囚」)

单身一自獄中下 单身 一たび獄中に下りしより

疾病生死唯任天 疾病生死 唯だ天に任ず

縦遇妻兒離別苦 縦<sup>たと</sup>ひ妻兒離別の苦に遇ふも

聖恩難已三千年 聖恩 已み難し 三千年

(小山鼎吉「獄中病疫」)

感慨男兒不思家 感慨の男兒家を思はず

悲時心緒乱如絲 時を悲しみては心緒乱れて絲の如し

風雲豈無相逢日 風雲に相逢ふの日なからんや

潜匿唯須待斬蛇 潜匿して唯だ須らく蛇を斬るを待つべし

(河本杜太郎「偶成」)

廿年鞠育未酬恩 廿年の鞠育未だ恩に酬いず

世事多難頻走奔 世事多難にして頻りに走奔す

紅淚數行燈下別 紅淚數行燈下の別れ

默而再拜大乾坤 黙して再拜す大乾坤

(児島強介「無題」)

いずれも個人(私)的な父母(妻子)への「孝」と志士の本懐(公)である「忠」との間に揺れ動く心情の吐露となつているが、主意は志士であるがために父母妻子を捨てたことを悔やむ部分にはない。いずれも「妻」「兄」「父親」「慈母」「忠孝」「北堂老親」「家」「恩」に、「大義」「人生の得失」「聖恩」「蛇を斬る」「世事多難」といった「忠(報国)」の概念が対応しており、「狂者」としての自らの「不孝」はやむを得ざるものとして決して否定されていない。

さらに一つ付け加えておくと、本節の冒頭で示した蓮田の「凜々たる英名は千載に流れん」、(1)で示した関の「姓名世に在り寧ぞ狂を辞せんや」、(2)で示した河本の「留めんと欲す報国尽忠の名」、(3)で示した蓮田の「身死して功名共に得難し」など、いずれも「名」へのこだわりが見えるが、これも「孝」心に基づくものである。たとえ『孝経』に

身を立て道を行ひ、名を後世に揚げ、以て父母を顕はすは、孝の終なり。（『孝経』開宗明義）

とあって、「名」を後世に残すことが父母を顕すという「孝」の実践につながる思想に基づいている。

以上、桜田・坂下の両事件に参加した志士たちの詩に表現された「狂」「忠」「孝」を軸に見てきた。一つ補足しておく、この段階では当然の如く幕府そのものへの批判はない。「狂拳」の対象を単語レベルで拾ってみると「仇」「奸臣」「妖雲」「洋夷」「尋常汚俗人」「大羊塵」「榛荆」「胡塵」「姦曲」「醜虜」「華夷」「蛇」などが挙げられ、井伊・安藤・夷狄がその対象であって、幕末期の幕府を「狂拳」の対象とする詩は見られない。もちろん倒幕思想そのものが未だ熟していない時期の作であることが理由となるが、これは二つの事件に参加した志士の多くが水戸藩出身者、もしくは水戸学の影響を多く受けた者という理由もある。基本的に尊王敬幕の立場を取る水戸藩においては、幕府の安定化が中心となり、したがって「狂拳」の成果を示す「世運を回らす」「此の民を救ふ」などは、幕府の安定した姿を思い描いたものと見るべきであろう。

では次に、両「狂拳」に加わった彼らの詩想を形成した水戸藩の思想について考えてみたい。

## 二 藤田東湖の詩文

幕末の主役は薩長土の三藩であったが、倒幕が本格化する前夜は水戸藩が主役であった。水戸藩は政治・学問のもう一つの中心であったと言つてよい。徳川斉昭・徳川慶喜を擁する当藩が政治的な影響力を持ち、それが桜田門外の変・東禅寺事件<sup>\*19</sup>・坂下門外の変・天狗党の乱<sup>\*20</sup>という四つの事件を引き起こした政治的側面は言うまでもなく、思想的にも水戸藩は志士たちの原動力となっていた。特に会沢正志斎の『新論』『迪彝篇』及び藤田東湖の『弘道館記述義』『回天詩史』『和文天祥正気歌』は志士たちに多大な影響を与えたとされている。

所謂水戸学の中心が正志斎と東湖であることは二人の著作を通して数多くの研究が為されてきた。本節では東湖

の詩文をいくつか取り上げながら、先節で論じた水戸志士たちの詩中に表れた「狂」「忠」「孝」の思想的メカニズムについて考えてみたい。

(1) 忠孝

まず東湖の「忠」「孝」をモチーフとした詩を二つ見てみよう。

孝子即忠即孝 孝子は即ち忠 忠は即ち孝

誰言忠孝不両全 誰か言ふ 忠孝 両つながら全からずと

(「歩韻酬友人見寄」)

養我父与母 我が父と母とを養ひ

一意事天皇 一意 天皇に事ふ

(「詠古雑詩(その四)」)

「孝子即忠、忠即孝」については、先節においても「忠」と「孝」が「狂拳」の正当性を保証する道徳的両輪であると述べた。この問題について『弘道館記述義』の「忠孝二ならず」の条では次のように言っている。

人道、五倫より急なるはなく、君父より重きはなし。然らば則ち忠孝は、名教の根本、臣子の大節、而して忠と孝とは途を異にし、帰を同じくす。父に於ては孝と曰ひ、君に於ては忠と曰ふ。吾が誠を尽くす所以に至りては、則ち一なり。……進んで君に事へ、其の大義を全くするは、乃ち親に孝なる所以なり。……忠と孝と其の本を二つにせず。(『弘道館記述義』)



又曰く「死を以て国に殉ずれば、力を父母に竭すを得ず」と。此れ冬温め夏清しくするの孝たるを知りて、身を殺して仁を為すの大孝を知らざるなり。（『弘道館記述義』）

一番目の文で「忠と孝とは途を異にし帰を同じくす」「忠と孝と其の本を二つにせず」と言い、さらに二番目の文では『論語』衛霊公の「志士・仁人は、生を求めて以て仁を害することなし、身を殺して以て仁を為すことあり」を典故として、「志士」とは「大孝」<sup>\*21</sup>を為す者と定義づけている。

これに関連して正志斎の『迪彝篇』に見える「孝」について少し言及しておこう。正志斎は「忠孝の二つは百行の本なり」（『迪彝篇』師道七）と言ひ、その「孝」が示す所は

孝は徳の本にして、愛と敬とを天下に達すれば即ち是を仁義とす。故に徳教、四海に加はるを天子の孝とし、一国を治むるを諸侯の孝とし、法を守るを郷大夫の孝とし、君長に忠順なるを士の孝とす。（『迪彝篇』師道三）  
は、  
というように根源的であると同時に各階層によつて異なる形で表れているため、幅広い。そして「大孝」については、

親に事へんには、目前に其の口体を養ふのみにあらず、父祖の業を継ぎて、其の志を達するを大孝といふ。（『迪彝篇』師道三）

と言ひ、「口体を養ふ」孝の上位に父祖の業を継いで志を達成するという「大孝」が位置づけられる。正志斎の言う「口体を養ふ孝」は東湖の「冬温め夏清しくするの孝」に等しい。さらに「志士・仁人」を引いて次のように言っている。

志士・仁人は身を殺して仁をなす者なり。仁に志しては、一身の養を顧みず。其の父祖、君子の人ならば、如何に口体を養ひたりとも、仁を為さんとする其の志を傷ひては孝と言ひ難し。〔迪彝篇〕 師道三)

ここでは「仁を為す」ことが至上の「孝」として位置づけられている。これらはいずれも「孝子即忠、忠即孝」に基を同じくするものと言えよう。

話を東湖の詩にもどそう。先の詩に見られるものは天皇への「忠」と父母への「孝」の両立であり、さらに、その向かう方向は同じであるとして「大孝」という概念が提示されている。この「忠孝」という儒教倫理と、尊皇思想が融合している点に水戸学の特質があり、これは『弘道館記述義』をはじめとして、東湖の著述の随所に見える。また正志齋においては先に示した『迪彝篇』の他、『新論』をひもとけば、天祖神が「忠孝」の教えによって日本を建国したとし、天皇を中心とした国体論を説いて、より理論化された「忠孝」観を見ることが出来る。

これは吉田松陰が嘉永四年に脱藩して水戸へと向かう際に残した詩にも期せずして示されている。

不忠不孝事 不忠不孝の事

誰肯甘為之 誰か肯て甘んじて之を為さん

一諾不可忽 一諾 ゆるが 忽せにすべからず

流落何足辞 流落 何ぞ辞するに足らんや

縦為一時負 縦 た ひと時の負を為すとも

報国尚堪為 報国 尚ほ為すに堪ふ

(『東北遊日記』 辛亥十二月十四日)

ここで吉田は自らを「不忠不孝」の者・「一時の負を為す」者としながらも、それは「報国」のためにやむを得

ないことと詠んでいる。もちろん、ここに言う「不忠」は脱藩をふまえたものであるから藩主に対するものであり、天皇・国家に対するものではない。先の東湖の言をかりれば、ここに言う「報国」が「大孝」に相当する。

また東湖には「丹心」と「狂」を含む次のような詩がある。

脱来生死関 脱し来たり 生死の関

相遇且開顔 相遇ひて且く顔を開く

一片丹心耿 一片丹心耿らかなり

双行血涙漣 双行 血涙漣たり

清狂君幸恕 清狂 君 幸いに恕せ

顛沛我何患 顛沛 我 何をか患へん

好酌樽中酒 好し 樽中の酒を酌みて

悠然見南山 悠然として南山を見ん

〔無題〕

「丹心」より出た「清狂」の爲したことであるからと理解を求める詩意である。この詩は文政一二年の作で、藩主齊修なりゆのぶの後継者をめぐって東湖が奔走していた時のものである。いわゆる齊昭擁立に関わる時の作であり、本事件は『回天詩史』の中でも東湖が死を決意した場面の一つとして記されている。

また次のような和歌も見られる。

天つ日を おほへる雲の さみだれに 山ほととぎす 鳴きわたるらし

幕末期の漢詩や和歌で太陽が出てきた場合、それは天皇をさすものと考えてよく、ここでは幕府の奸臣を天皇を蔽う雲として表現すると同時に、そこから予想される「将乱」をホトトギスを以て象徴している。ここに東湖の危機感を読み取るとはたやすい。そして「和文天祥正気歌」に見られる歴代の日本の国難を救った「正気」の持ち主たちに自らをオーバーラップさせ、それを次世代に継承しようとしたのだと言える。『回天詩史』の冒頭「三たび死を決して而も死せず」の二回目がこの斉昭擁立の件、三回目は「和文天祥正気歌」にも詠まれている斉昭幽閉の件であるが、一回目は文政七年にイギリス人が常北の天津に上陸した時の事件を指す。その際、東湖の父幽谷は東湖にイギリス人殺害を命じ、次のように語ったと記されている。

頻年、醜虜、辺海を窺竄し、時に或は大砲を鳴らして我人民を震驚す。其の傲慢無礼、之を何と謂はん。而して世を挙りて姑息無事を喜ぶ。吾は恐る、其の或は之を放還するの策に出で、以て一日の安を苟もすることを。果して然らば、堂々たる神州に、一の具眼人なきなり。吾甚だ之を愧づ。汝速に天津に赴きて、窃に動静を伺ひ、若し放還の議の決するを審らかにせば、直に夷人の舎に入り、臂力を掉ひ、夷虜を鑿にし、然る後、従容として官に就きて裁断を請ふべし。一時の権宜に出づと雖も、少しく神州の正気を伸ばすに庶からん。吾不幸にして、女子多く、唯汝一男あるのみ。汝にして死せば、吾が祀絶えん。是れ吾と汝との命の窮まる時なり。汝顧慮することなかれ。〔回天詩史〕

外国船に対する幕府の因循姑息ぶりを批判し、最後に「神州の正気を伸ばす」ため、たとえ「祀」が絶えてしまっても、家族的な「孝」の上位に存する「大孝」を為すことを父が子に求めている。これは先の吉田の詩とも通じよう。では、ここに言う「神州の正気」とは何であろうか。

## (2) 正気

「神州の正気」については、東湖の「和文天祥正気歌」の第一段に詠まれる「天地正大の気」から見ていくのがわかりやすい。

天地正大気 天地正大の気

粹然鐘神州 粹然として神州に鐘あつまる

（和文天祥正気歌）

本詩は元軍に屈せず最後には処刑された文天祥の「正気歌」に和したものだ。この冒頭部に「正気」と「神州」が同居し、既に東湖のオリジナルに近い。吉田松陰の「正気歌、次文文山韻」にもこの「神州の正気」は登場しており、吉田の「正気歌」は明らかに東湖のそれを媒介としている。

東湖は本詩の序文で「正気」を次のように説明している。

正気は、道義の積む所、忠孝の発する所なり。……我の所謂正気は、万世に亘りて変ぜざる者なり。天地を極めて易はらざる者なり。（和文天祥正気歌「序」）

ここに「正気」を「道義」や「忠孝」の淵源であると言い、さらに「正気」が「神州」に集まり、山川風土などさまざまな形であらわれていると本詩は続く。そしてその「正気」が人に宿ると、忠誠・武勇の士を生み、神州を治めてきた天皇の徳風のように普く行きわたっていると述べる。

続く第二段では始めに

不世無汚隆 世として汚隆なくんばあらず

正氣時放光 正氣時に光を放つ

〔和文天祥正氣歌〕

と詠み、日本の歴史上の国難について触れ、そのたびごとに「正氣」を持った者があらわれたとする。以下にその危機的狀況を忠誠・武勇の士が救ったこと例示し、最後にそのまとめとして次のように詠んでいる。

乃知人雖亡 乃ち知る 人亡ぶと雖も

英靈未嘗泯 英靈 未だ嘗て泯ほろびず

長在天地間 長く天地の間に在って

隱然叙彝倫 隱然 彝倫を叙するを

〔和文天祥正氣歌〕

すなわち国難に際しては必ず忠臣義士が現れて「正氣」を振るい起こすものであり、その士のすぐれた魂魄は永遠に滅びることなく、彝倫（道義）を失わないよう導くものだと意である。

以上、「(神州) 正氣」に関する記述を見た時、それが本章の第一節で言及した「狂拳」の正当性を保障する「忠」「孝」の淵源として位置づけられていることがわかる。つまり国難に際しても、国家を救い得る一者が持つ者、それが「神州の正氣」であろう。では、東湖は「狂」「狂拳」そのものをどのように見ていたのであるうか。

### (3) 狂

東湖は「狂者」について「壬辰封事」の中で次のように言っている。

狂狷の士は国の元氣に御座候。(「壬辰封事」)

ここで「狂狷の士」を「国の元氣」と言い、また「壬辰封事」や「弘道館学則」において次のように詳説している。

元氣も宜しく志も大に、身分をかへりみず、諸事張込つよき者を、狂者とは可申候。守るべき事は屹と相守り、すまじき事は決して不仕、恥をしり、義を重んじ候者を、狷者とは可申奉存候。(「壬辰封事」)

狂狷も亦聖賢の与する所なり。斐然として章を成し、進取の益も亦多し。(「弘道館学則」)

ここに語られる「狂者」とは、実行力を兼ね備えた聖賢を補佐する者ほかならない。では「狂狷」の対象となる者については、どのように述べているのであろうか。攘夷という視点からそれをさぐっていけば、夷狄を対象とした「狂狷」の記述は東湖・正志斎ともに枚挙に暇がない。ここでは『回天詩史』の中の「小人」について語る部分を見てみよう。

衆思を集め、群力を宣ぶるは、固より人君の要務、而して大いに慮るべきもの二あり。雷同の弊・朋党の禍、是なり。小人、君に事ふるに、小廉曲勤、過失なきが如く、姑息摸稜、殆ど中庸に類し、己を枉げ人に従ひ、意必ず固より我なき者に似たり。人君言を發すれば、大夫之を賛し、大夫議を建つれば、群僚之を成す。畜に之を賛し之を成すのみならず、務めて其の意を迎合し、脅肩諂笑、至らざる所なし。其の君臣の間、殆ど一帯にして間なきものに似たり。是に於て人君大いに喜び、以て吾能く衆思を集め群力を宣ぶと為す。一旦、變の不意に起るに及びて、君命ずるも大夫奉ぜず、令するも群僚従はず。甚だしきは門を開いて賊を揖し、戈を倒

にして後を拒ぐ。向むかの賛成迎合せしもの、悉く変じて仇讐と為る。豈に悲しまざるべけんや。(『回天詩史』)

「小人」は一見「中庸の臣」の如く振る舞い、君主の信頼も厚いのだが、その裏で朋党を形成し、一旦不意の事態に陥れば、徒党を組んで君主に背く者であるとして、東湖はそれを厳しく糾弾している。

こういった「小人」こそが狂拳の対象となることになる。これについて正志斎は

天を慢る者は聖人の誅を免れず。天地の心に背かば、縦令、今、眼前に天誅を免るるとも、天定まれば、斯の左道は必ず破滅すべし。(『迪彝篇』神天)

と言い、「天を慢る者は聖人の誅を免れず」と明言している。

以上、東湖の詩文を概略的に見てきた。幕末期における東湖や正志斎の影響力を考えた時、桜田門や坂下門に向かつていった志士たち詩想が、東湖や正志斎の思想の中で育っていったものと考えて大過あるまい。もちろん、井伊・安藤要撃という「狂拳」は、彼らの側からすれば「正気」による「義拳」、即ち「大孝」であったことは言うまでもない。即ち彼らは自らを天誅を下す存在であり、そうである以上「忠孝」の両輪を兼ね備えた「大孝」を為し得る「聖人」でなければならなかったのである。

## おわりに

本章では、桜田・坂下の両事件に加わった水戸志士の漢詩を手掛かりに彼らの「狂」「忠」「孝」に対する思想的メカニズムを検討し明らかにし、さらに彼らの思想を形成した東湖や正志斎の詩文にも少しく言及し、水戸志士ら



の詩想の原型を確認した。とりわけ東湖については、水戸藩の若者たちや、その著作を読んで心を振るわせた他藩の志士たちへの影響力を考慮せねばならない。また松陰から二次的に長州の久坂玄瑞や高杉晋作へ東湖の精神が継承されていった形跡もある。これらを考え合わせれば、東湖が維新に果たした役割の一端をうかがい知ることができよう。

ただ東湖・正志斎の思想体系上の「狂」「忠」「孝」の位置づけにはより詳細な考証が必要であろう。また、東湖から松陰、松陰から高杉・久坂へと至る精神の継承についても、より詳細に検討する必要がある。これらの諸問題については、水戸学の伝播の問題と関連させつつ今後の課題にしたい。

\*1 水戸藩属吏。井伊要撃の際に負傷し、脇坂邸に自首。翌文久元年に斬処された。二十九歳。

\*2 水戸藩士。井伊要撃後に脇坂邸に自訴し、斬奸状を提出した。七月に三田藩邸で死亡。三十一歳。

\*3 岡本韋庵『大日本中興先覚志』（開導社、明治三四年）の堀利熙伝は当該文書を引きつつ

幕人の攘夷を主とし、容を好み議を正し、敢て進取する者は、堀利熙にしくはなし。……安政中、監察に擢ひきあぐられ、函館奉行に転じ、既にして外国奉行と為る。此の時に当りて、天皇、攘夷の詔を下す。而れども外人益ます猖獗しやうけつにして、屢しばしばは我が民を侮辱す。利熙奮激し、説きて外人を諭し、之をして状なきを謝せしめんとす。時論之を聽よしするも、閣老安藤信正等、外人の恫喝を讒おそれ、將に其の館を城南御殿山に築かんとす。利熙切に諫むるも、信正は声を励まして之を喝る。利熙、家に帰り、慨然として書を作り信正に遣る。言ありて曰く「向に微軀を顧みずして激論妄答す。其の罪、万死に当る。乃ち肝腦を砕くだき腸血を絞しぼりて、聊いさか鄙言を述べん。閣下、少しく容れんことを請ふ。墨夷の都督、微ひかかに貴邸に行き、専ら我が政務を論ず。閣下、共に餐を同ともにせられ、之を尊ぶこと師父の如くし、遂に刑典数部を許す。彼、酔倒の余り、閣下の侍妾に戯るるに、閣下許して之に与ふ。彼、居館を御殿山に築かんことを請へば、閣下、遂つひに之を許す。此れ既に大義を犯す者、焉これより甚あだしきはなし。窃ひそかに聞く「彼専ら帝を廢するの事を論じ、

閣下、国学者をして我が旧典を按ぜしめ、私に其の事を議す」と。呬、之を何と謂はんや。実に天下の大賊にして、天誅も容れざる所なり。某、今、屠死す。其の言や必ず善なり。閣下、少しく容れられんことを請ふ。書に臨みて泣涕に勝へず」と。乃ち腹を屠りて死す。年四十三。実に万延紀元冬十一月五日なり。書、信正に入るも聴かるるなし。……是に於てか坂下の事あり。

と述べている。

- \* 4 江戸の儒者。『海防備録』を著し、『芻言』を徳川斉昭に建白した。斉昭は藤田東湖に天山を水戸藩の顧問として招くよう説得させたが固辞した。安政の大獄の際に病没。六十三歳。
- \* 5 明の人。字は景明。もと元の儒生であったので、生涯明王朝に出仕しなかった。
- \* 6 後漢の人。清節をもって知られ諸官を歴任するが、東錮の禍に際して自ら獄に至り処刑された。
- \* 7 高杉の詩にあった「佯狂」を「真狂」の対概念としてよいかどうかは今後の課題としたい。
- \* 8 水戸藩士。事件後各地を奔走・潜行したが、捕吏に探知され、文久二年に斬に処せられた。三十九歳。
- \* 9 越後の人。高山彦九郎の人と為りを慕った人物であった。勤王の志士となって坂下門外の変に参加したが、その場において討ち死にした。二十三歳。
- \* 10 下野の商人。藤田東湖や茅根伊予之介（安政の大獄にて死亡）に師事し、尊攘の志を持った。大橋訥庵の指示を受け、安藤襲撃の準備を行ったが、病気のため当日は不参加。後に捕らえられ獄死した。二十六歳。
- \* 11 楊繼盛（椒山は号）は明代後期の官僚。直諫の士として知られ、アルタン汗の侵入に際し弱腰であった仇鸞を痛罵して罪を得、また嚴嵩の十罪五奸を暴いて棄死となった。胡詮は南宋の人。宰相秦檜が外国と和親するのを諫めた人物。
- \* 12 翟義は前漢末の人で王莽に対し兵を挙げた人物。また徐敬業は唐の人で則天皇帝を排斥せんと乱を起こした人物。ともに失敗し殺された。
- \* 13 江戸の儒者。安藤信正襲撃計画の立案・斬奸趣意書を起草したとされる。事件の前に捕らえられ、獄中で病気となり、出獄して宇都宮藩に預けられたが病死した。四十七歳。
- \* 14 水戸の神官で、桜田門外の変に参加し、重傷を負って老中脇坂邸に自訴し、斬奸状を提出した。後日、吟味中に死亡した。三十九歳。
- \* 15 下野の医者。堀利熙の邸に寄寓して寵を受け、堀が安藤信正に辱められ屠腹したことにより坂下の拳に参加した。

二十四歳。

\* 16 水戸藩士。児島強介と安藤要撃の同志を求めて奔走し提携に周旋した。坂下門外において討ち死にした。二十二歳。

\* 17 水戸藩属吏。井伊要撃の後は脱して加賀に潜伏し、さらに鎌倉の上行寺に寓した。一挙の三周忌の日に自刃した。二十九歳。

\* 18 下野国出身の文人。決行の際には郷里にあつて期に遅れ、直接は参加できなかった。しかし後に幕吏に捕らえられた。後に釈放され明治二四年に没した。息子の馨三郎は天狗党の拳兵に加入し、武田耕雲斎に従つて敦賀まで行軍し斬首された。十九歳。

\* 19 文久元年に水戸藩の攘夷派浪士一四名が江戸高輪東禅寺のイギリス公使館のオールコックらを襲撃した事件。

\* 20 元治元年に水戸藩の尊攘派天狗党が引き起こした争乱。天狗党は藩主徳川斉昭の藩政改革を機に登場した軽格武士を中核とする急進派で、保守派の諸生党及び天狗党の鎮派と対立した。攘夷延期を不満として筑波山に挙兵し、心事を一橋慶喜に訴えるという目的で大挙上洛をめざしたが、途上金沢藩に降伏し、武田耕雲斎・藤田小四郎らが斬罪に処せられ落着した。

\* 21 中国の古典の中にも「大孝」という語は「孝に三あり。大孝は親を尊ぶ」「孝に三あり。……大孝は置しからず」（ともに『礼記』祭義）などがあるが、東湖がここで示している「忠」と連動するものではない。ただし「不孝」とされる五つの中に「君に事へて忠ならざるは不孝なり」（『礼記』祭義）とあるほか、「君子の親に事ふるや孝、故に忠、君に移すべし」（『孝経』広揚名章）、「孝は君に事ふる所以なり」（『大学』）など、忠・孝の連動を見ることもできる。

\* 22 『論語』陽貨に「子曰く、古者は民に三疾あり。今や或は是れも之れ亡きなり。古の狂や肆、今の狂や蕩。古の矜や廉、今の矜や忿戾。古の愚や直、今の愚や詐のみ」とあり、『論語集注』は「狂とは、志願の太高なるなり」と注している。また子路に「子曰く、中行を得て之に与せずんば、必ずや狂狷か。狂者は進みて取る。狷者は為さざる所あり」とあり、『論語集注』は「狂とは、志極めて高くして行ひ掩はれざるなり」と注している。

## 第5章 武市瑞山の詩想 —権道 是か非か—

### はじめに

本章で取り上げるのは、土佐勤王党首武市瑞山の詩想である。とりわけ、吉田東洋暗殺を皮切りに、彼が文久二年の京都で指示したとされる「狂拳（天誅）」を、彼自身がどのように位置づけていたかという問題を、土佐の牢獄で詠んだ漢詩を手がかりに論じていく。

まず第一節では本章のキーワードである「権」「権道」が持つ意味を考える。続く第二節では武市自身が「権」「権道」をどのようなものとして位置づけていたか、また武市とつながりの深かった長州藩士、とりわけ久坂玄瑞と高杉晋作の両名に影響を与え、武市にも少なからず影響があったと思われる吉田松陰の言説を見ていく。最後に、第三節において、武市の獄中詩を検討し、彼の詩想を論じる。

なお、本章では日本史籍協会編『武市瑞山関係文書（一・二）』（以下『文書』と略記）（東京大学出版会、一九二九、二〇〇三年復刻）を中心資料として使用し、瑞山会編『維新土佐勤王史（以下『勤王史』と略記）』（富山房、一九一二年）を補助資料として使用した。

### 一 権のメカニズム

本章では「権」「権道」<sup>\*1</sup>の理論構造を、典拠となる中国古典で確認しておく。先に、その大枠を理解するのに都合のよい文章から見てみよう。

夫れ権謀に正あり邪あり。君子の権謀は正、小人の権謀は邪。夫れ正なる者は其の権謀は公、故に其の百姓の為に心を尽すや誠。彼の邪なる者は私を好み利を尚ぶ。故に其の百姓の為にするや許。夫れ許なれば則ち乱れ、誠なれば則ち平かなり。〔説苑〕権謀

ここに「権」には正道である君子の「権」と、邪道である小人の「権」とがあり、その区別は公益と私利の別にある。ここに「権」には正道である君子の「権」と、邪道である小人の「権」とがあり、その区別は公益と私利の別にある。ここに「権」には正道である君子の「権」と、邪道である小人の「権」とがあり、その区別は公益と私利の別にある。ここに「権」には正道である君子の「権」と、邪道である小人の「権」とがあり、その区別は公益と私利の別にある。

権とは経に反して、然る後善ある者なり。〔春秋公羊伝〕桓公二年

ここで「権」とは手段は経（正道）に反していても、その結果が経の目指す道（公益）に合致するものとして定義されている。

ではその代表的な具体例を提示しよう。

淳于髡曰く「男女授受するに、親みすからせざるは礼か」と。孟子曰く「礼なり」と。曰く「嫂あはね溺るれば則ち之を援すくふに手を以てするか」と。曰く「嫂溺るるに援はざるは、是れ豺狼なり。男女授受するに、親みすからせざるは礼なり。嫂溺れ、之を援ふに手を以てするは、権なり」と。曰く「今、天下溺る。夫子の援はざるは何ぞや」と。曰く「天下溺るれば之を援ふに道を以てし、嫂溺るれば之を援ふに手を以てす。子手もて天下を援はんとするか」と。〔孟子〕離婁上

礼にあっては兄嫁の手に触れることは許されないが、もし兄嫁が溺れていたなら、その手をつかんで救わねばならない。礼には反するが、兄嫁の命を救うという大義には適う。全体を俯瞰し、小義を棄てて大義を取る行為、これ

が「権」であろう。

紙幅の都合ですべての用例を示すことはできないが、「権」として認められる諸例に共通するものは、先の『説苑』にもあった「公」であり「善」である。<sup>\*2</sup>

以上の「権」「権道」の理論が、「狂」「狂者」「狂拳」の理論と結びついた時、「権道」は「狂拳」の際の根拠付けとして語られていくこととなる。次節でそのメカニズムに触れていこう。

## 二 「権」と「狂」

「権」が「狂拳」を正当化する柱の一つであることは疑いようがない。ただ一方の「忠」「孝」が「狂拳」を行う「狂者」の正当性を保証するものであったのに対し、「権」は「狂拳」そのものの正当性を保証するものであったと言える。すなわち、「狂拳」が「義拳」「公」であることの保証である。

本章の冒頭で論及したように、筆者はこれまで維新志士の詩想を「狂」「狂者」「狂拳」、及びそれを正当化する「忠」「孝」「公」を手がかりに論じてきた。そして先節では、中国古典に見える「権」「権道」を概観した。本節では「狂」をめぐる諸論の中に、この「権」がどのように位置づけられるのかを論じていく。

まず『勤王史』に武市が「権」について語ったとされる部分が二か所ある。一つ目は藩主宛建白書の中で、幕府の参勤交代を批判する部分である。

幕府従来之規則、諸侯之妻孥を江戸に置き、毎歳参府仕候に付、財用缺乏之国柄而已に御坐候。是れ全く徳川氏諸侯を弱くするの権道に可有之候得共、如今外夷隙を窺之時に当り候に付、諸侯参勤之規則は、国の遠近、路程之難易を測り、……（『維新土佐勤王志』二八）

ここで参勤交代を幕府が「諸侯を弱くするの権道」として位置づけ、全体的には否定的な論調の中で「権道」を用いていることがわかる。今一つは、暗殺にかかわる武市の発言で、こちらは本章とのかわりも大きい。

瑞山嘗て曰く「権道を以て始めしものは、亦権道を以て終るべきのみ」と。即ち是れ吉田暗殺事件已に権道なれば、固く其の事実を隠蔽して、成るべく同士の犠牲者を出すことなからしめ、以て他日「一藩勤王」の後図を準備するの苦衷に外ならず。（『維新土佐勤王史』九二（上））

ここでは武市は権道によって始めたものは、最後まで権道を貫くべきであると言ひ、『勤王史』の筆者はその始まりを吉田東洋暗殺の一件を以て論じ、「苦衷」と評している。武市にかかる発言があつたことは事実としても、その始まりを論者のように吉田東洋暗殺と直結させるのは聊か躊躇する。<sup>＊</sup>しかしながら、武市が粉飾を否定し、時に非中の是を取ることを認めていたことは動くまい。

では、武市と最も交流のあつた長州藩の志士たちはこの問題をどう見ていたのであろうか。高杉等による横浜居留地襲撃を武市が未然に知り、中止に追い込んだ話はよく知られる所である。その際、久坂が事前に計画を武市にも相談しようとして、高杉が「彼は正論家、必ず反対すべし。且つ事洩れて機を誤るの虞あり」（『勤王史』三五）と述べたとされる。武市と長州藩士らとの間の相互理解がかなりあつたことを示す逸話と言える。

次に長州藩士の行動様式に影響力のあつた吉田松陰の「権」と「狂」に関する言説を『講孟割記』から見ていくことにしよう。この書が『孟子』を解説するものであるという事情にもよるのであろうが、吉田の「権」「狂」に対する見方は両者を手放しで称賛するものではない。まず「道理」と「功効」という対立概念を論じる部分を見てみたい。

蓋し仁義は道理のなすべき所なり。利は功効の期すべき所なり。道理を主とすれば功効は期せずして自ら至る。

功效を主とすれば道理を失ふに至ること少からず。且功效を主とする者は、事皆苟且にして成遂する所あること少し。仮令少しく成遂する所あれども、永久を保するに足らず。永久の良図を捨て、目前の近効に従ふ。其の害、言ふに堪ふべからず。（『講孟劄記』卷一・梁惠王上・首章）

ここでは「道理」と「功效」の対立が「仁義」と「利」、「永久の良図」と「目前の近効」の対立でもあるとし、さらに「功效」の説明の際に「苟且」という語を用いている。この語は、たとえば同じ吉田の『幽囚録』に、来航する外国船に対する幕吏の対応を評して「官吏苟且にして権宜もて処分す」という件りがあり、「苟且」と「権」が連動していることに注目したい。即ち、吉田が『講孟劄記』に言う「功效」「目前の近効」とは、「権」と同質なのである。これは吉田が「権」の具体例を示す次の文でも明らかである。

齊の景公の涕出で呉に女すを見て、一時の権道、保国の良図と思ふの族は、人間に羞恥と云ふあるを夢にも知らず。斯の人をして路に当らしめば、国体を失ひ国事を誤ること、豈限りあらんや。（『講孟劄記』卷三上・離婁上・七章）

ここに言う「一時の権道」「保国の良図」は先の「功效」「目前の近効」に等しく、それはやがて「国体を失ひ国事を誤る」、「羞恥」なき行いであるとして批判している。

さらに本章第一節でも示した溺れる兄嫁を助ける話については、次のように言う。

淳于髡、手を以て天下を援はんとす。孟子、道を以て天下を援はんとす。二説論ぜずして明かなり。然れども後世天下を援ふもの、大抵手を以てせざるはなし。術を以て人を弄し、智を以て世を馭し、自己の誠意に原づかず、一身の実行に本づかざるは、皆道を以てするに非ず。手を以てするなり。齊桓・晋文の覇たる所以、成



湯・文王の王たる所以、論ずる所、道と手との間のみ。道は心に原づき理に従ふ者なり。手は是に反す。（『講孟劄記』卷三上・離婁上・一七章）

ここで「道を以てする」と「手を以てする」の対比を、「王」「覇」の違いに置き換えている。吉田は「権道」を「術を以て人を弄し、智を以て世を馭し、自己の誠意に原づかず、一身の実行に本づかざる」ともと定義づけている。では、吉田は「狂者」については如何に論じるのであろうか。次にそれを追っていこう。

一身若し道を離れば、耳目・手足少しも用に立たず、其の為す所繆戾にして、君子より視る時は、狂人と少しも異なることなし。若し挙げて是を一國に置き天下に置く時は、一國・天下、皆狂国・狂天下となる。狂国・狂天下を以て、外夷の外道・邪魔を防がんとせば、誠に危きことなり。故に人々道の身を離れぬ様に、狂人とならぬ様に心掛くべし。（『講孟劄記』卷四中・尽心上・四二章）

ここで吉田は「狂人とならぬ様に心掛」けねばならないと説く。しかし一方で彼は「権の義・時中の義」（『講孟劄記』卷四上・告子下・首章）と言い、また「不為は猥者の類なり、有為は狂者の類なり」（『講孟劄記』卷三上・離婁下・八章）と言って、「狂者」の行動力を評価する。とりわけ「権の義・時中の義」に関連して次のように言う。

中道の士は美質全徳以て尚たかふることなし。論ぜずして可なり。其の次は常情を以て論ずれば、郷原の人、人に益ありて世に害なき者の如し。其の次は猥者は世俗に異なる者ありと雖ども、大過罪なきが如し。狂者に至りては、礼法を乱り政教を害す。其の世俗の厭ひ悪むとなる。亦宜ならずや。……孟子戦国の世に生れ、其の道遂に流俗汗世に合はず。……是を以て孟子の狂者を重んじ、猥者を之に次ぎ、郷原を悪むの心事を忖度すべし。孔子と雖ども亦同じ。……故に此の道を興すには、狂者に非ざれば興すこと能はず。此の道を守るには、猥者

に非ざれば守こと能はず。則ち其の狂猥を渴望すること、亦豈孔孟と異ならんや。(『講孟劄記』卷四下・尽心下・三七／三十八章)

ここで「中道の士」「郷原の人」「猥者」「狂者」を比較し、「狂者」については「礼法を乱り政教を害す。其の世俗の厭ひ悪むとなる」としながらも、彼らについて語った孔子・孟子が混乱の世に生まれ、そういう時代にあつては「狂者」の「道を興す」力、「猥者」の「道を守る」力が求められていたことを示す。吉田が自らの生きた時代を孔孟のそれと同質視していたことは疑いあるまい。そして、それは武市も同様であつたらう。

本節の最後に「狂」「権」が融合した中で、「公」をいかに捉えるべきかという問題について補足しておこう。というのも、幕末という時代にあつては、何を以て「公」とするのか、どこまでが「私」でどこからが「公」という問題の解釈に揺らぎが見られるからに他ならない。すなわち、ある者にとつては藩が公であり、またある者にとつては幕府が公であり、さらに天皇を公とする者も存在した。「一藩勤王」をめざし、朝廷工作を行つていた武市においては、中間に位置する幕府を飛び越えて二つの公が存在したことになり、その定義は複雑であると言わざるを得ない。このほか、民こそが「天(公)」であるとする思想もあり、天皇↓將軍↓藩主という列の中に民を組み込もうとした時に、どこに配置すればよいのかという問題も生じる。これは今後の課題である。

### 三 武市の詩想

本節では、前節までの「権」「狂」の認識を踏まえて、武市の詩に現れているいくつかのモチーフを手がかりに、彼の詩想を探っていく。なお、本節で扱う漢詩は『文書』の『瑞山先生遺墨』『泣血録之二』所収のものである。まず武市の「狂」の定義を伺い知ることのできる一首を見てみよう。

国家興廢有風義 国家の興廢 風義にあり

風義隕類零佞諛 風義の隕類 佞諛に零おつ

総て名利為亮節 総て名利を以て亮節と為し

或従門閥見賢愚 或いは門閥に従ひて賢愚を見る

知時厲武呼狂客 時を知り武を厲はますを狂客と呼び

忘乱妝文唱丈夫 乱を忘れ文を妝なるを丈夫と唱ふ

何怪昇平三百載 何ぞ怪しまん 昇平 三百載

天然氣運得誰扶 天然の氣運 誰か扶たすけることを得ん

〔偶成〕

国家とその風俗が頽廢し、名利や門閥の高さが節義や賢愚の高さに等しいと見られる、そういう時勢を認識し「武を厲はます」存在が「狂客」であると言う。本書の第二章でも言及した「狂者」出現の時代背景の提示である。次に武市が自らを「狂者」と位置づける詩を見てみよう。いずれも獄中での回想詩である。

吾先草陋一狂夫 吾は先草陋もとの一狂夫

何愁沈淪此得辜 何ぞ愁へん 沈淪 此の辜を得るを

只憾丹心憂国士 只だ憾む 丹心 憂国の士

空罹困厄腐泥途 空しく困厄に罹りて 泥途に腐す

〔偶爾憶或先生〕

聊發太平酬報情 聊か太平を發して報情に酬ひ

憤興微力震丹誠 憤して微力を興して丹誠を震はす

昨昇大厦交俊傑 昨大厦に昇りて俊傑と交はり

今落孤囚撫壁楹 今孤囚に落ちて壁楹を撫づ

切齒常欲岳飛潔 切齒して常に岳飛の潔を欲し

撚髭嘗愍屈原清 髭を撚して嘗て屈原の清を愍む

狂生何怪此羅危 狂生 何ぞ此の危に羅るを怪しまん

動有聖賢志未成 動もすれば聖賢あらんも志未だ成らず

(偶成)

両詩それぞれに「狂夫」「狂生」という語が見え、その正当性を保証する「丹心」「丹誠」という語が伴っている。二番目の詩の「岳飛の潔」「屈原の清」もこれと同質と見てよい。岳飛と屈原については、他の詩とも合わせて後にまた言及する。

ここで注目したいのは、武市の「狂者」の自覚である。自らを「狂者」とし「狂拳」を行ったという自覚があればこそこの「此の辜」「此の危」であり、この結果を怪しむことも愁えることもしないとす。もちろん「狂拳」を伴わない「狂者」はあり得ない。「狂拳」を伴わないのは傍観者であり、「偷生」に他ならない。したがって、武市は「狂拳」を行ったという自覚があったと見るべきであろう。もちろん武市にとっては、それは「義拳」であったことは言うまでもない。こうして今獄中にあるのは周囲の理解がないからというスタンスである。これは武市が獄中の現状を詠んだ

燕雀得時擅 燕雀 時を得て擅ままなり

蒼鷹向暗眠 蒼鷹 暗きに向ひて眠る

如何幽獄裏 幽獄の裏に如何せん

慷慨只呼天 慷慨し只だ天に呼ぶのみ

〔偶成〕

において、自らを「蒼鷹」とし、他者を「燕雀」としている点からも明らかであろう。

では、武市が自らにオーバードラップさせた岳飛・屈原はいかなる人物であったか。次の詩中に現れた人物とともに見てみよう。これらも獄中詩である。

得罪以来幾十句 罪を得て以来 幾十句

光陰如夢值佳辰 光陰 夢の如く 佳辰

囚中無酒空汎淚 囚中 酒なく 空しく涙を汎す

只誦離騷哭楚臣 只だ離騷を誦して 楚臣を哭す

〔端午〕

夜横空枕伴囊螢 夜は空枕に横たはりて 囊螢を伴ひ

昼向幽窗閱聖經 昼は幽窓に向かひて 聖經を閲す

想得天祥安樂國 想ひ得たり 天祥の安樂國

捨生取義姓名馨 生を捨て義を取りて 姓名 馨る

〔偶成〕

一首目の「楚臣」は上の「離騷」からも明らかなように、先の詩にも見えた屈原をさす。では、二首目に登場す

る文天祥を加えた、岳飛・屈原・文天祥の三者のイメージはいかなるものであるのか。紙幅の都合で多くを語ることはできないが、岳飛は忠臣・奸臣による冤罪、屈原は奸臣による冤罪・流謫・清廉、文天祥は獄中・不屈・節義の隠喩として、よく用いられるモチーフである。この三名を詩中に詠んだ武市の心根は、もちろん彼らが背負っていたものに等しい。

次に武市がストレートにその心情を吐露している詩をいくつか見ていこう。まず武市の詩の中で最もよく知られた一首を見よう。

花仍清香愛 花は清香に仍て愛され

人以仁義榮 人は仁義を以て栄ゆ

幽囚何可恥 幽囚 何ぞ恥づべし

只有赤心明 只だ赤心の明らかなるあり

〔偶成〕

ここに詠み込まれた「仁義」「赤心」こそが武市が自認する姿であり、一人獄中にあることによって、さらにそれが顕在化するという。これは自らの「仁義」「赤心」を曇らせるものが、自らを取り巻く他者であることの表明に他ならない。この心情は次の一首でも詠まれている。

忘量身力念酬恩 身の力を量るを忘れ 恩に酬いんことを念ふ

不遠嫌疑吐拙言 嫌疑を遠ざけず 拙言を吐く

忽落暗囚心却潔 忽ち暗囚に落つるも心却って潔し

聊無輕薄俗塵煩 聊かも輕薄俗塵の煩ひなし

〔偶成〕

もちろん武市は獄中に在ることをよしとしているわけではない。獄中であつて為すべきことを為し得ない状況は「儉生」等しいのである。

この獄中であつて生を儉むを愧じるという心情は、次のような形で吐露されている。

一日儉安天下情 一日安を儉む 天下の情

羶風吹起既垂傾 羶風 吹き起り 既に傾に垂んとす

〔偶成〕

ここに見える「儉安」は獄中であつて「義拳」を為し得ない自らを言ったものであり、「儉生」に等しい。また、「羶風（生臭い風）」は武市が対立する者を示すものであり、これは

吁歎此以堂々勢 吁歎 此の堂々たる勢を以て

攘尺腥羶胡羯風 攘ひ尽さん 腥羶胡羯の風

〔聞蟲送〕

という形でも見られる。また時勢を「大風雨」に譬えて、それを獄中感じて「儉生」を表現する次のような用例も見られる。

狂風吹起怒声雄 狂風吹き起こりて 怒声雄なり

雨脚斜飛入房櫳 雨脚斜に飛びて房櫳に入る

何事今宵天上変 何事か今宵の天上の変

潜心端座暗囚中 心を潜めて端座す 暗囚の中

〔五月廿日夜大風雨〕

詩中において武市が「権」字を用いる唯一の例をここで示しておこう。

狡獸窃権愈逞奸 狡獸 窃に権し 愈いよ奸を逞しくす

衰躬痼疾恨千般 躬を衰へて痼疾し 恨み千般

〔午夢覚而得一絶〕

「狡獸」は対立者（幕府）をさすと見てよい。その対立者が「権」を弄し奸を行ったと言う。これは『勤王史』に見えた武市の幕府批判に用いられた「権」に等しい。武市にとって「権」とは対立者（悪）が行使するものであった。

しかし、獄中にあつては、もはや武市がその辣腕をふるい得るのは夢の中だけである。

夢上洛陽謀故人 夢に洛陽に上りて故人と謀り

終衝巨奸氣逾振 終に巨奸を衝きて 氣逾いよ振ふ

覺來浸汗恨無限 覺め來れば 汗に浸れて 恨 限なし

只聽隣鷄報早晨 只だ聽く 隣鷄の 早晨を報ずるを

〔夢覺而得一絶〕



武市が獄中であつて、夢をテーマに詠んだ詩は多い。これは絶命詩とされる。最後に武市の心情を最もよく伺い知ることのできる一首を見ておこう。

三十六年幽夢中 三十六年 幽夢の中

擽身<sup>くわしん</sup>竭力一無功 身を擽<sup>くわ</sup>き力を竭<sup>くわ</sup>して 一も功なし

平生所育<sup>しよよく</sup>為何事 平生 育む所 何事をか為さん

空落孤囚<sup>くわらくこゆう</sup>就不忠 空しく落ちて 孤囚 不忠に就く

〔偶成〕

人生を「幽夢」と称し、その中であつて身を尽くして努力したものの、功績を何一つ挙げられなかったばかりでなく、わが身は獄中に在つて不忠（偷生）をのみ為していると言う。しかし、そこは武市が自らを正義として位置づけられる「夢」の世界でもあつたのではないか。

## おわりに

「権道」は「正道」ではない。したがつて、自ら堂々と「権道」を主張することは、はばかられたと思われる。即ちこれは自らに対して発信する時（自らの狂拳を正当化する、自らに狂拳の遂行を言い聞かせる）や、他者に向けて発信する時（他者の狂拳を正当化する、他者に狂拳を強要する）などに用いられたであろう。

武市は自らを「権」と記していない。これをどのように理解すればよいのであろうか。筆者はこの書かなかつたことに武市の心底が見えると考えている。即ち、武市に見えていなかったもの、武市が体験していなかったもの、これらを考えた時、武市に理解できなかったものが浮き彫りになってくる。高杉は上海渡航を契機に「狂」が発現

した。日本という国家を見据え、「狂拳」でなければ為し得ないものを彼は体感した。ここに「一藩勤王」という、あくまで藩という枠組みにこだわる武市との違いが明らかになるだろう。「権」を非とする武市の維新は、理想化されたそれであり、机上の空論に終わる運命を背負っていたのではあるまいか。

本章では言及できなかったが、このテーマの中の脱藩について述べておこう。

すべての脱藩者がそうだとは言わないが、脱藩は当時であつては、新しい政治スタイル（この場合は勤王を基盤とし、幕藩体制を無みするものと考えてよいかと思われる）が程度の差こそあれ、脳裏にあつたと考えてよい。或いは、ここにも「権」の理屈が働いていたとも考えられる。天誅において「権」を持ち出した武市であつたが、脱藩には目もくれない。もちろん「一藩勤王」を主張した武市にとっては、脱藩が選択肢になかつたことは一目瞭然だが、天誅を行うのは他者であり、脱藩を行うのは自己であるという、この差に注目したい。

\*1 なお、「権」については串田久治氏の『儒教の知恵』（中公新書、二〇〇三年）の第三章「経」と「権」がわかりやすくまとめてある。本章の「権」に関する解説も串田氏の論を出るものではない。

\*2 この他、『墨子』大取や『孟子』尽心上などの用例が「権」を示すものとしてよく知られる。

\*3 吉田東洋暗殺にかかる一件は『勤王史』一八に詳しい。この書の性格から全面的には信頼し難いが、ここでは武市が最終的には「今日の拳、全く国家の爲め己を得ざるに出づ。其の目的、佐幕派を排するに在り。必ずしも元吉（吉田東洋・有馬注）を殺さず、唯重傷を負はすも足る。但し諸君の進退は現場の機宜によりて可なり」と言つたとされている。

\*4 奈良本辰也氏は、この部分を「役人たちは全くなおざりで、場当たりな処分ですませている」と現代語訳しておられる（奈良本辰也『吉田松陰著作選』（講談社学術文庫、二〇一三・一一三頁））。



## 第6章 自由民権運動下の雲井龍雄の一側面

### —『土陽新聞』掲載記事をめぐって—

#### はじめに

明治六年政変に破れて下野した板垣退助と後藤象二郎は、明治七年一月に愛国公党を設立し、左院に民選議院設立建白書を提出する。が、結局それは受け入れられず、板垣は帰郷して同年四月土佐に片岡健吉、林有造らとともに民権結社立志社を設立する。その立志社が所謂立志社の獄の後、明治一〇年から翌年にかけて機関誌『海南新誌』『土陽雜誌』『土陽新聞』<sup>\*1</sup>を続けて発行している。その『土陽新聞』（明治一二年発行分）に雲井龍雄（一八四四—七〇）の小伝及び漢詩が都合五回掲載されている。言うまでもなく、これは民権思想啓蒙の一端としての記事に外ならない。自由民権運動は、理念的部分はともかくとして、表層的には薩長の藩閥専制批判という形を取る。したがって雲井の展開する薩摩批判の詩句は、格好の宣伝資料であったに相違ない。本章は志士であり、漢詩人であった雲井龍雄が、その死後に展開されていく自由民権運動の中で精神的支柱としてどのように型作られていくのか、その一端を捉えようとするものである。

雲井龍雄は幕末明治期において諸藩の志士と交流する中で薩長両藩の専制政治に慷慨し、約二〇〇首の漢詩を残した人物であり、新政府内では土佐藩の後藤象二郎、長州藩の広沢真臣らと交流があった。そして明治三年、芝二本榎の上行寺及び円真寺に帰順部曲点検所を設置して、薩長専制の新政府に不平を抱く士族を糾合していた所を政府から転覆を謀るものとして糾弾され、同年末に死刑を宣せられ梟首となった人物である。

明治一〇年の西南戦争以降本格化していく自由民権運動の中で雲井龍雄の名を目にすることは少なくない。たとえば色川大吉氏の北村透谷に関する諸研究<sup>\*2</sup>が多くそれに言及している外、かなり脚色され事実無根に近い内容で

はあるが『雲井龍雄実伝 徳川回復嚆龍浪』<sup>※3</sup>という談義本が明治一六年に出版され、大衆に雲井の名が知られていったという事実もある。そういう明治一〇年代の経緯の中で、明治一〇年のこの『土陽新聞』の雲井に関する記事はその初期資料として位置づけられる。そして、この流れの結果の一つとして明治二二年の雲井大赦があると考えることもできる。加えて、最も古い刊本の雲井詩集は明治一三年発行の浅塾晃齋編『雲井龍雄詩文集』であるから、それに先行するものであり、その点に於ける資料的価値もあろう。

本章では『土陽新聞』に掲載されている雲井の小伝及び漢詩を紹介し、その上で自由民権運動下の雲井の位置づけについて管見を述べてみることにしたい。

## 一 掲載記事の紹介と検討

『土陽新聞』に掲載されている雲井龍雄関係の記事は次の通りである。

### I 第二三号（明治一一年二月五日）

○雲井龍雄小伝

○送釈俊師之京師

○退集議院

編輯 安岡道太郎

### II 第二五号（明治一一年二月一五日）

○雨中看海棠有感

編輯 渡辺医

### III 第二七号（明治一一年二月二五日）

○就縛被護送于東京途中之作

編輯 渡辺医

IV 第二八号 (明治一一年三月五日)

○禁錮中送人行東京

○失題

編輯 渡辺医

V 第三五号 (明治一一年四月一五日)

○失題

編輯 美濃部周平

編集者が傍点を施している部分もあわせて、以下記事の全文を挙げる。<sup>\*4</sup>

I 第二三号

○雲井龍雄小傳

雲井龍雄、羽州米澤の人。容貌溫柔にして婦人の如し。資性豪邁にして不羈、而れども嘗て安井息軒の門に遊び、塾長と爲る。人呼びて今張良と曰ふ。夙に英才を懐き、又騷思饒なり。而して詩は最も古體に長ず。皆雄偉悲壯なり。今其の詩を讀めば以て其の人を想見するに足る。戊辰の亂に、兵を將ひきゐて王師に抗ふ。後聘に應じて東都に來り官に列するも、幾もなくして其の職を辭す。當時は王政創業の際にして、政務繁劇、百度未だ備はらず。然るに大臣等、遊蕩淫逸し、晨には北里の花を吟じ、夕には二橋の月を嘯きて、以て政を顧みざる者あるに至る。是に於てか、慨然として濟世の志を懐き、竊かに黨與を結び、以て姦を斬らんと謀る。事覺はれ遂に小塚原に梟せらると云ふ。(筆者改行)

余久しく東都に遊ぶ。友人某會て余の爲に之を解すること詳らかなり。蓋し友人某は雲井氏の知人ならん。當時は其の事は非、余之を知るあたはずと雖も、常に爲に其の人を景慕す。一日其の墓を小塚原に弔ふ。時は方に秋、墓は寒烟枯艸の中に在り。百蟲悲鳴し、滴露凝涙して、幽魂を弔ふの状に似たり。余、彷徨すること之を久くして、感慨禁するあたはず。熟つらつら古今を回視するに、慷慨義烈の士、生命を白刃に委ぬること多し。諂諛姦猾の輩は、皆威福を當世に擅はじにす。若し氏をして時事に感激する所なく、或は卿相の高位に列せしめば、安逸して以て其の天年を終へしならん。未だ知るべからざるなり。然れども事茲ことに出でず。啻ただに美祿を受くるあたはざるのみに非ず、貴重を生命を以て、此の尺餘の小墓に換ふ。悲しいかな。然りと雖も、死生を外にして以て功名を博むるは、大丈夫の常なり。其の成るに及びてや、王公の尊と爲り、相將の貴と爲る。其の敗るに及びてや、首を青艸白沙に曝し、誣するに賊名を以てす。是に由りて之を觀れば、彼の順と逆とは成敗を以て之を論するに過ぎざるが如し。嗚呼、大丈夫名を成すに何ぞ必ずしも順逆を論ぜんや。聊か感ずるを書して以て小傳を作る。(原漢文)

この小伝を読めば、以下に掲載される彼の漢詩が思想啓蒙の一翼を担うものとして評価されていることがわかる。「友人某」が誰であるかは不明だが、「其の事は非、余之を知るあたはず」としながらも、当時まだ国事犯である雲井の行動を「濟世の志」を抱いて「政を顧みざる」「姦」或は「諂諛姦猾の輩」を斬らんとしたものであるとし、その「順逆」は論ずべきではないと結論づけている。そしてむしろ雲井の「大丈夫」、「慷慨義烈の士」としての精神性を色濃く出し、高く評価している。したがって、当然のごとく以下に掲載される雲井の詩も、この路線に沿ったものが選定されていることになる。

○送釋俊師之京師 釋俊師の京師に之くを送る  
生當雄圖蓋四海 生きては當に雄圖四海を蓋ふべく

死當芳聲傳千祀。死しては當に芳聲千祀に傳ふべし  
非有功名遠超群。功名遠く群を超ゆることあるに非ずんば  
豈足喚爲眞男兒。豈に喚びて眞の男兒と爲すに足らず  
俊師膽大而氣豪。俊師 膽は大にして氣は豪  
憤世夙入祇林逃。世を憤りて夙に祇林に入りて逃ぐ  
雖有津梁無所布。津梁ありと雖も布く所なし  
難奈天下之滔々。奈いかんともし難し天下の滔々たるを  
惜君奇才抑塞不得逞。惜しむ君が奇才の抑塞して逞たくましくするを得ず  
枉方其袍圓其頂。枉げて其の袍を方とし其の頂を圓くする  
何事衣鉢纔潔身。何事ぞ 衣鉢 纔か身を潔くし  
不爲鹽梅調大鼎。鹽梅 大鼎を調ふるを爲さざるは  
天下之溺援可收。天下の溺れたるは援けて収むべし  
人生豈無得志秋。人生豈に志を得るの秋ときなからんや  
或到虎吞狼食王土割裂。或は虎吞狼食、王土割裂するに到らば  
八州之艸任君馬蹄之蹂躪。八州の艸 君が馬蹄の蹂躪に任せん  
君今去向東海道。君 今 去りて向かふ東海道  
到處山河感多少。到處の處の山河 感 多少  
古城殘壘趙蚊韓。古城殘壘は趙か韓か  
勝敗有跡尚可討。勝敗跡あり 尚ほ討ぬべし  
駿之山兮參之水。駿の山 參の水  
英雄起處地形好。英雄の起こる處は地形好し



知君到此氣慨然、知る君此に到りて氣は慨然  
應悟大丈夫空不可老、應に悟るべし大丈夫は空しく老ゆべからざるを

明治三年二月中旬の作である。同じ時期に長州に於て戊辰戦争の論功行賞への不満に端を発する脱隊騒動が起こっている。そして、その暴動は九州へも飛火し、一時騒然となった時期である（『土陽新聞』二六号には、この脱隊騒動に参加し、翌年には日田で農民一揆を指導した大楽源太郎の「獄中読頼三樹之詩有感」という詩が掲載されている）。雲井は斗南藩士原直鉄らとともに芝一本榎において決起の謀り事を練っていた。その折、盟友、釋大俊も雲井に賛同し、地元尾張での決起を主導すべく出発する。その際、雲井が大俊師に贈ったものである。冒頭に点を施して、真の男子は雄莊な計画を抱いて、その功名を千歳に伝えねばならないとする気概を強調し、末尾、点部の「大丈夫は空しく老ゆべからず」がそれを受けている。また中ほどの、点部「天下の潮れたるは援けて収むべし、人生豈に志を得るの秋なからんや」の二句は、民権運動のスローガンとしても通用するものであり、最初に掲載する詩としての価値はこの上もないものであろう。

○退集議院 集議院を退く

天門之窄窄於甕、天門の窄きは甕よりも窄し

不容射鉤一管仲、容れず射鉤の一管仲

增嶝無恙舊驎騏、増嶝恙なし舊驎騏

生還江湖真一夢、生きて江湖に還る真に一夢

自咲豪氣猶未摧、自ら咲ふ豪氣猶ほ未だ摧けず

每經一難一倍來、一難を経る毎に一倍し來る

眸視蜻蜓洲首尾、眸視す蜻蜓洲の首尾

欲向何處試吾才 何れの處に向つて吾が才を試さんと欲する

講學平生護此志 講學 平生 此の志を護る

道窮命乖何足意 道窮まり命乖くも何ぞ意とするに足らん

只須痛飲強自寬 只だ須らく痛飲して強ひて自ら寛すべし

埋首之山到處翠 首を埋むるの山は 到る處翠なり

雲井龍雄は明治二年九月に集議院寄宿生となつたが、翌一〇月には退朝させられる（東京米沢藩邸が記していた『東京御帳』によると正式には翌三年一月二八日に退朝となる）。「退集議院」はその当時に詠まれたものであり、所謂公議であるはずの議院に於てかつて戊辰戦争に参加した者として退朝を迫る新政府の看板と実情の矛盾に憤つたものである。

冒頭。点部は『史記』齊太公世家を典故とする部分であり、齊の桓公は自らに矢を射た管仲を宰相として登用したというものである。雲井はその故事を引いて、自分を追い出した集議院の懐の狭さへの憤りを表現している。ここに集議院を離れて野に降つた雲井と、明治六年政変に於て征韓論に破れ、下野した板垣・後藤とが同質のものとなり、現政府の実情を知らせる資料として格好の材料となる。そして、点部の「豪氣未だ摧けず、一難を経る毎に一倍し来る」の語が、民権運動家らの気概を示すものとしてそのまま転用し得るものとなっている。

## II 第二五号

○雨中看海棠有感 雨中 海棠を看て感あり

綠濕紅沈悄無力 綠は濕ひ紅は沈みて悄として力なし

恰是楊妃啼後色 恰も是れ楊妃啼後の色

花容如愁何所愁 花容 愁うるが如きは何の愁うる所ぞ

我向花問花、黙々、  
想昔濱殿々南莊、  
我花に向ひて問ふも花黙々

把酒賦詩賞海棠、  
酒を把り詩を賦して海棠を賞す

當時同盟今四散、  
當時の同盟今四散

或爲魯連或張良、  
或は魯連と爲り或は張良

不以水火挫其志、  
水火を以て其の志を挫かず

往々激昂就死地、  
往々激昂して死地に就く

死者函首送賊庭、  
死者は首を函にして賊庭に送られ

生者海島尚唱義、  
生者は海島に尚ほ義を唱ふ

嗟我赤城僅脱身、  
嗟我赤城僅かに身を脱し

再舉無策久逡巡、  
再舉策なく久しく逡巡す

今對此花想往事、  
今此の花に對して往事を想へば

愁淚和雨紅沾巾、  
愁淚雨に和して紅巾を沾す

◇秋津天樂云ふ、悲壯灑洒にして、筆底に血淚を含む、と。(原漢文)

明治一一年春の作とされている。八句目に張良の名が見えるが、『史記』留侯世家が示す通り、張良は秦の始皇帝の狙撃に失敗し、一時下邳に潜伏し、力をためて再起を期していたことがある。雲井は張良を退く勇氣を持った智將、潜伏者などのイメージで捉え、しばしば詩中にその名を登場させる。この「雨中看海棠有感」も、前年の戊辰戦争における敗北からしばらくたち、雲井自身が再起を期しつつも、しばらくは潜伏しようとしていた頃の作である。したがって、秋津天樂の言う「筆底に血淚を含む」は、戊辰戦争で死んでいった仲間たちへの、また「策なく久しく逡巡する」自らへの血淚である。これも下野を強いられた板垣らのイメージをオーバードラップさせている。

Ⅲ 第二七号

○就縛被護送于東京途中之作 縛に就きて東京へ護送せらるる途中の作

欲廻狂瀾濟一世 狂瀾を廻して一世を濟はんと欲し

道之窮通未肯計 道の窮通未だ肯て計らず

直氣吐來震九重 直氣吐き來りて九重を震はし

滿眼神肢是芥蒂 滿眼の神肢是れ芥蒂

天日不照孤臣心 天日照さず孤臣の心

枉被浮雲遮且蔽 枉げて浮雲に遮り且つ蔽はる

欲死則死生則生 死せんと欲せば則ち死し 生きんとすれば則ち生く

我肘豈容易使人掣 我が肘は豈に容易に人をして掣せしめんや

檻車夕過東寧川 檻車夕に東寧の川を過ぐ

目擊湖山淚沾袂 湖山を目撃して 涙 袂を沾す

回思遭逢夢耶眞 回思すれば 遭逢 夢か眞か

壯圖唯有水東逝 壯圖 唯だ水の東に逝くあり

嗚呼縱令此山如礪此河如帶 嗚呼 縱令 此の山は礪の如く 此河は帶の如くとも

區々之志安能替 區々の志 安くんぞ能く替れんや

◇凌雲曰く、豪強不屈の氣、字々に溢る。千歳の下、怯夫をして起たしめん、と。(原漢文)

◇暮洲曰く、大丈夫の志を持つことの固きこと、當に此の如くなるべし、と。(原漢文)

明治三年八月、雲井は太政官の命によって、幽閉中の米沢から東京へ檻送される。同年初めに帰曲部局点検所を芝二本榎の上行・円真の両寺に設け、不平士族を集合させたことに對のする政府の弾圧である。末尾部の凌雲・暮

洲のコメントに「豪強不屈の氣」「怯夫をして起たしめん」「大丈夫の志を持す」などあり、第二三号に記されていた小伝と同質の評価がなされている。ただし小伝と異なり、雲井詩に対する直接のコメントにおいて、とりわけ彼が米沢から東京へ檻送される時の作に対して、かくの如きコメントを付しているということは、当時としてはこれも大胆なものであったに相違ない。

#### IV 第二八号

○禁錮中送人行東京 禁錮中 人の東京に行くを送る

不、忍、池、水、繞、東、台、 不、忍、の、池、水、は、東、台、を、繞、り

腥、風、帶、雨、撥、寒、灰、 腥、風、雨、を、帶、び、て、寒、灰、を、撥、す

豺、狼、横、道、老、龍、逸、 豺、狼、道、に、黄、た、は、り、老、龍、逸、し

吉、祥、之、閣、安、在、哉、 吉、祥、の、閣、安、く、に、か、在、る

君、不、見、元、和、定、鼎、肇、基、址、 君、見、ず、や、元、和、定、鼎、基、址、を、肇、む、る、を

神、武、西、震、覺、羅、氏、 神、武、西、に、震、ふ、覺、羅、氏、

舜、雨、堯、風、六、十、州、 舜、雨、堯、風、六、十、州、

朱、門、金、殿、八、千、市、 朱、門、金、殿、八、千、市、

滄、海、爲、田、天、命、移、 滄、海、は、田、と、爲、り、天、命、は、移、り

難、奈、文、活、又、武、熙、 難、いかん、奈、と、も、し、難、し、文、活、又、た、武、熙、

前、門、防、虎、後、門、狼、 則、門、に、虎、を、防、げ、ば、後、門、は、狼、

大、廈、一、傾、無、人、支、 大、廈、一、た、び、傾、き、て、人、の、支、ふ、る、な、し

噫、嘻、獲、鹿、喪、鹿、機、一、髮、 噫、嘻、獲、鹿、と、喪、鹿、は、機、一、髮、

懷、古、慨、今、竦、毛、骨、 古、を、懷、ひ、今、を、慨、し、て、毛、骨、を、竦、つ

君今欄鞭遊其墟 君今鞭を攔りて其の墟に遊ぶ

百感知聚君一瞥 百感知る 君の一瞥に聚るを

如今何物猶依舊 如今 何物ぞ 猶ほ舊に依る

墨陀之花高輪月 墨陀の花 高輪の月

明治三年の六〇八月の作とされる。当時米沢に謹慎中であった雲井を友人の村山友之輔が訪れる。彼もまた時事を慷慨する志士の一人で、上京して雲井に東京の動向を報告する事を約束したという。その彼が東京に旅立つに際して詠んだものである。

元和元年（一六一五）に大坂夏の陣で豊臣氏を滅ぼして長期政権の礎を築き、堯舜にも比する善政を施き、西南諸藩をも圧倒した徳川幕府の都であった江戸も、今では名を東京と変えて新政府の中核となった。その東京を「腥風（なまぐさい風）」の吹きすさぶ、「豺狼」「老龍」たる薩長が跋扈する「（廢）墟」と表現しているのは痛烈である。

○失題 失題

遺臭流芳任我意 遺臭 流芳 我が意に任ず

拙誠巧作有天知 拙誠 巧作 天の知るあり

淋漓灑盡滿腔血 淋漓 灑ぎ盡す 滿腔の血

字々全含憤興悲 字々全て含む 憤と悲と

明治三年の一〇三月の作とされる。雲井は帰順部曲点検所設立のための資金繰りに東奔西走していた。第二句の「拙誠巧作」は『韓非子』説林上の「巧作不如拙誠（巧みな偽りを並べるよりは、つたなくとも真心で人に接した

方がよい」を典故としたもので、雲井の人柄の一端をここに読み取ることができ。

V 第三五号

○失題 失題

少小讀破萬卷書、少小讀み破る 萬卷の書

欲討聖原溯洙泗、聖源を討ねて洙泗に溯らんと欲す

道與世背無用處、道は世と背きて用うる處なし

放蕩却是一俠徒、放蕩 却つて是れ一俠徒

破産傾身多結客、破産傾身して多く客と結び

奮爲六王獻奇策、奮つて六王の爲に奇策を獻す

山東豪傑半属望、山東の豪傑 半ば望を属す

共謂秦兵擊可却、共に謂ふ 秦兵撃つて却くべしと

縱散約解壯圖違、縱散じ約解けて 壯圖違ふ

天高地厚亦局脊、天高く地厚く 亦た局脊

一朝自海心恍然、一朝自ら悔いて 心恍然

深愧平生氣宇穿、深く愧づ 平生 氣宇の穿

君不見有窮女字嫦娥、君見ずや 有窮の女 字は嫦娥

一飛奔月月爲家、一飛月に奔りて 月を家と爲すを

我亦將遠探其窟、我も亦た將に遠く其の窟を探り

手擁天桂折其花、手に天桂を擁して其の花を折らんとす

亦不見猴山仙子其名晉、亦た見ずや 猴山の仙子 其の名は晉

駕鶴漂渺斬雲陳 鶴に駕して漂渺雲陳を斬るを

我亦遠將極八宏 我も亦た遠く將に八宏を極め

横絶弱水進我軻 弱水を横絶して我が軻を進めんとす

聞説八小洲外更有五大洲 聞く八小洲の外に更に五大洲ありと

長風好放破浪舟 長風好し放たん破浪舟

烏拉之山太平洋 烏拉の山太平洋の海

去矣一周全地球 去け一周せん全地球

一世俊髦盡把臂 一世の俊髦盡く臂を把り

萬國奇勝盡属眸 萬國の奇勝盡く眸に属す

然後稅駕故山瀟洒伴松菊 然る後故山に稅駕して瀟洒松菊に伴はば

一世能事庶幾將始休 一世の能事將に始めて休まんとするに庶幾ちかからん

◇秋津曰く、豪氣宇内を呑む、と。(原漢文)

◇暮雲曰く、眞の詞家の言ふあたはざる所の者あるなり、と。(原漢文)

明治三年春の作である。雲井が上京した際、彼を慕う旧友が次々に潜伏先から彼の下へ消息を寄せてきたという。その同盟の士らと鷺湖の料亭で会した際のものである。

この詩は、これまでに掲載された六首とはやや質を異にする。雲井の詩は慷慨の意気を伝えるものと隱逸志向を伝えるものと大きく二分されるが、この詩は後者である。ここに描かれているのは薩長との戦いに疲れ、嫦娥や仙子晉の脱俗に憧れる雲井自身の姿である。先の連載が比較的集中しているのに対し、この詩の掲載だけが一つ離れていることから、廃刊を前にした編集者の選択であろうか。或は秋津の論評から、後半。点部の雲井の世界への視角を伝えようとするものとも解釈できる。



## 二 雲井受容のメカニズム

当時雲井は国事犯であったから、新聞紙上でその行状を賞賛し、詩を掲載する事は非常に危険な事であった。しかも明治六年の新聞紙条目、八年の新聞紙条例・讒謗律と日増しに政府の言論弾圧は厳しくなっている。本節ではそのような状況の下で雲井の小伝と詩七首を掲載した三紙の思想を探ってみたい。

### (1) 新聞の位置づけ

まず立志社は新聞というメディアの性質をどう位置づけていたのか。各紙の創刊号に見える記事からそれを考えてみたい。

夫れ新聞紙は国家の神系也。……今日我邦の新聞紙は、大に国家の政事を論議して以て之を左右し之を進退せしむるが如きこと能はざる也。侃々讜々政府の压制抑搾を止めて民権を張り自由を求むるが如きこと能はざる也。公然直意政府の景状を記載し雷霆の威を懼れずして以て其邪曲を正し、姦猾の官吏をして肝胆を寒からしむるが如きこと能はざる也。……故に我党は今敢て自ら奮進し高知県土佐に於て月次若干回の雑誌を發行し、名けて海南新誌と云ひ、以て主ら国家の政体政法を論じ、人民の権利自由を論じ、其他若くは汎く真理を論じ、若くは特に其時勢を論じ、聊国家に尽す所あらんと欲す。(『海南新誌』一「緒言」植木\*)

ここで新聞を「国家の神系」とし、その役目は「政事を論議して以て之を左右し、之を進退せしめ」、「政府の压制抑搾を止めて民権を張り自由を求め」、「以て其邪曲を正し姦猾の官吏をして肝胆を寒からしむる」事にあるとしている。すなわち立志社は政府を監視し糾弾し是正するという役割をその機関誌に与えていたのである。また次の「新聞分析論」は当時發行されていた新聞を五種に分類し、それぞれに批判を加えているもので、その中で唯一評

価されている第三種を見てみる。

第三種。慷慨悲憤にして熱情極点に達し、怒るべからざるに腕を扼し、罵るべからざるに口を極めて、恰も自家の憂鬱を發散する者の如しと雖も、大概此の種に属する者は、愛国の赤情・自由の熱心に依て、頭腦の癡狂を發したる者なれば、其謂ふ所切実なるを以て、縦令ひ数多の誤謬あるも其害甚だ多からざるが如し。〔土陽雜誌〕一「新聞分析論」細川)

また『土陽新聞』の「日本新聞紙論」では、

夫の専制政治の国と公議政体の国とは、基本既に異なるが故に、国内の事物皆随て相異なる所なきを得ざる也。……邦内の論者動もすれば則日本の新聞紙を以て之を過激なりと爲し、空論多しと称し、英米諸国の新聞紙を引て、其著実なるを証し、以て我人民を凶暴輕浮なりとなし、以て民権自由を排斥し、窃かに専制を主張し、抑圧を助成し、而して世人の耳目を誤らしめんと欲する者あり。……夫れ国家（日本）の政体既に専制に在れば、其国の新聞紙は復た彼の公議政体の諸国と相比するを得んや。たとへば英米諸国の如きは実に公議の政体にして、人民参政の権利を有し、議院に由て以て十分に其国政上の諸事を評説論議するを得れば、国政上の事は己に茲にて大概其情意を悉くすの理にして、今唯議論を行ふの上に就きて之を考ふるも、己に斯の如く国政上の諸事を發論するの場所あれば、新聞紙に論ずる所は唯其尽さざる所の余点を言ふ……今我國の如く専制の政体を以てする者は、人民参政の権利を得ずして思想を吐露するの議院なければ、其議論は皆新聞紙に憑て之を發洩せざるを得ざれば、要するに我の如きは思想を流出するの線路唯一あるのみなれば、其勢も亦強激に帰せざるを得ざるの理也。……遇々過激暴横の論説あるが如きは、是れ必其論者の罪に非ず。国勢の然しむる所のみ。……愈々進んで改進黨の先驅たらんと欲する也。〔土陽新聞〕一八「日本新聞紙論」植木)

と云つて、専制政府下の新聞の在り方について論じている。主旨としては、公議政体と専制政府とでは、新聞の役割も異なるとした上で、人民が国政に参与する公議政体の国家では議論が議会という場で行われ、故に人民の声が国政に反映される。しかし専制政府下の新聞は人民の声が国政に反映される余地がないため、新聞がその役割を担わねばならないというものである。

このように、三紙ともに政府を監視し、人民の権利自由に対する熱情を示し、かつ議論の場としての新聞という位置づけが明確になされている。

## (2) 専制政府批判

では彼らにとつて専制政府すなわち明治政府とは如何なる存在だったのか。次に三紙に見える専制政府批判の文章をいくつか見てみたい。まず植木枝盛の記事である。

政治の目的は公益即ち国民の利益を謀るに在ることを明かにせり。爾來碩学大儒皆謂く、万民の安寧利益を謀ることは真に政治の目的也と。蓋し政府は人民の爲めの政府にして、官吏は人民の雇する所のみ。故に政府は国家を管理し、人民を保護するに在り。(『海南新誌』四「政論第一」植木)

ここで植木は、政治の目的は「公益即ち国民の利益を謀る」事であり、「政府は人民の爲」「官吏は人民の雇する所」が政府・官吏の本来あるべき姿であるとする。そしてこの思想に基づき次の記事で鮮明に明治維新、明治政府について語る。

夫れ我日本遠古は姑く闇き、近時に於て大變換を成したることあり。即ち慶応戊辰、徳川政府を踏して王室を興し、皇帝陛下全国の政を統理するに至り、又相尋で封建を變じ以て郡県となしたるが如きは也。此れ即ち我

国近時の一大変換にして、明治第一の変革と称す可き也。……然りと雖も、之を政体の変革と云ふは何事ぞ。政体の変革の如きは、日本国に於て未だ之を見ざるなり。而して戊辰の如きは政府の変革にして、即ち治者と治者との関係のみ、被治者に於て將た何の關係あらん。……又徳川政府は廢せられたれども、之に換はる者は亦独裁の政府にして、其政体は即ち皆専制政体なり。又諸州の大名は廢せられたれども、之に代はる者は独裁政府の派出する官吏なり。豈に敢て人民に大變革あらんや。故に曰く、戊辰の如きは政府の変換にして、政体の変換に非ずと。……更に又第一の改革を為し、其政体を革めて君民共治と為し政府の独裁を廢して人民をして政權を掌らしむ可き也。（『海南新誌』五「明治第二の改革を希望するの論」植木）

ここでは明治維新（第一改革）を単なる専制政府の政權交代と捉え、更に第二の維新すなわち公議政体国家の樹立を説いている。また次に示すのは責任編集者の渡辺医が新聞紙条例第四条に触れ、禁獄二ヶ月・罰金五十円という処罰を受けた記事である。

夫れ専制政治を以て国家を治めんとするの政府は、其危きや火山の頂に坐するが如きなり。……専制と擾乱とは常に密着して相離れざるものなり。……夫れ兵威腕力を以て人民を制御する者は、一時能く其形を圧すべきも、竟に永く其心を服する能はざるなり。……維新以来、騒乱一揆は断へずして相興り、幾んど毎年に於て起らざるは莫きなり。是れも亦密かに考ふるに、所謂火山の頂に立つが如きに非ずと謂ふを得んや。（『土陽新聞』二九「専制政府は火山の頂に坐するが如きの論」）

このように人民の権利自由の獲得や立憲政体の確立を目指す立志社にとって、明治専制政府は批判の対象以外の何物でもなく、その論峰は新聞紙条例や讒謗律に少しも衰える事なく、過激さを増している。たとえば新聞紙条例<sup>※</sup>第一三条では「政府を変壞し国家を転覆するの論を載せ、騒乱を扇起せんとする者」を、また第一四条では「成

法を誹毀して民法法に遵ふの義を乱り、及頭はに刑律に触れたるの罪犯を曲庇するの論を為す者」を、禁獄・罰金の刑に処すとあるのだが、これら二紙はものともしていない。

### (3) 不平士族への意識

では次に立志社は江頭・前原・西郷らの挙兵をどのように見ていたのであろうか。明治三年の雲井挙兵陰謀事件は初期における不平士族の乱<sup>\*7</sup>として認識されており、当然西郷らの挙兵はその延長上のもものとして解釈されていた。まず九月一日発行の『海南新誌』に掲載の「西郷論」を見てみる。

西郷は畢竟武健猛威にして強者に抗するを好むが如きの人物也。……遂に自ら戊辰以前の時勢に当るの勇力を以て明治今日の時勢に抗したるは、其勇力の活用を得ずして、遂に天下の公論と背馳するに到る而已。可悲哉。  
〔『海南新誌』二「西郷論」〕

この記事では、さすがに終始西郷の挙兵に対し批判的な態度を保つのだが、右の文に明らかなように、それは西郷が「勇力の活用を得ず」に武力という形で問題を解決しようとした事への批判であり、西郷の主張までも否定するものではない。西郷を「武健猛威」の人、「武勇の人」と位置づけて古い時代の生き残りであるとし、武力解決は前時代的行為であると処理するのみである。しかも立志社自体、西郷挙兵の際に内部でこれに呼応し挙兵しようとする動きがあり、その動きを政府が察知して、林有造・片岡健吉・陸奥宗光らを逮捕するという所謂立志社の獄が起った。したがって現実には立志社は西郷容認の立場を取り、その理論的裏付けもあった。

たとえば、

夫れ化工の人類を造る、曾て口舌と腕力を付与す。豈に偶然ならんや。蓋し口舌以て平時を理め、腕力以て暴

乱を制し、両者相須つて用を為すなり。若し一を欠かば廢人なり。……言論と腕力の功用を比較するに、言論の功用は緩漫にして小、腕力の功用は敏捷にして大なり。〔海南新誌〕四「腕力論」武島力男）

と云つて武力（腕力）の効用を「敏捷にして大」と言い、寧ろ拳兵もやむを得ない場合があるとすればかりでなく、拳兵せねば為し得ない事もあり、倒幕は武力なしにはありえなかつたという武力肯定論が展開されている。次の記事も同様である。

語に曰く、文武は車の両輪の如しと。夫れ文は智徳を修め以て天与の福祉を保全し、武は以て強暴を制し以て人世の禍災を防遏するに在れば、ふたつが両ら闕く可らざるなり。……斯の如き危殆の厄運に際し自由を保存せんと欲せば、豈に（文）能く其功を奏せんや。必ずや之に当るに武力を以てせざる可らず。〔土陽新聞〕二七「文武両立せざれば自由を保存する能はざるの論」真田亘）

そして次の記事では西南戦争に対する論評が西郷批判ではなく政体批判という形で展開されている。

彼の内乱の平定は決して深く祝するに足らず、慶賀するに足らず、喜脱するに足らず。何となれば則、今の平定は敵軍のみの平定にして国家の平定に非ず、今の勝利は政府のみの勝利にして国の勝利に非ず。国は則ち益々疲弊して、人民の不幸も亦更に是より大なる可ければ也。……西郷、政事に不同意あるも、議院に於て之を論ずるの道あれば、則更に腕力に翹ゆるに由なく、不平ありと雖も十分に其清意を通じて事明白に帰し、是非曲直も決着する所あるべければ、不平は不平を医して可なる可く、遂に不平にして終らしむるの道理なかる可く、……。〔海南新誌〕八「内乱鎮定の演説」植本）

所以ゆゑに言く、内乱の興らざる道も亦民撰議院を立つるに在る也。(『海南新誌』九「内乱鎮定の演説の続植木」  
加えて、

……治も必ず盛を致す能はず、乱も必ず衰を来し得ざるの理あるなり。何となれば則ち、治乱に文明と蛮野の殊別あつて、其国家の昌盛興立を致す者は乃ち文明の治乱なりと雖も、蛮野の治乱に至ては全く之と背反し、能く国家をして衰弱滅亡せしむるに至ることあればなり。(『土陽雜誌』一二「治乱論」坂本)

と言つて、内乱そのものの可否には全く言及せず、公議(文明)か専制(蛮野)かという政体の在り方に因つて、内乱の評価も変わるとし、文明へと至るための内乱を評価する。ここに立志社の西郷批判は完全に消滅している。

#### (4) 「御し易き」民と「御し難き」民

次に雲井をはじめとする江藤・西郷らの不平士族が三紙に於て容認される論理的中核は何処にあつたかを考えてみたい。まず次の二つの記事を検討してみる。

夫れ人、自主なき者は善く自ら愛せず。故に亦人に苟もせらる。故に御し易し。而して自主の民は善く自ら愛す。故に亦人に苟もせられず。故に御し難し。是を以て人民の御し難きは、則是其自主あるの証にして、推して之を考ふれば亦国家の善く独立性あるを徴す可く、而して人民の御し易きは、是其自主なきの理にして、更に之を推論すれば、則亦国家に独立の真性なきを知る可し。(『海南新誌』一一「人民の御し難きは国家の幸福なるを論ず」秋山清造)

夫れ人民の馭し難きは国家の幸福なり。国家たる者は徒に人民の馭し易きを欲す可からず。否な其自主を妨害する無きを要するなり。何となれば国は人民相合して結成する所以にして、之が元素たるは各人民に非ざるはなく、人民強ければ国亦強に、人民弱なれば国亦弱、人民富なれば国亦富、人民貧なれば国亦貧なるが如く、国家の盛衰隆替は皆人民の形勢若何に由る。（『海南新誌』一五「政論第四」植木）

ここで人民を「御し易き」民と「御し難き」民とに分類し、往々にして専制国家の人民は権利や自由を志向しない政府の操り人形であるとし、かくの如き専制国家は他国からみればそれは「御し易き」国家であり、やがて独立を保ち得なくなるとする。それに対し「御し難き」民とは、アメリカ独立やフランス革命を果たしたように、常に国家のあるべき姿を自ら模索し、そして自由や権利を獲得していける民であるとする。このような人民を有する国家は確かに政府から見れば「御し難い」かもしれないが、それは他国から見れば「御し難い」堅強なる国家であつて、国家の独立は存続し得るといふ論法である。そして日本は長期の封建制によつて人民が卑屈になり、人民がその力を結束して何かを為そうという志氣に欠けるとし、ここに人民を束ねる力・統率力を有する人材としての西郷らの再評価という形をとる。それが『海南新誌』最終号の「結合論」によつて明らかにされる。

想ふに我国近來薩摩の西郷の如き、萩の前原の如き、佐賀の江藤の如き、其事業の善悪邪正は姑く閣きて、皆其起て事を為すものは必其人民の結合を以てせざるものなし。然りと雖も彼等の如きは其結合未だ広きに及ばずして、薩摩の西郷は薩摩及其他二三州のみの結合を為すに止まり、江藤前原の如きも各其一州中に関して善く全国の結合を為すものは未だ之れあらざるなり。……只其れ今日に当り全国人民の結合して民権を拡張せんことを欲するのみ。（『海南新誌』一七「結合論」）

ここでは西郷・前原・江藤らの人民を結合する力量を評価しながらも、その力の及ぶ範囲が極めて狭い事を借し



んでいる。そしてこの思想は次に示す英雄豪傑待望論へと移行する。

世運の此の如く退却し、社会の将さに瓦解せんとするに際しては、又た自ら一種の之を支柱する者あって、能く世運を未だ全く墮落せざるに挽回し、社会を将さに瓦解せんとするに維持するもの、亦史乘の常に記載する処なり。而して其之を挽回し又た之を維持する者とは何ぞや。曰く、世の英雄豪傑即ち是れなり。……抑も此の如き英傑の士の一度び社会に現出し、其状体を看察するや、恰も非常の痛苦を感じ、社会の此の如き悲看を顕はすは決して有るべからざるの事と固信し、悲置扼腕して、俗夢を攪破し、粉骨身糞して、世運を匡救せんとするの勢力は殆ど人生の得て成すべからざるが如きあり。（『土陽雜誌』一〇「世運の上進を論ず」坂本）

ここでは墮落せんとする世運を挽回し、瓦解せんとする社会を通常のままに維持し得る英雄豪傑について述べている。しかしこの英傑に近いと考えられる雲井を始めとする西郷・江藤らは已に反乱を起し世間では国賊の汚名がきせられている。では立志社に於て彼らは本当に国賊だったのであろうか。

#### (5) 国賊と義死に関する論

雲井の關係記事連載は『土陽新聞』の二五号から始まるが、その前の二二号あたりから雲井を容認するために書かれたような記事が掲載されはじめた。

何をか国賊と云ふ乎。曰く、天理を妝滅して自絶して根づかず、以て天の民を賊殺する者、之を賊と云ふ焉。曰く、他人の物を攘奪する者、之を戎と云ふ焉。曰く、民人を傷害する者、之を賊と謂ふ焉。孟子所謂、賊仁者謂之賊者、是也。故に国賊は国家の盜賊にして、国家民人を攘奪し、之を劫殺し、之を傷害する者の謂而已。其然り。国賊は豈に直に君主に敵し、政府に抗する者を指す可しと為ん哉。……夫国賊は則国賊耳。君主

に敵し政府に抗するも、国家人民を劫殺し、之を攘奪し、之を傷害せざる者は、国賊に非ざる也。……西国の史家、国事犯を称して直に之を賊と云はず。（『土陽新聞』二二「何をか国賊と謂ふ乎」坂本）

夫れ邦国の幸福を増し、文明を進むるに於て、義死の功績は又た洪大なる哉。古今来、圧制の政府を類覆し、自由の体を建設したるが如き大革命を成したるも、其初や慷慨激烈の士暴威に屈せず、堅忍不拔の志を懷き、衆に先つて新異の議論を首昌し、以て一世を驚動し、或は冤限を呑んで刑場に臨み、甲仆れて乙起り、之が後人たる者、其雄魂毅魄に感動し、遺志を継ぎ益々激昂し、遂に積怨を砲轟劍閃に泄すに至るに非ずや。是れ其基ひする所は即ち義死なり。義死の功績は隱微にして、見易からずと雖も、其革命を助成するは至大至洪なりと謂ふべし。（『土陽新聞』二三「義死は人生の至福至徳なるを論ず」横川熊次）

まず「何をか国賊と謂ふ乎」では、国事犯を以て国賊とする事の不可を説き、加えて「君主と雖も、政府と雖も、国家人民を賊殺し、之を攘奪し、之を傷害する者は、国賊なり」と言つて、寧ろ国賊と呼ぶべきは政府の方であるとしている。続く「義死は人生の……」では「慷慨激烈の士」のその身を犠牲にした死、つまり義死が革命の助成たること大であるとしている。そして次の記事では雲井に言及し彼の死を義死として認定する。

回憶せば戊辰以来雲井龍雄を首となし、西郷隆盛に至るまで前後七回の動乱を我社会上に演出し、……雲井にせよ江藤にせよ前原にせよ西郷にせよ、其反動を企て、兵馬を動かし干戈を挙げ、断然政府に抗敵せんと欲する所以の心清は、豈に一朝の事ならんや。必ずや其初めに於て政府が施治の方向に付き、中心之を厭ふあつて終に之を改良せんと冀望するの熱情より、貴重なる性命を抛て、其志を遂げんとするに至りしならん。縦令ひ其事業は醜悪なるにもせよ、其措置は拙陋なるにもせよ、国家の爲めに身を捧げて犠牲となすの赤心は誰れか之を貴重せざらん。……誰か能く之を惜しまざらん。（『土陽新聞』二四「論便宜法の悪弊 第一」細川）

小伝及び漢詩以外では唯一の雲井言及箇所である。ここで七つの不平士族の乱を総括して、彼らの行為を醜悪・拙陋であるとしながらも、「国家の為に身を捧げて犠牲となすの赤心は、誰れか之を貴重せざらん」と言い、これを先の英雄待望論、義死論、ひいては最初の新聞の定義などと併せ考えると、まさに立志社は新聞すなわち言論という形での雲井・江藤・西郷らの精神の踏襲をめざし、そして実行していたという事が言えるのではないだろうか。

以上、三種の機関誌を通して立志社の雲井受容の構造を見てきたが、それは理論性がある程度おびながらも、細部には論理的な飛躍や齟齬の見える素朴な感情論的政治論のように思える。それは当時まだ植木や坂本・細川という三紙の主筆たちが若く、これからの人物ばかりであった事と同時に、民権運動そのものが未だはつきりとした理論性をおびるに至らず、士族階層の不平不満の延長に過ぎなかつた事などが考えられる。しかしそのことよって評価の対象から外れるというものではなく、そういう時期のものとして捉えるべきであるし、加えて雲井の詩そのものがそういう時期に於ける主張の材料にふさわしかったという要素をたぶんには持つていたという事にもなるう(薩摩批判の詩句が比較的明瞭な形で展開されているという点に於て)。

そして明治一〇年という民権運動の初期に、三紙は月二回発行という連続性に欠ける性質を逆に利用して見事に政府批判、権利自由の主張、士族反乱の容認を行っていると言える。また読み捨てであるが故に、似通った論説が様々な角度から繰り返し論じられ、結果として精読者にはおのずと多面体の認識が得られ、乱読者には最終目的のスローガン(権利自由の獲得や民撰議院の設立など)のみが頭にくさび打たれる仕組みになっている。これらの点は十分に注目に値するものと思われる。

## おわりに

薩摩を中心とした藩閥専制を嫌悪し、反薩摩の漢詩を詠み続けた雲井にとって、死後一〇年もたたない内にその薩摩の西郷と同列の扱いを受け、そして英雄視されたのは、きわめて皮肉な結末と言わざるを得ない。これはとり

もなおさず雲井の詩が強者にあらがう一者というイメージを強烈に有しているからに他ならない。

色川大吉氏は雲井の詩を評して、

やがて自由民権家たちを奮い起たしめ、権力に抵抗し、従容として志に殉じてゆく明治革命家像の原イメージとなったのである。<sup>\*10</sup>

これまで雲井龍推事件は、明治最初の士族叛乱<sup>12</sup>あるいは封建反動として評価される事が多かった。しかし、それからわずか一〇年後に自由民権家たちがいかに雲井を愛惜したか、彼の志に鼓舞され、歴史を変えるエネルギーとして生かしたかは計りしれない。<sup>\*11</sup>

雲井の凜烈たる精神が、かれら反薩長の青年たちの肺腑をつらぬき、かれらの情心をふるい立たしていたようだ。<sup>\*12</sup>

と述べておられる。

つまり雲井に伴う強者に屈する事なく自らの意志をあくまでも貫き通そうとする勇者・豪傑のイメージと、<sup>\*13</sup>時に退歩して潜伏し力を蓄える智将・潜伏者のイメージ<sup>\*14</sup>に加えて、結果として明治新政府という共通の敵に抗し、その政府によって処刑されたという事実により、彼は民権運動のプロバガンダとしての働きを充分に為し得るものと判断されたのである。ここに民権家の手により詩人から政治家に変容した彼は、明治一〇年代の英雄の一人として蘇生したのである。そしてそれは生前に詩人であるよりも政治家たらんとし、<sup>\*15</sup>また自らの行為が「懦夫（臆病者）を立たしむるに足らん」<sup>\*16</sup>と自負していた雲井には本望であつたらう。

\*1 『海南新誌』は明治一〇年八月から二月にかけて一七回発行された知識人向け「大新聞」であり、『土陽雜誌』は『海南新誌』と平行して同じ期間内に一二回発行された大衆向け「小新聞」である。そして両紙が統合されて『土陽新聞』が翌一一年一月から二〇回にわたり発行される。『土陽新聞』の号数は『海南新誌』をうけて一八号から始まる。これら二種の機関誌の成立その他に関しては家永三郎氏らが整理された『海南新誌・土陽雜誌・土陽新聞』（弘隆社、昭和五八年）の解説及び解題に詳細に論じてある。参照されたい。尚、『土陽新聞』は明治一一年に発行禁止の処分を受けた後再刊されるが、再刊分は今回の考証か一らは除外した。

\*2 北村透谷を始めとする自由民権家と雲井龍雄との関係に関しては色川大吉氏の『明治の文化』（岩波書店、昭和四五年）、『新編明治精神史』（中央公論社、昭和四八年）などに詳しい。

\*3 明治一六年に東京太平洋堂より『雲井龍雄実伝徳川回復嶮龍浪』（秋亭実著、菊亭静校閲）が出版されている。また時事小説については明治文化研究会編『明治文化全集』第二一卷時事月説篇（日本評論社、昭和三四年）に詳しい。参照されたい。但しこの本には前記の雲井龍雄のものは紹介されていない。

\*4 雲井詩の記事を紹介するにあたり、初出（自由民権運動下の雲井龍雄の一側面（上下）——『土陽新聞』掲載記事めぐって——徳島大学国語国文学6・7、一九九三・一九九四年）においては簡単な校訂を施したが、本書では省略した。

\*5 ①各記事は旧字体・片仮名で表記されているが、新字体・平仮名に直した。また、点。点も省略した。記事の表題の後の氏名は執筆者を示す。執筆者が記されていないものや、偽名で表記されているものもあるが、それらについては家永三郎氏の『植木枝盛研究』（岩波書店、昭和三五年）及び『植木枝盛集』（岩波書店、平成三年）で執筆者名が明らかにされているもののみそれに従った（他は表記通り）。植木枝盛、坂本南海男、細川瀏は名字のみ表記した。家永氏の前掲書の第一章第一節「立志社への参加」は本章の考証にあたり因った所が大きい。

\*6 『法令全書』巻八の一（内閣官報局、昭和五〇年）による。

\*7 『土陽新聞』二四「論便宜法の悪弊第二」によれば、立志社の言う不平士族の乱とは、雲井陰謀事件、長州脱退騒動、佐賀の乱、神風連の乱、秋月の乱、萩の乱、西南戦争の七つを示す。また不平士族の乱については後藤靖氏の『士族反乱の研究』（青木書店、昭和四二年）に詳しい。

- \* 8 西郷自決が九月二四日であるから、最末期の頃の記事となる。
- \* 9 『孟子』 梁惠王下。
- \* 10 色川大吉『明治の文化』（岩波書店、昭和四五年）九二頁。
- \* 11 同書、一四〇頁
- \* 12 色川大吉『新編明治精神史』（中央公論社、昭和四八年）二二四頁。
- \* 13 このイメージについては、彼自身が自らを藺相如や文天祥などに比して詩中に詠み込んでいる。また潔癖者のイメージを有する屈原もこの範疇に属する。これについては本書第一章で論及した。
- \* 14 こちらについても彼自身が自らを張良に比していることから伺い知る事ができる。また管仲も智将として同じ範疇に属する。
- \* 15 たとえば雲井の「同大俊師、訪秋水翁 赤羽里。……」（明治二年冬）には「不為幹坤乾之名臣 須為嘲風弄月之逸民」とあり、「名臣」になれないのなら「逸民（隠者）」となれとする所に、彼の「名臣」に対する執着を読み取ることができるとある。
- \* 16 雲井が明治三年八月、東京へ檻送された際、密かに師安井息軒に送った詩「呈息軒先生」（その二）に「雖有愧前哲 猶足立懦夫」とある。結局、彼のその最後の自尊心も生前は満たされる事はなかった。しかし、色川氏の指摘にあるように、やがて彼の詩は専制政府下の「自由民権家たちを奮い起たしめ」たのである。



## 第7章 雲井龍雄と「棄児行」―杜鵑解釈をめぐって―

### はじめに

先に第1章及び第6章において、雲井龍雄が幕末維新期を遯卦の時代ととらえ、革新のリーダーであった薩摩を秦の始皇帝や王莽・董卓に喩え、その一方で自らを管仲・屈原・藺相如・荊軻・張良等にオーバラップさせた漢詩文を残し、またその死後は自由民権運動期において、その詩文が運動家たちを鼓舞しつづけたこと<sup>\*1</sup>を論じた。

雲井は、特に明治一〇年代・二〇年代以降、数多くの伝記類や詩文集にその生涯や漢詩が採録され、存在がクロウズアップされる。本章は雲井の作として当時人口に膾炙されていた「棄児行」<sup>\*2</sup>（実は贋作）について、一つの仮説を試みるものである。

この仮説の焦点となるのは「棄児行」の最終句「残月一声杜鵑啼」に見える杜鵑（ホトトギス）の解釈にある。杜鵑は数多くの漢詩や和歌において詠み込まれてきた。その理由の一つに杜鵑が持つ属性の多さをあげることができよう。そこで本章の第一節では、古来さまざまな属性（暗示・隠喩・暗喩）を持つものとして詩文で使用されてきた杜鵑について整理を行い、第二節において幕末期の用例をいくつか提示してみる。そして第三節では通常試みられてきた「棄児行」のオーソドックスな表の解釈を紹介し、第四節において隠喩としての杜鵑がこの詩において持つ新たな解釈（裏の解釈）の可能性について言及してみたい。

### 一 杜鵑の属性

もともと中国では、杜鵑は長江流域に棲息する鳥であり、伝説の起源も長江の上流域に位置する蜀に存する。ホ



トトギスの漢字表記が「杜鵑」「子規」「不如歸」「杜宇」「蜀魂」等々多岐にわたるのは、この江南地方の各方言に基づく表記の違いと、そこにある望帝伝説に起因する。まず杜鵑伝説の中核とも言える望帝伝説について触れておきたい。

望帝杜宇にまつわる伝説について言及する場合、前漢末の揚雄の作とされる『蜀王本紀』と西晋から東晋にかけて生きた常璩の『華陽国志』に依るのが最もオーソドックスであろう。まず『蜀王本紀』の記述から見てみたい。

後に一男子あり。名づけて杜宇と曰ふ。天より墮ちて朱提に止まる。一女子の利と名づくるものあり。江源の井中より出づ。杜宇の妻と為る。乃ち自ら立ちて蜀王と為り、号して望帝と曰ふ。汶山の下邑の郛と曰ふを治む。化民、往往にして復出づ。望帝は積むこと百余歳。荆に一人あり鼈霊と名づく。其の尸、亡去す。荆人、之を求むるも得ず。鼈霊の尸、江水に随ひて上りて郛に至り、遂に活く。望帝と相見え、望帝は鼈霊を以て相と為す。時に玉山、水を出だし、堯の洪水のごとし。望帝、治むるあたはずして、鼈霊をして玉山を決し、民をして安処を得しむ。鼈霊、水を治めて去るの後、望帝、其の妻と通ず。慚愧して、自ら徳の薄くして鼈霊にしかざるを以て、乃ち国を委ねて之に授け去ること、堯の舜に譲るが如くす。鼈霊即位し、号して開明帝と曰ふ。……望帝去るの時、子鵑鳴く。故に蜀人、子鵑の鳴くを悲しみて望帝を思ふ。(『蜀王本紀』)

天から降った杜宇が蜀王となつて望帝と名のり、そこへ荆人の鼈霊が現れて宰相となり治水工事を行ったが、その際、望帝が鼈霊の妻と関係し、後悔した望帝が鼈霊に禅譲したという展開を読み取ることができる。そして望帝が去った時に子鵑が鳴いたので、人々は子鵑の鳴き声に去らざるを得なかつた望帝の悲しみ(後悔)を感じたとする。

このストーリーの流れは他の典籍でも大きくは変わらないが、細部において多少の異同が見られる。次に『華陽国志』の文を見てみよう。

後、王ありて杜宇と曰ふ。民をして農に務めしむ。一に杜主と号す。時に朱提に梁氏の女利の江源に遊ぶあり。宇、之を悦ぶ。納れて以て妃と為す。治を郫邑に移し、或いは瞿上に治む。七国の王を称せしとき、杜宇は帝を称す。号して望帝と曰ひ、名を蒲卑と更む。自ら以らく「功德は諸王より高し」と。乃ち襜斜を以て前門と為し、熊耳・靈関を後戸と為し、玉壘・峨眉を城郭と為し、江・潜・綿・洛を池沢と為し、汶山を以て畜牧を為し、南中を園苑と為す。会たま水災あり。其の相開明、玉壘山を決して以て水害を除く。帝、遂に委ぬるに政事を以てし、堯・舜の禪授の義に法りて、遂に位を開明に禪る。帝は西山に升起隠る。時に適たま二月。子鵑鳥、鳴く。故に蜀人は子鵑鳥の鳴くを悲しむ。巴も亦其の教に化し、而して農務に力む。今にいたる迄、巴蜀の民、農時には先づ杜主君を祀る。開明、位し号して叢帝と曰ふ。〔華陽国志』蜀志〕

『華陽国志』では『蜀王本紀』に見えた鼈靈（開明）の蘇生にまつわる記述や望帝が鼈靈の妻と関係を持ったという記述が見えず、かわりに自らの徳の高さを誇るやや傲慢な望帝の姿が描かれている。「升起隠る」については、「升仙」と取ることも、『蜀王本紀』のように「去る」の意味で取ることも、また次に示す『蜀志』の「隱化（死）」の意味で取ることも可能であろう。細かな異同はともかく、望帝伝説の大筋はこの二書に見ることがができる。以上の望帝伝説については『禽經』が李膺の『蜀志』を引いているので参考として紹介しておきたい。

蜀右に杜宇と曰ふ。望帝杜宇は、蓋し天精なり。李膺の『蜀志』に曰く「望帝は蜀に王と称す。時に荊州に一人あり。化して井中より出づ。名づけて鼈靈と曰ふ。楚に於て身死す。屍、流れに沂反して上り、汶山の陽に至る。忽ち復た生く。乃ち望帝に見ゆ。立てて以て相と為す。其の後、巫山の龍鬪ひ、江を壅ぎて流さず。蜀の民、墊溺す。鼈靈、乃ち巫山を鑿ち、三峡を開く。邱より降り土に宅し、人、陸居するを得。蜀人は江南に住み、羌は城北に住む。始めて木柵を立つ。周三十里。鼈靈をして刺史と為らしむ。号して西州と曰ふ。後数歳、望帝、其の功の高きを以て、位を鼈靈に禪る。号して開明氏と曰ふ。望帝は道を修め西山に処る。而して

隠化して杜鵑鳥と為る。或いは云ふ「化して杜宇鳥と為る」と。亦曰く「子規鳥」と。春に至れば則ち啼く。聞く者悽惻たり。（『禽經』）

治水工事を行った開明に王位を譲った望帝杜宇が西山に死んだ（去った・升仙した）という基本線は『蜀王本紀』『華陽国志』とともに同じであるが、龍靈（開明）にまつわるエピソード、巫山の龍と三峡のエピソード、望帝が杜鵑に変化したエピソードなど、いくつかの点で異同が確認できる。中でも『蜀王本紀』『華陽国志』とは杜鵑の役割が異なっていることは注目に値しよう。この望帝が杜鵑に変化したというエピソードは『爾雅翼』にも見られる。

望帝とは蓋し蜀王なり。望帝、其の相の妻を姪す。慙ちて亡げ去り、化して此の鳥（子規）と為る。蜀人、其の鳴くを聞きて、皆起ちて望帝と曰ふ。漢の許叔重より已に此の説あり。望帝は一名杜宇。故に「蜀都賦」に云ふ「鳥、杜宇の魄を生ず」と。此を謂ふなり」（『爾雅翼』）

これらの文を総合的に見ると、望帝杜宇の伝説に絡んで、杜鵑には「悲しみ」「隠化」「悽惻」といった、その鳴き声を聞いた者が持つイメージに加えて、悲しむ主体が変化したものという属性も派生として存在していたことがわかる。

本章の目的は杜鵑の属性の提示にあるため、望帝伝説の解析はこのあたりで止め置き、その他の杜鵑にまつわる逸話の代表的なものを以下に列挙しよう。

杜鵑の初めて鳴きしとき、先に聞く者は別離を主とす。其の声を学ぶ者は、人をして吐血せしむ。廁に登りて之を聞けば、不祥。圧するの法は、但だ狗声＊を作して之に応ずるのみ。（『荆楚歲時記』三月）

恐らく杜鵑が卵を他の鳥の巢に産み落とすことや、望帝が帝位を去って西山に隠棲することから出てきたであろう「別離」という隠喩がここに見える。また「吐血」に関しては『異苑』にも次のような説話がみられる。

人あり。山行して一群を見る。聊いささか之を学ぶ。嘔血いけちして便たはち殞たふる。人言ふ「此の鳥は啼きて血出づるに至りて乃ち止む」と。故に嘔血の事あり。（『異苑』）

杜鵑にまつわる「吐血」のイメージは、そのくちばしが赤く、鳴けば血を吐いているように見えることや、夏には夜通し鳴き続け声が嘎がれてしまうことに基づくものである。そして、その鳴き声をまねた者が「吐血」し、さらには、そこから導き出されるであろう「不祥」といったマイナスイメージが付加されている。

時珍曰く、杜鵑は蜀中より出づ。今、南方も亦之あり。状は雀鷁せきの如くして、色は惨黒にして赤口。小冠あり。春暮に即ち鳴く。夜啼きて旦に達す。鳴けば必ず北に向ふ。夏に至るに尤も甚だし。昼夜止まず。其の声、哀切なり。田家、之を候うかがひて以て農事を興す。惟だ虫囊ちゅうぶくろを食ふ。巢くを為つくるあたはず。他巢たのくに居りて子を生む。冬月は則ち蔵蟄ざうていす。（『本草綱目』杜鵑）

これは杜鵑自体の属性として最も有名なものである。先にも少し触れたように、ホトトギスはウグイスやミンサザイ等の巢に卵を産み、その世話をその巢の親鳥に任せるといった性質がある。これにより「棄てる」「棄てられる」といった状況を暗示するものとして杜鵑が使用されることとなる。また「不祥」の派生として次のような記述も見られる。

嘉祐末、康節邵先生、洛陽の天津橋を行く。忽ち杜宇の声を聞く。歎じて曰く「北方に此の物なし。異なるか

な。十年に及ばずして、其の江南の人の文字を以て天下を乱す者あらんや」と。客曰く「杜鵑を聞きて、何を以てか此を知る」と。康節曰く「天下の將に治まらんとすれば、地勢、北より南し、將に乱れんとすれば、南より北す。今、南方の地氣至る。禽鳥飛類は、氣の先を得る者なり」と。（『聞見録』）

これは邵康節が王安石（江南の人）の出現による世の混乱を、本来黃河流域には棲息しないはずの杜鵑の鳴き声を聞くことよって予言したという逸話であるが、ここから「將乱（混乱の兆し）」という杜鵑の暗示が導き出せる。これは混乱する時代を『周易』の「遯」や「否」の卦を以て象徴的に表現することと同質であると言ってよい。

以上、「悽惻」「隱化」「別離」「不祥」「吐血」「哀切」「居他巢生子」「將乱」といった、実に多彩な属性が杜鵑にはあることがわかる。

## 二 杜鵑詩の用例

本節では、先に示した杜鵑の属性が漢詩や和歌においてどのように使用されるのか、その用例をいくつか示してみたい。ただし、杜鵑が詠み込まれた漢詩や和歌は枚挙に暇がないので、維新志士が残した例に限定していくつか示すこととする。

まず、土佐藩の郷士で文久三年（一八六三）に起こった天誅組の変で戦死した吉村寅太郎は、前年に捕らえられ土佐に送還される際に次のような詩を残している。

回首蒼茫浪速城 首を回らせば 蒼茫たり浪速城  
蓬窓又聽杜鵑声 蓬窓 又た聽く 杜鵑の聲  
丹心一片人知否 丹心 一片 人知るや否や

不夢家郷夢帝京 家郷を夢みず 帝京を夢む

(吉村寅太郎「舟到由良港」)

本詩は大坂に思いを残しつつ土佐に送還される無念さを杜鵑に託したものであり、蜀を追われた望帝杜宇に近いものがある。

また西郷隆盛は南島流刑中に自らを屈原とダブルイメージの中で捉え、その中に杜鵑を詠み込んでいる。

雨帯斜風叩敗紗 雨は斜風を帯びて敗紗を叩き

子規啼血訴冤譁 子規 血に啼き冤を訴へて譁しかまひす

今宵吟誦離騷賦 今宵 吟誦す 離騷の賦

南竄愁懷百倍加 南竄の愁懷 百倍加はる

(西郷隆盛「偶成」)

中国における流刑者として、最も古く且つ著名な者は、戦国末期の楚の懷王と頃襄王に仕えた賦家屈原であろう。ここでは二句目に子規を登場させ、「吐血」しながら自らの冤罪を訴える様を詠んで、三句目の「離騷の賦」と対応させている。この「冤罪」のイメージについては、「吐血」しながら「訴える」というイメージから派生したものと生まれ、用例も決して少なくはない。たとえば土佐藩の武市瑞山が獄中で詠んだ次の詩なども「冤罪を訴える」イメージで杜鵑が用いられている。

夜色沈沈雨脚輕 夜色 沈沈 雨脚輕く

悽然催淚夢難成 悽然として涙を催す 夢 成り難し

杜鵑窓外陳何事 杜鵑 窓外に何事を陳ぶ

亦使囚人增慨情 亦 囚人をして慨情を増さしむ

(武市瑞山「夜雨聞杜鵑」)

また詩中ではなく詩題に杜鵑を登場させて詩全体のイメージを杜鵑に担わせる例もある。一つ示しておこう。水戸藩士鶴飼吉左衛門は息子とともに安政の大獄において捕らえられ処刑された人物である。彼は獄中において「安政己未四月廿六日。以幕府之命、与安島大夫及大竹儀兵、同抵評定所受審。此行禍殆不測。将出得詩二篇。乃把筆一揮。留以与児熊太郎。他日成立其有以知余之志也。時属天明、晓雲慘憺、杜鵑悲鳴、如訴冤者然」という詩題の長古詩を残しており、最後の部分に「時、天明に属す。晓雲慘憺として、杜宇悲鳴し、冤を訴ふる者の如し」と言い、詩全体の「冤罪」という主題のイメージを先の西郷詩・武市詩と同様に「杜鵑」に担わせている。

最後に和歌の例を二つあげておこう。まず水戸藩の藤田東湖が詠んだ「時鳥を聞きて」と題された一首である。

天つ日あまを おほへる雲の さみだれに 山ほととぎす 鳴なまわたるらし

「天つ日」は天皇の隠喩であり、天皇を蔽う「雲」の出現にほととぎすが「将乱」の隠喩として鳴き渡るといふ詩意である。また、長州藩士久坂玄瑞は

ほととぎす 血になく声は 有明の 月より外に 知る人はなし

という和歌を残しており、自らの「吐血」しながら「訴え」る勤王の志を誰も理解してくれない状況を杜鵑に託している。

以上、わずかな用例しか示せなかったが、もともと杜鵑が有していた属性が重なり合って、さらに広がりを持つていたことが了解できよう。

### 三 「棄兒行」

では雲井龍雄の作として愛された「棄兒行」を詳細に見てみよう。

斯身飢斯兒不育	斯の身飢うれば	斯の兒育たず
斯兒不棄斯身飢	斯の兒棄てずんば	斯の身飢う
捨是耶不捨非耶	捨つるが是か	捨てざるは非か
人間恩愛斯心迷	人間の恩愛	斯の心迷ふ
哀愛不禁無情淚	哀愛禁ぜず	無情の淚
復弄兒面多苦思	復た兒面を弄して	苦思多し
兒兮無命伴黃泉	兒や 命なくば	黃泉に伴はん
兒兮有命斯心知	兒や 命あらば	斯の心知れ
焦心頻屬良家救	焦心 頻りに屬す	良家の救ひを
欲去不忍別離悲	去らんと欲して忍びず	別離の悲しみ
橋畔忽驚行人語	橋畔 忽ち驚く	行人の語
殘月一声杜鵑啼	殘月 一声	杜鵑啼く

〔「棄兒行」〕



私が飢えてしまえば、この子が育たない

この子を棄てなければ、私が飢えてしまう

棄てるのが正しいのか、棄てないのは間違っているのか

人間としての恩愛の情に心が迷う

いとしい思いを止められず無情の涙がこぼれる

再び子の顔をあやして心を苦しめる

我が子よ、もし拾ってもらえず死んでしまったら、私もともに黄泉の国へ行こう

我が子よ、もし拾ってもらえ命長らえたら、いつかは私の気持ちもわかってね

焦る思いの中で何度も何度も良家に救われるようにと願う

去ろうと思うが別離の悲しみになかなか去り難い

橋のたもとで、突然道行く人の話し声に驚く

朝に消えそうな月、その時、ホトトギスが鳴いた

古詩であるから平仄は問わないとしても、一句目と三句目は3+4の形になっており破格である。形式的には問題を残すが、本詩は子を棄てて誰かに託さねばならない決断を自らにせまる母親の心情を活写し、最終句の「残月一声 杜鵑啼く」は余情を残して余りある。このほか、第三句の「捨つるが是か 捨てざるは非か」は、通常「甲か乙か」というフレーズは甲と乙が相反する内容でなければならぬ。たしかに「是か非か」という形にはなっているものの、ここでは「棄てるのが正しいのか」と「棄てないのは間違っているのか」が同じ結果を示しており、棄てることを母親が自らに言い聞かせるという内容になっている。秀逸であると言えよう。また、苦悩する母親と語りかけられる子をアップして描写する一句目から十句目と、ズームアウトして全体を俯瞰する十一・十二句目と、視覚的な演出もなされている。

さて、本章で問題にしたいのは最後の一句「残月一声 杜鵑啼く」の部分である。本章第一節において示した杜鵑の属性を改めて考えるまでもなく、本詩は当然「他巢に居りて子を生む」及び「別離」「悽惻」「哀切」という杜鵑の属性を以て解釈するのがオーソドックスな解釈ということになる。

しかしそれは、雲井が実際に子供を棄てる母親を目の当たりにしたか、或いは他者が目撃した話を雲井が聞き、さらに雲井自身がこの詩を詠んだという前提が必要である。<sup>\*12</sup>だがそれは当たらない。なぜならこれは冒頭でも言及したように贋作であつて、雲井龍雄自身の作ではないことが既に明らかにされているからである。ではなぜ本詩は雲井作として当時の人々に愛されたのであろうか。

#### 四 反薩詩人雲井龍雄

「棄児行」は雲井の作ではない。では作者はというと、同じ米沢藩の原正弘であり、雲井とは友人関係にあつた。この「棄児行」が原正弘の作であり、後に雲井の作と称されるようになった経緯については安藤英男氏が詳細に論じておられる。安藤氏は明治期に編纂された雲井の詩文集がいずれも「棄児行」を載せていない点を指摘した上で、

今は余も、其の月日と雑誌の名は之を記憶せざれども、二十一年春頃、雲井龍雄の作なりとて、『棄児嘆』の詩を載せたる者を見たり。此の棄児嘆の詩は、龍雄の作に非ずして、原正弘氏の作なり。各雑誌は、何人の手より此の偽稿を得て、之を掲載したるや憫笑に堪へず。然れども、方今、真を以て偽と為し、偽を以て真と為す者、独り是等詩賦而已<sup>のみ</sup>に止らざるなり。（『東北偉人雲井龍雄全集』明治二十七年）

世に伝ふる所の『棄児嘆』の詩は、龍雄の作にあらずして、原正弘氏の作なり。序<sup>ついで</sup>ながら、其の謬を正す。（『少年読本・雲井龍雄』明治三十四年）

という、二書の序文を提示しておられる。この文を見る限り、逆に当時「棄児行」が雲井作として世に伝わっていたことがよくわかる。

さて、ここで解せないのが、なぜこの「棄児行」が雲井の作と称されるに至ったかという問題である。確かにこの詩は一度読むと心に残る余情を醸し出すものをもってはいるが、前節で提示したような子を棄てる母親のせつなさを詠んだものとして解釈するならば、敢えて雲井の作とする必要性はないのではないか（原正弘が当初から雲井作として詠んだかどうかについては不明）。また、それが何故雲井の作として人口に膾炙するまでに至るであろうか。贗作の場合、仕上がった作品は誰が見てもその人の作でなければならぬ。少なくとも、生前に捨て子を見たという記録もなく、雲井の作風とも異なる「棄児行」が、雲井作と語られるようになるには、皆が納得するだけの根拠が必要であろう。

では雲井の作風はというと、これについては第1章でも言及したが、改めて簡単に触れておくと、雲井の漢詩は中国古典を典故とするものが多く、詩中において雲井の眼前にある状況が古典中の事件や人物に比されて展開されていく。自ら「少小読み破る万巻の書」<sup>\*15</sup>と言っただけあって、その典故とされる漢籍も多岐にわたる。そして、自らを時に藺相如や荊軻に比して鼓舞し、時に管仲や張良に比して理想とし、時に長沮・桀溺・接輿に比して引き退いたりする。<sup>\*14</sup>とすれば、子を棄てる母親を詠む本詩は、雲井の作風とは少し異なることになる。

では、雲井の作風に基づいて本詩を見ればどのような解釈が可能であろうか。以下、本詩解釈の可能性を提示したい。

第一節で示した杜鵑の隠喩のうち「将乱」を核にこの詩を見れば、幕末維新期において賊軍とされた東北の人々を棄てられた児とみなすことが可能となる。そして、この解釈はこの詩を詠んだ詩人が幕末維新期のリーダーであった薩摩藩を嫌悪する人物であった場合にのみ可能となる。では自由民権運動期において反明治政府（反薩長）の雄と目されていた人物はというと、明治三年に謀叛の罪で処刑された雲井がその筆頭に挙げられる。とすれば、反薩詩人であった雲井の名が反明治政府の隠喩として使用された可能性を否定できない。換言すれば、この「棄児行」

は雲井という名前が作者として付加された時にのみ反薩詩となるのである。さらに加えるならば、作者を雲井とした場合、労咳を病んでいた雲井の「吐血」のイメージがここに付加され、杜鵑は雲井そのものを示すことになる。すなわち雲井は全体を俯瞰する一者として描かれていることになるのである。そして、明治政府顛覆のクーデター組織として断罪の根拠とされた彼の帰順部曲点検所（真偽については不明）が決してそうではなかったとする「冤罪」を「訴え」る図式をも成立する。

ちなみに安藤英男氏も言及しているが、「棄児行」が雲井作として扱われたことの初出は明治一六年刊の有田正夫『雲井龍雄事蹟』（有田正夫出版）である。<sup>\*15</sup>この年は談義本の秋亭実『雲井龍雄美伝 徳川回復 噂 龍浪』（太平堂）が出版された年でもある。すなわち自由民権運動の中で反薩詩人の雲井の名が知られ、その詩が運動家たちの心を奮い立たせていた時期と一致する。<sup>\*16</sup>自由民権運動下における雲井の詩の紹介は、土佐立志社がその機関誌『土陽新聞』にその詩を掲載した明治一〇年を初期とするが、これは知識人を対象とする大新聞である。一方『徳川回復 噂 龍浪』は講談における演目の活字化であり、雲井の事蹟が一般大衆にまで浸透していたことを意味する。

このように考えた時、明治一〇年代、明治政府（薩長藩閥政治）の中で苦しむ東北の人々、或いは平民層の間において、自らを「棄てられた存在」としてこの「棄児行」を歌い上げ、明治政府へ怨嗟の声をあげていたことは、十分にあり得たであろう。

## おわりに

本章では「棄児行」を解釈するにあたって、杜鵑の持つ隠喩の分析からスタートし、最後に雲井という反薩詩人が持っていた隠喩を考慮に入れた際の解釈の可能性について言及してきた。作者の原正弘が当初から雲井龍雄の名を冠するつもりでこの作品を詠んだのか、或いはいつの間にか雲井龍雄の作として伝播していったのかは、今となっては知る由もない。本章で重要視したのは、この「棄児行」は雲井作として人口に膾炙したという点にある。

本章冒頭で述べたように、ここで論じてきたことは推定（可能性）の域を出ない。もはや真偽は確認すべくもないが、状況証拠は十分であろう。そして、本稿で述べた解釈で「棄児行」を読んだ時、それが明治一〇〜二〇年代において、本詩がいかなる輝きを持っていたのかを我々は推し量ることができるとともに、この時代を理解するための手だてともなるであろう。

そして、この試みは雲井龍雄が処刑される数ヶ月前に師安井息軒へ送った詩の中の

雖有愧前哲 前哲に愧づるありと雖も

猶足立懦夫 猶ほ懦夫を立たしむるに足らん

〔呈息軒先生（その二）〕

という、実は雲井が生前果たし得なかつた「懦夫を立たしむる」という望みが、死後一〇年の時を超えて果たされていたのだということの証しともなる。

\*1 色川大吉氏も自由民権運動期における雲井の詩の影響力については、「やがて自由民権家たちを震い起たしめ、権力に抵抗し、従容として志に殉じていく明治革命家像の原イメージとなつたのである」（『明治の文化』（岩波書店、昭和四五年）九二頁）、「自由民権家たちがいかに雲井を愛惜したか、彼の志に鼓舞され、歴史を変えるエネルギーとして生かしたかは計りしれない」（同、一四〇頁）、「雲井の凜烈たる精神が、かれら反薩長の青年たちの肺腑をつらぬき、かれらの情心をふるい立たしていたようだ」（『新編明治精神史』（中央公論社、昭和四八年）二二四頁）と論じておられる。

\*2 当初は「棄児歌」或いは「棄児嘆」という題であつた。筆者が確認した資料では、明治二五年の『悲愴慷慨劍舞詩集』

(岡本楠太郎編・藤森岩次郎刊)は「棄児歌」として、四二年の『古今名家愛吟集』(芳文社編・芳文社刊)には「棄児行」として記されている。なお、この点については安藤英男氏も「棄児行考」(『新稿雲井龍雄全伝』(光風社出版、昭和五六年)所収)の中で言及しておられる。

\* 3 李時珍が『本草綱目』において『釈名』「杜宇、子規、鷓鴣、催婦、怨鳥周燕、陽雀」を引いた上で「鵲と子禽、子規・鷓鴣・催婦の諸名とは、皆、其の声の似たるに因る。各おの方言に随ひて之を呼ぶのみ。其の鳴きて「不如婦去」と曰ふが如し。諺に云ふ「陽雀は鷓鴣と叫ぶ」と。是なり」と述べている。

\* 4 『蜀王本紀』については竹田晃他『中国古典小説選 1 穆天子伝・漢武故事・神異経・山海経他』(明治書院、平成一九年)にこの点については「陽雀は鷓鴣と叫ぶ」と述べている。原文は既に散佚し、集本のみが存する。詳しい。

\* 5 『華陽国志』については中林史朗『華陽国志』(明徳出版社、平成七年)に詳しい。

\* 6 『蜀王本紀』では井中から出てきたのは望帝の妻利であったが、ここでは鸞靈べつれいが井中から出てきている。

\* 7 左思の「蜀都賦」は『文選』巻四に収められている。

\* 8 『酉陽雜俎』では「狗声」を「大声」としており、「狗」「犬」「大」で変化した可能性もある。なお、『酉陽雜俎』の記述は『荆楚歲時記』と『異苑』を合わせたものとなっている。

\* 9 『周易』の卦の一つ。否定・閉塞を暗示する。「泰」の卦と対で用いられることが多い。

\* 10 破れた地の薄い絹織物。

\* 11 太陽(日)が天皇の隠喩として、また月が幕府の隠喩として使用されることは、本書第9章において論及した。

\* 12 安藤英男氏は「棄児行考」の中で雲井が養子をとったことに関連づけて本詩が成立したとする。ただし原正弘自身がそれをもとに本詩を詠んだとしても、それでは本詩が自由民権運動期において人々に愛されたこととは直接はつながらない。

\* 13 「会田部曲将校於鷺湖。置酒更盟。醉後賦之」に「少小説破万卷書 欲討聖源遡泗洙」とある。

\* 14 代表的な例を三つほど示してみる。

蘭氏元全趙 蘭氏元 趙を全くし

荆軻曾許燕 荆軻 曾て 燕に許す

輸誠期貫日 誠を輸して 貫日を期し

決死誓回天 死を決して 回天を誓ふ

(鴨子與広沢岡松林武市伴諸君飲、席上贈広沢君)

慶応三年、彼が藩命により探索方として京都に赴いていた頃、広沢真臣(長州藩)らと会した時に詠んだもので、自らを秦に抗った藺相如・荊軻に喩えたもの。

憂世非難救世難 世を憂ふるは難きに非ず世を救ふは難し

誰令百姓免饑寒 誰か百姓をして饑寒を免れしめん

何年一炬燒秦尺 何れの年か一炬秦を焼き尽し

更約三章漢法寬 更に約せん三章漢法の寬

(退朝訪後藤參與橋居……(その五))

慶応三年十二月に行なわれた王政復古発令の直後に詠まれたもので、後藤参与とは土佐の後藤象二郎の事であり、「秦」とは討幕派の中心であった薩長を指す。そして、この強大な敵に抗う弱者としての自分を、法三章を示した劉邦に喩えたもの。

天門之窄窄於甕 天門の窄きは甕かめよりも窄せまし

不容射鉤一管仲 容れず 射鉤の一管仲

(題集議院障壁)

明治二年十月、彼が集議院を退庁させられた際の作。明治政府の懐の狭さを、春秋時代の斉の桓公と管仲の關係に比し、自らを管仲としたもの。

\*15 安藤氏は「棄兒行考」において『雲井龍雄事蹟』の「曾て部下の者、吾妻橋に棄兒あるを見、相伝へて其の親の愚を笑ふ。龍雄、叱一叱して曰く、苟も人間に人の父母たるもの、誰れか好んで兒を棄るものあらんやと。即ち「棄兒歌」一闕を作て部下に示す。……」という記述に対して、「ところが、同じ有田正夫が編集した『雲井龍雄存稿』(詩集・明治一六年一〇月刊)には、この「棄兒行」を載せていない。この存稿は、米沢の人・岩井貫一郎の校閲を経ている。疑わしいので、カットしたと見るべきであろうか。……」と述べておられる。

\*16 色川大吉氏の『明治の文化』『新編明治精神史』に詳しい(注1に既出)。

## 第8章 陸羯南の詩想 — 賈生のころ —

### はじめに

新聞『日本』の主筆として数多くの社説を遺した弘前藩出身の陸羯南（名は実、一八五七〜一九〇七）は、同時に漢詩人でもあり、『陸羯南全集（第一〇巻）』（みすず書房、一九八五年）には二八首が収録されている。

本章では、陸が自らをオーバークラップさせた中国前漢時代の文人であり官僚でもあった賈誼（前二〇〇〜前一六八）を詠み込んだ漢詩四首を取り上げ、彼が自らを如何なる存在として前半生を生きていたのかを考える。漢詩については『陸羯南全集（第一〇巻）』を底本とし、また高松亨明『陸羯南詩通釈』（津軽書房、昭和五十六年）を参照した。

### 一 陸の詩作と作風

陸の生涯については数多くの研究があり、ここで改めて紹介する必要があるまい。本節では彼の詩作にかかわる部分のみを論じておく。

陸が詠んだ漢詩は『咳声余韻』『踏雲余踪』『寒帆余影』、さらに四集・五集・六集・『詩集拾遺』としてまとめられている。明治四年から漢学者工藤他山（一八一八〜八九）の私塾思齋堂に学び、また明治六年に旧藩校の後身東奥義塾で学んでいたこともあってか、彼の漢詩は中国古典を典故とした詠史詩が多く、その意味で彼の作風は雲井龍雄に近似している。彼の詩に登場する中国史上の人物は、本章で取り上げる賈誼とその周辺の人物以外にも、范蠡・韓信・項羽・王莽・曹丕・諸葛亮・文天祥・王陽明など多彩である。二つほど例示してみよう。



馬蹄一跌旭光空 馬蹄一跌 旭光 空し

荒土秋寒古寺中 荒土 秋寒し 古寺の中

曹丕無情殘骨肉 曹丕 無情 骨肉をざん残し

淮陰有武困英雄 淮陰 武ありて英雄を困くるしむ

百年風雨畿内暗 百年 風雨 畿内暗く

万里江山壯阪東 万里 江山 壯さかんなる阪東

形勢不兼霸図便 形勢 霸図を兼ねるに便ならず

枉將窮死学重瞳 枉げて窮死を將もつて重瞳を学ばしむ

〔踏雲余踪〕粟津懷古)

人情世態日争新 人情 世態 日に新を争ふ

鮮矣忠貞氣節人 鮮すくみし 忠貞氣節の人

輕利浮名君勿慕 輕利 浮名 君慕ふなかれ

王莽亦是漢功臣 王莽も亦た是れ漢の功臣

〔咳声余韻〕無題)

「粟津懷古」は木曾義仲を詠んだものである。四句目で淮陰侯韓信を武勲を挙げながらも処刑された悲運の武将として義仲とオーバラップさせ、八句目で形勢に恵まれなかった重瞳（瞳が二つあった）とされる項羽の生き様を義仲に（形勢を学ぶ手立てを）学ばせたかかったと言う。

また「無題」では四句目に王莽を登場させ、奇をてらい名利を求めるのをよしとすれば、皇帝位を篡奪した王莽ですら漢の功臣となってしまうと言う。もちろん、ここに挙げられた形勢に抗った韓信・項羽・木曾義仲は陸自身

に他ならず、王莽は陸が生きた時代の形勢の主流派、即ち薩長をさすとみてよい。このような中国史上の人々を詠み込んだ詩は、詩中の登場人物の生き様が背景として言外にあり、詩が大きな広がりや深みを持つことになる。そして、このような詩を詠めるということは、幅広く且つ深い中国文化に対する見識を持っているということでもある。それでは陸が自らをオーバーラップさせた賈誼はどのような背景を持つのか。次節において論じてみたい。

## 二 陸詩に見える賈誼

本節では陸が自らをオーバーラップさせた賈誼について論じていく。まず(1)において賈誼について簡単に説明し、(2)以降で賈誼を詠み込んだ陸の「追懷」「賈生」「登嶽(三三)」「失題(二二)」の四首を検討していく。

### (1) 賈誼の生涯

まずモチーフとなっている賈誼の人物像を簡単に示しておこう。彼の生涯は『史記』屈原賈誼列伝や『漢書』賈誼列伝に詳しく、陸も両書から賈誼の生涯を認識したと考えてよい。

賈誼は一八歳で『詩経』を暗誦して文章を著し、また諸子百家の諸書にも通じるなど、若くしてその才能を発揮する文人であった。新たに即位した文帝は彼を招いて博士官とし、ここでも才能を発揮して一年のうちに太中大夫となる。しかし、賈誼が出す様々な献策は高官たちの反感を買い、彼らの讒言を文帝も無視できず、賈誼は長沙へと左遷されることとなる。長沙への途上、湘水を渡った時に、かつて屈原が湘水の下流の汨羅で入水したことを悼んで「屈原を弔ふの賦」を作る。その一節を示しておこう。

遭世罔極兮 世の罔極に遭ひ

乃隕厥身 乃ちそ厥の身おとを隕せり

嗚呼哀哉 嗚呼哀しいかな

逢時不祥 時の不祥に逢ふ

鸞鳳伏竄<sup>\*1</sup> 鸞鳳は伏竄し<sup>\*2</sup>

鴟梟翱翔 鴟梟は翱翔す

闒茸尊顯<sup>3</sup> 闒茸は尊顯せられ

讒諛得志 讒諛は志を得

賢聖逆曳<sup>\*3</sup> 賢聖は逆曳せられ

方正倒植<sup>\*4</sup> 方正は倒植せらる

最初の「罔極」は無道と言ひ換えてよく、賈誼への讒言がまかり通る状況をさす。そして、そういう時勢に生きる自らを「時の不祥に逢ふ」者として位置づけている。このような時勢の中にあつては「鴟梟（ミミズクとフクロウ）」がのびのびと生き、「闒茸（不肖の人）」は尊敬されて名を顯し、讒言がまかり通つて聖人や賢者、方正なる人々は退けられていくと言う。

また長沙の太傅として三年を過ごしたころ、不祥とされるフクロウが部屋の中に飛び込んでくるという事があり、その際に「鵬鳥の賦」を詠む。ここには

禍兮福所倚 禍は福の倚る所

福兮禍所伏 福は禍の伏す所

……

……

天不可与慮<sup>あらかじ</sup> 天は与め慮るべからず

道不可与謀<sup>あらかじ</sup> 道は与め謀るべからず

遲數有命兮

遲數は命あり

悪識其時

悪くんぞ其の時を識らん

というフレーズが見られ、ここに遇不遇に甘んじるしかないとする（時勢・天道は推し量り難い）彼の運命観・禍福観を垣間見ることができる。その後、梁の懷王の太傳となるが、懷王が落馬して急逝し、賈誼は自らの責任を感じ、しばらくして三三歳で死亡する。

以上が『史記』賈誼列伝の概略である。では次に、陸が詩中に賈誼を詠み込んだ四首を見ていきたい。

## (2) 追懷

まず『咳声余韻』に収録された「追懷」から見てみたい。

追懷往時更堪驚 往時を追懷すれば更に驚くに堪えたり

十有九年何所成 十有九年 何の成す所ぞ

松歴雪霜初識勁 松は雪霜を歴て初めて勁きを識る

鉄非鍛鍊難看精 鉄は鍛鍊するに非ずんば精を看難し

春風歌吹海中興 春風 歌吹 海中の興

落月関山夢後情 落月 関山 夢後の情

志業嘗無治国策 志業 嘗て治国の策なし

愧他洛水一書生 愧づらくは洛水の一書生に

二句目に「十有九年」とあることから、陸が一九歳すなわち明治七年の作であることがわかる。宮城師範学校を

退学して上京した年である。八句目の「洛水一書生」が賈誼をさす。七句目に「志業 嘗て治国の策なし」とあることから、陸自らが賈誼にも及ばないことを恥じるとの詩意である。

### (3) 賈生

次の「賈生」も『咳声余韻』に収録されたものである。

青年楽事須相欽 青年 楽事 須らく相欽ぶべし

漢帝恩深遠放臣 漢帝 恩深く 遠く臣を放つ

可是長沙不無酒 長沙 酒なきにあらざるべきも

如何却学独醒人 如何ぞ却つて独醒の人を学ぶ

詩題が「賈生」であるから賈誼を詠んだものであることは明瞭である。とりわけ賈誼が長沙に左遷された後を詠み込んだ三・四句目に「独醒の人」とあるのが注目に値する。これは『楚辭』の「漁父の辞」をモチーフとした語であり、酔っている世俗に対し「独り醒めている」屈原に陸は賈誼のみならず自らをもオーバーラップさせている。司馬遷が屈原と賈誼をセットで列伝を編んだことから明らかなように、戦国末期 楚の国において秦国の危うさを説きながら、逆に放逐され自殺した屈原は、賈誼と近似した状況下にあつて苦悩していた。屈原と賈誼は同じベクトル上にあると司馬遷は判断し、そのベクトル上に陸は自らも置いたということである。

### (4) 登嶽 (三)

次は『踏雲余踪』に収められた「登嶽六首」の(三)である。陸が富士山に登ったのは明治十一年。二十一歳のことである。

千峰万壑望中開 千峰万壑望中に開く

何事壯觀感忽催 何事の壯觀ぞ感忽ち催す

太史夙懷跋涉志 太史 夙に懐く 跋涉の志

賈生未試經綸才 賈生 未だ試みず 經綸の才

海吞日月冥濛暮 海は日月を呑みて 冥濛として暮れ

風憾乾坤蓬勃来 風は乾坤を憾<sup>ゆるが</sup>して 蓬勃として来る

埋骨青山何処好 骨を埋むる青山 何の処<sup>いづれ</sup>か好からん

巖頭極目意悠哉 巖頭極目 意悠なるかな

対句を形成している三・四句目で司馬遷（太史）と賈誼が並列で登場している。「跋涉」とは各地を歩き回ることの意味し、二〇代の始めに司馬遷が全国を經巡って知見を広めたことをさしている。一方、賈誼の方は獻策がなかなか日の目を見ない状況を詠んでおり、後に知見を『史記』において結実させた司馬遷と対比させている。後者の賈誼の姿に陸が自らを見ていたことは言うまでもない。

(5) 失題 (二)

『詩集拾遺』に収められた「失題二首」の(二)に賈生が登場する。本詩は明治一三年、陸二三歳の作である。明治一二年に司法省法学校を退校して帰郷し、地元の青森新聞社に入社したが、翌一三年に退社。そして紋別の製糖所に勤務し始めた年である。

布衣憂国感難禁 布衣 国を憂えて 感 禁じ難し

塵途多年甘陸沈 塵途 多年 陸沈に甘んず

廊廟不知賈生策 廊廟 知らず 賈生の策

江湖誰解伯牙琴 江湖 誰か解す 伯牙の琴

果然人事如雲薄 果然 人事 雲の如く薄し

未報君恩似海深 未だ報ぜず 君恩 海の深きに似る

坎壈此生空有志 坎壈 此の生 空しく志あり

每逢歲晚獨傷心 歲晚に逢ふ毎に 独り傷心

二句目に見える「陸沈」は『莊子』則陽篇に見える隱者を表す語句である。『莊子』の陸沈する者は世を避けて自らの意志で隱者となつた者をさし、決して不本意ながら甘んじるものではない。しかし、陸は「陸沈」を不遇の一表象として捉え、賈誼と伯牙を三・四句で導き出している。賈誼と、知音を失つて琴の弦を断つた伯牙を並列に置き、「知らず」「誰か解す」と詠んだ陸は、二人を理解者に恵まれず陸沈した者と解している。もちろん賈誼・伯牙は陸自身であることは言うまでもなく、七句目の志を得ないで不遇な様をさす「坎壈」という語がそれを証明している。

伯牙に関連して一つ補足しておく、伯牙は『咳声余韻』の「不如意行」にも登場する。この四六句にわたる長古詩は冒頭に

不如意又不如意 不如意 又不如意

不如意者滿天地 不如意は天地に滿つ

と詠んで、二七・二八句目に

休笑季子受嫂嘲 笑ふを休めよ 季子の嫂の嘲を受くるを  
大魚失水被蟻制 大魚も水を失へば蟻に制せらる

とあり、三五・三六句目に

卞和献珠却招冤 卞和は珠を献じて却つて冤を招き

伯牙弹琴人不聞 伯牙は琴を弾くも人聞かず

とあつて、卞和と対で詠み込まれている。卞和については『韓非子』和氏篇に説話があり、玉の原石を王に献上した所、ただの石にすぎないと鑑定され、足切りの刑に処せられた人物である。二度にわたつて玉の原石を石と鑑定された卞和は両脚の自由を失い、三度目に至つてようやくやくそれが玉であることを認められたという故事である。理解者に恵まれない者という位置づけにおいては伯牙に等しい。理解者に恵まれない事による不遇（不如意）であり、それが陸の自己理解であつた。

陸にとつて賈誼は「憂国」「孤独（理解者がいない）」「陸沈」「不遇」であつた。薩長を軸に時勢が動いている当時にあつて、弘前出身の陸はある程度先が見えていたであろう。とすれば、陸が志す「治国」「経綸」は、その策をいかに発信し得るかという点に視点が及びつつあつたのではないか。このことは明治一五年以降、彼の詩に賈誼が登場しないこともその一証とならう。

### 三 陸の薩長観

本節では陸を自らは不遇であると認識せしめた時勢、とりわけその時勢を形成していた薩長に対してどのような



認識していたのかを見てみたい。特に陸の薩長観が明瞭に現れている「戊辰懷古」と新聞『日本』掲載の「長州藩閩」「薩材」「長材」の三記事を取り上げる。

### (1) 戊辰懷古

戊辰戦争の時、陸は一一歳であったから、彼自身が抗って敗者となったわけではない。にもかからわず彼は敗者として生きることを運命づけられていた。『詩集拾遺』に収められた本詩は「懷古」とあるように、後に詠まれたものであり、作詩年は不明である。以下三段に分けて見ていく。

時窮君運方在屯 時窮して君運 屯に在り

乘馬班如有淚漣

乘馬 班如 涙の漣するあり

孚窒乾坤無攸適

孚 窒がりて 乾坤 適く攸なし

闔厄不利涉大川

闔厄 大川を渉るに利しからず

まず一句目「時窮して君運 屯に在り」と三句目「孚窒がりて 乾坤 適く攸なし」とは、ともに『周易』の卦を典故とするものである。屯(䷂)は「生みの難」を示すとも言われ、草創期の不安定な時の艱難の状態をさす。二句目の「乘馬 班如 涙の漣するあり」は屯卦の上六「乘馬班如たり。泣血漣如たり」を踏まえており、その行くことの困難を示している。また三句目は訟(䷅)の卦辞「訟は孚あれども窒がる」とあるのに基づく。訟卦は文字通り訴訟を言うものであり、四句目の「闔厄(ふさがり苦しむ)」と合わせて、至誠の心がありながら、それが抑えられてうまくいかない状態をさす。この冒頭の四句で戊辰戦争時の幕府や東北諸藩の軍の立場を表現している。

儒生焚冠握兵權 儒生焚冠兵權を握る

燕趙壯士元貔貅 燕趙の壯士元 貔貅ひまゆう

採旌提戟擁君前 旌を採り戟を提げ 君を擁して前すむ

一敗東走邯鄲陷 一敗東走し邯鄲陷る

羽林八方似羊眠 羽林 八方 羊の眠るに似たり

山東豪傑多解体 山東の豪傑 多く解体す

函谷関外春如煙 函谷関外 春煙の如し

花落鳥啼無人見 花落ち鳥啼き 人の見るなし

誰憐宗国将亡年 誰か憐れむ 宗国の将に亡びんとする年を

猶有魯人守礼義 猶ほ魯人の礼義を守るあり

絃誦嬰城志益堅 絃誦 嬰城 志益ます堅し

老幼皆奮婦人炊 老幼皆奮ひ 婦人炊ぐ

山河百戰骨血殫 山河百戰 骨血殫みなまぐさし

王師難抗枉撤壘 王師 抗し難く 枉げて壘を撤す

皇恩僅使社稷全 皇恩 僅かに社稷をして全からしむ

続く五句目から二〇句目までは、中国の歴史を詠みながらも、戊辰戦争の局面にオーバーラップさせている部分である。「燕趙」「邯鄲」「羽林」「山東」「函谷関」「宗国」などの語は、すべて戊辰戦争時の状況に置き換えることができる。ここで注目すべきは五句目の「周罔 解紐 群鹿走る」であり、これは前漢末期の文人揚雄の「解嘲賦」を典故とする。「解嘲賦」は揚雄がなかなか頭角を現すことができなかつた時期に、ある人がそのことを揶揄したこと反論するという内容であり、当該部分は周王朝が倒れて、その統制がきかなくなり（解紐）、群雄（群鹿）

が割拠し始めたとする一文である。揚雄の主意は、時代において出現する（名声や高位を得られる）人物は種類が時代によって異なるという点にあり、さらにはそれを見出す人材の重要性も説く。揚雄は頭角を現すには、これらの条件（時勢や見出す人）が必要であり、それを得た者が名声や高位を得られるとし、それを「当」「時」「適」「得」「宜」という五つのキーワードで示している。

回首恩讎両如夢 首を回らせば恩讎ふたながら夢の如し

滄桑十三驚物遷 滄桑十三物の遷るに驚く

予今懷旧罔由訴 予今旧を懐へども訴ふるに由なし

杜鵑一声雲滿天 杜鵑一声雲天に滿つ

そして二二句目から二四句目で視点を移し、特に最終句の「杜鵑 一声 雲 天に滿つ」は雲井龍雄の「棄児行」の最終句「残月 一声 杜鵑啼く」を想起させる。しかも杜鵑の属性も雲井のそれに均しく、哀訴という範疇のものである。

## (2) 「長州藩閥」「薩材」「長材」

次に補足として陸の薩長に対する意識を『日本』の社説から見てみたい。取り上げるのは「長州藩閥」（明治二四年六月一六日）・「薩材」（同年六月一九日）・「長材」（同年六月二〇日）の三本である。近接した日付の記事であるから、この三本は一つのまとまりを持つものと考えてよからう。

まず「長州藩閥」の中ほどにおいて

夫れ長州人士は封建の世に於て説の代表者と為り、以て幕府の征伐に抗し、明治の世に至るも猶ほ藩閥政の代

表者と為りて、以て民間志士の攻撃に当れり。情実政治を増養して百弊の源を成したる罪は免れ難しと雖も、明治政府に立ちて二十年間公然事務局の衝に当りたるは、功罪相償ふものと見做すに足るものあり。

と言ひ、さらに「長州藩閥は既に政局の表面を退きたり」「是れ長州藩閥は唯だ表面を去るのみ」と言つて、その力が依然として健在であることを示唆している。

一方「薩材」においては

薩材の良は曾て南洲に殉じて九州に亡ぶ。其の存する者は則ち幾ばくも無し。

と言つて、西南戦争以降、人材の質が低下したと譏り、さらに「長材」においては「長材薩材漸く既に用ゐ尽して將に余す所無からんとす」と言ひ、長州は「常に之を型式の得て却つて之を精神に失ふ」と言ひ、「長材は頗る多く失敗せり」とまとめてゐる。

いずれにせよ、陸にとつては薩長ともに維新期の功績は認めるものの、もはや人材も枯渇し、それでも政権の座にしがみついている存在にしか見えなかつたようである。注目すべきは新聞紙上におけるこの忌憚なき薩長批判であり、明治一〇年代における陸の萎縮した姿は、ここには見られない。『日本』という発信の場を得た陸は、当時自らを賈誼に比すという思いには至らなかつたであらう。

## おわりに

本章では陸羯南の前半生の詩想を、賈誼へのシンパシーという視点から論じた。それは明治期において東北出身者であるが故の経験に結び付けられたものであつた。そして賈誼は伯牙・卞和・屈原・司馬遷・揚雄などへと波及

し、前半生における陸詩の一つの特徴を為すようになった。この自らが置かれた状況に怨嗟の声を挙げたグループ（伯牙・卞和・屈原・司馬遷・揚雄）は、少なくとも本書でここまで取り上げた志士たちの漢詩には登場しなかった者たちであった。明治という時代、即ち幕末期の混沌とした騒乱の時期の中から勝者と敗者が顕在化し、その勝者によって安定化が進む中で、敗者らの心情が吐露されていた時代の所産であったと言えよう。

\* 1 靈鳥。君子をさす。

\* 2 伏し隠れること。

\* 3 逆方向に引かれること。

\* 4 さかさまになること。

## 第9章 安井小太郎『明治中興詩文』について

### はじめに

本章では、幕末から維新に至る時代を、明治末期から大正初期にかけて如何に位置づける試みがなされていたのかを『明治中興詩文』（大正七年）という一冊の教科書から考えてみたい。この教科書は幕末期に三計塾を開き数々の人材を輩出した安井息軒（一七九九〜一八七六）の外孫、安井小太郎（一八五八〜一九三八）が編纂したものである。この書の偶数頁右端に「漢文講義録」と記されていることから、安井が明治四〇年より務めた第一高等学校教授時代の講義ノートを整理したものと考えられる。

幕末維新时期を経て明治の中興と言う場合、一体どのような認識のもとに「中興」という概念が使用されているのか。また、安井小太郎にとって幕末維新时期とは、いかなる時代であったのか。とりわけ、彼が生まれた一八五八年は安政五年にあたり、彼にとって幕末は明確なビジョンをもって体験された時期ではない。そこには、彼が後に学んだことや理解したこととの整理が行われ、彼なりの維新観が背景としてあるはずである。

生きた時代精神は、振り返られ、整理され、まとめ始められた時、一心の完結を見て、次代へと移行する。幕末・明治期の志士たちや知識人たちが、まさに維新という変革期に詠んだ生きた漢詩は、たとえるならばホルマリン漬けとなり、明治末期においてまとめられ整理し始められる。祖父に安井息軒を持ち、洋学派が台頭する中で伝統的漢学を学び、講義ノートが後に『日本儒学史』としてまとめられるほどの見識を兼ね備えていた安井小太郎は、まさに志士たちの漢詩のまとめ役としては適任者であったと言えよう。『明治中興詩文』という小冊子が、安井小太郎の業績の中でどれほどの価値を持つかはともかく、幕末維新精神史理解の一助となることだけは疑いない。

# 一 『明治中興詩文』について

## (1) 概要

まず安井小太郎の経歴について簡単に触れておくと、安井小太郎は、息軒の長女須磨子と中井貞太郎との間に生まれた。父貞太郎は所謂勤王の志士であり、文久二年六月、幕吏に捕らえられ獄中死している。一時宮崎へ移った後、息軒の三計塾、島田篁村の雙桂精舎、二松学舎、草場船山の敬塾、東京大学古典講習科甲部等で学び漢学の研鑽を積んでいる。

さて、『明治中興詩文』は大正七年一月一五日、大日本漢文学会より出版された本文一六六頁の印刷物である。代表者服部宇之吉、編集者安井小太郎となっている。刊記には漢文講義録第二号とある。

『明治中興詩文』の表紙には第一高等学校教授との肩書きがついている。また安井と服部の両者は『漢文大系』(富山房)を大正五年に発行し終えており、二人は『漢文大系』の編纂と同時に、あるいはその完結直後に取りかかり本書を発行したものと思われる。

さて、この書の核となる安井小太郎の序言から見てみたい。

徳川幕府の季世に当り、内憂外患交起り一步を誤らば国家の存亡に關する状勢となりしを以て、頼朝以来抑屈せられし国民の元氣は勃然として発動し、王公士大夫より閭媛、方外の人人まで、邦家の前途を憂へ、寢食を忘れて死生の間に出入する者幾百人なるを知らず。戊午の党獄となり、桜田の変となり、人人文文山・楊椒山を以て自ら期し、邦家を維持し皇室を尊嚴にする外は、一毫も利害得喪の念なかりき。文文山の所謂時窮して節乃ち見はるる者乎。是を以て竟に能く将家七百年不拔の權柄を収め、皇室大政一新の不業を開く。其の功偉なりと云ふべし。而して其の慷慨悲憤の志発して歌詠となるもの、字字血涙の感あり。以て懦夫を起

たしめ貪夫を廉ならしむるに足る。是において、文化文政以後国事に関する詩文若干首を輯め、題して『明治中興詩文』と謂ふ。唯其の精神を披瀝し人心を感動せしむるに足るを取る。措辞の巧拙・格法の諧否は論ずる所にあらざるなり。亦以て風化を裨補し、頽勢を挽回するに幾からん乎と云爾。(『明治中興詩文』序言)

注目すべきは「頼朝以来抑屈せられし国民の元氣……」「皇室を尊嚴にする」「皇室大政一新の丕業を開く」等の語に明らかのように、安井が中興を「皇室の復権」という意識のもとに論じていることが伺える所にある。そしてこの視点に基づいて、安井における中興が一連の所謂明治維新に他ならないことが理解できる。これは『明治中興詩文』の最後に収録されている平野国臣の「偶成」の「字義」の項に続けて次のような後序に相当する文が見られることから明らかである。

明治中興詩文は、中興に関したる志士の作を紹介せん考を以て、安政の大獄より銀山迄を叙し来りしが、講義録終結の期となりたるを以て、姑く此を以て終を告ぐ。此の以後筑波山の挙・禁門の変・奇兵隊の事などありて、伏見・会津・五稜郭にて維新の大業成就せり。

この文と目次に連ねられた詩文とを考え合わせれば、安井にとつての明治中興とは、戊午党獄・桜田の変から伏見・会津・五稜郭へと至る維新の一連の流れをさしていることが理解できる。

また茅根伊予之介が後醍醐天皇を詠んだ「詠古」の「余論」の部分には、次のようにある。

此の詩は直接時事に關した詩ではないが、作者勤王の心深かりしを知る事が出来るから、中興詩文の中に入れて事にした。



このことから、安井が基本的には志士達の時事を詠んだ詩を編集の対象としていたことを理解することができる。と同時に「勤王の心」というもう一つの大きな柱がこの『明治中興詩文』の編纂意図であったことが了解せられる。

## (2) 構成

『明治中興詩文』の目次は次の通りである（原書のまま。ただし各章のタイトルには傍線を引いた）。

### 序言

戊午党獄 茅根伊予之介

### 詠古

○梅田雲濱

獄中作 頼三樹三郎

### 過函嶺

獄中作 橋本左内

元旦 梁川星巖

松堂間部侯上京師因録漫言廿五篇以呈下執事附以二十絶句

### ○僧月照

○吉田松陰

癸丑十月朔拜鳳闕肅然作之時余將西走入海

上家大人王叔父家大兄書

肖像自贊并序

殉難前の遺書

桜田の姿

懷中封書

別紙

○関鉄之助

冬夜獄中謾吟

被縛將歸郷国即得一絶

○斎藤監物

大森ノ会飲同諸友賦

題兒島高德書桜樹

絶命祠マ

絶命詞

○蓮田市五郎正実

七日夜夢与母賞花於庭前樂甚矣已而寤不覚血淚万行因賦一詩

囚居雜詠

聞隅田川花盛開

下門之姿

織部正

逸題 大橋順藏

逸題

獄中作

逸題 河本杜太郎

絶命詞

獄中作三首 児島強介

又

又

弔関士任 小山弘

送諸子東行

就囚

獄中病疫

寺田屋事件

○西郷隆盛

聞下田開港

読横浜会盟載書憤然而賦

又

弔月照上人

失題

又

失題

沖永良島謫居中作

等持院事件

下獄途中作

獄中雜作

- 同 同 同  
七卿都落  
失題 久坂義助  
入京師  
無題  
辰作 桂小五郎  
失題 同人  
大和義拳  
於久能山 松本謙三郎  
失題 安積五郎  
劍舞謡  
○伴林六郎  
失題  
生野銀山ノ義拳  
○平野次朗  
失題  
偶成

戊午党獄（安政の大獄）を冒頭に据え、以下榎田の変・坂下門の変・寺田屋事件・等持院事件・七卿都落・大和

義拳・生野銀山の義拳と項目が立てられている。ここに安井の中興の発端を戊午党獄にあるとする認識をうかがい知ることができる。あるいは、安井の父貞太郎が文久三年（一八六三）に獄中死したこともこの設定に影響しているかもしれない。

さて、この書で取り上げられるそれぞれの事件に対し、安井の詳細な事件の状況説明がなされる。概ね史実の伝達に終始しているが、ここで戊午投獄の例を以下に示しておく。

是れ幕府の一大蹉跌なり。将来幕府が違勅の大罪を受け千歳ちとせ拭ぬぐふべからざる汚名を蒙りしは此の一事に原因す。

名士捕縛、朝旨沮礙そがいの論天下に充ち、攘夷勤王の外に、清議を無視する非難を添へ来たりて、幕府批政\*14の聲は囂囂ごうごうたり。幕府は其の煩に堪へず、又威を以て之を鎮圧せんとし、……。

此の時慷慨気節の士にして厄にかかる者極めて多く、幕府の事愈いよいよ為すべからざるに至れり。

安政の大獄を「幕府の一大蹉跌」とし「大罪」とする所に安井の時代認識をうかがい知ることができよう。

## 二 詩文に見られるモチーフ

本節では『明治中興詩文』に収められている詩文、及びそれぞれの詩文に付せられている安井の「訓読」「字義」「大意」「講義」「余論」、とりわけ「講義」「余論」をもとに、安井の維新観、ひいては明治期における時代認識の一端を探る。紙数の都合上、全詩文を紹介することはできないため、安井がこの書において採用した詩文が多く用いるモチーフを手がかりとして考証を進めていく。これについては本書の序章において、当時の知識人達は教養の

基盤が共通していたため、漢詩で自らの詩想を表現する場合、詠み込まれるモチーフの共通性が極めて高いと述べたことに基づく。つまり当時の知識人たちは、中国の思想・文学・歴史の古典を共通語としてもに有し、その枠の中で相互の詩想を理解し、心情を認識し合っていたことの検証である。

本節で中心に取り上げるのは幕府を示す諸モチーフ、獄中にある者を象徴する文天祥、そして中興の原動力ともいえる勤王である。

### (1) 幕府

まず、収められた詩中から幕府・志士・時代、それぞれが如何なるモチーフを以て語られているかについて考えてみる。

安井にとって、幕府及び戊午党獄の中心人物であった井伊直弼が否定されるべき存在であったことは採用されている詩文を見れば明確であり、それは幕府・井伊を暗示する語句が如実に示している。以下にそのいくつかを例示しよう。

長鯨横海驕 長鯨海に横はりて驕りよこした おご

妖氛蔽日昏 妖氛日を蔽ひて昏しおほ くら

奈何春秋義 奈何ぞ春秋の義いかん

拳世付空論 拳世 空論に付す

(茅根伊予之介「安政己未四月廿六日。……」\*15)

茅根は水戸藩士で安政の大獄に斬首された人物である。ここでは黒船に象徴される諸外国を「長鯨」と呼び、幕府(あるいは井伊直弼)を「日(天皇)」を蔽う「妖氛」として詠んでいる。

排空欲手掃妖燐 空を排して手に妖燐を掃はんと欲す

失脚墮来江戸城 失脚 墮ち来る 江戸の城

井底痴蛙過憂慮 井底の痴蛙 憂慮に過ぎ

天辺大月缺光明 天辺の大月 光明を缺く

身臨鼎鑊家無信 身は鼎鑊\*16に臨みて家に信なく

夢斬鯨鯢劍有声 夢に鯨鯢を斬りて劍に声あり

風雨他年苔石面 風雨 他年 苔石の面

誰題日本古狂生 誰か題せん 日本の古狂生

(頼三樹三郎「獄中作」)

頼三樹三郎は頼山陽の第三子であり、佐藤一斎や梁川星巖に学んだ碩学でもあった。安政の大獄において斬首されてい。詩中の「井底の痴蛙」「天辺の大月」はともに幕府をさしている。幕府が月に喩えられる場合、天皇が太陽となり、両者を日月(陽と陰)とみなす例は他にも見られる。

不信天西氣稜熾 信ぜず 天西\*17 氣稜\*18 熾\*18に

妖鯨翻海欲揚塵 妖鯨 海を翻へして塵を揚げんと欲するを

(梁川星巖「元旦」)

勢孤大樹支難得 勢孤にして大樹 支へ得難し

運去万牛挽不回 運去れば 万牛挽けども回へらず

(梁川星巖「松堂間部侯上京師、……」)

当年乃祖氣憑凌 当年 乃祖氣憑凌<sup>\*20</sup><sup>\*21</sup>

叱咤風雲捲地興 風雲を叱咤して地を捲いて興る

今日不能除外讐 今日外讐を除くあたはずんば

征夷二字是虚称 征夷の二字は是れ虚称

(梁川星巖「紀事」)

梁川は美濃の人。尊王攘夷派の志士として活動し、安政の大獄が発動される直前に病死した人物で、山本北山に漢詩を学び、吉田松陰や春日潜庵らと交流があった。

呼狂呼賊任他評 狂と呼び賊と呼ぶも他の評に任ず

幾歳妖雲一旦晴 幾歳の妖雲 一旦に晴る

正是桜花好時節 正に是れ桜花の好時節

桜田門外血如桜 桜田門外 血は桜の如し

(黒沢忠三郎「絶命詞」)

黒沢は桜田門外の変に参加した水戸藩士である。したがって、ここの「妖雲」は大老の井伊直弼をさす。井伊暗殺によって数年来の「妖雲」が「晴」れわたったとの詩意である。

それぞれの詩において幕府は「天辺大月」「大樹」といった語で形容され、巨大で動かし難い存在でありながらも、今ではもはや「長鯨」「妖鯨」「海怪<sup>\*22</sup>」「鯨鯢」「氣稜」と比喩される諸外国の前には無力の存在であったとされる。吉田松陰の「神州の正気既に已に邪気の消融する所となるか」(「上家大人玉叔父家大兄書」)も同旨である。梁川の「今日外讐を除くあたはずんば、征夷の二字は是れ虚称」という詩句はまさにその直接的な表現と言えよう。そ



してそのような状況下でもがきながらも弾圧を続ける幕府・井伊を「井底の痴蛙」であると表現し、幕府・井伊を「妖氛」「妖燐」「邪氣」「妖雲」と評している。

このほか、「日本の古狂生」「狂と呼び賊と呼ぶも他の評に任す」という「狂」に関する詩句も見られるが、これについては第三節(1)で詳説する。

## (2) 文天祥

安井の序文にも見えた文天祥は、志士たちの精神的支柱であったと言ってもよい。これについては、序章の二においても取り上げ、「自らの節義を全うした人物」「不屈の精神の象徴」と位置づけた上で、藤田東湖・雲井龍雄・吉田松陰・高杉晋作らの詩について論じた。文天祥をモチーフとした漢詩の用例は、戊午投獄の中では橋本左内の「獄中作(その二)」、茅野の「安政己未四月廿六日。……」に見られ、安井も橋本の「獄中作(その二)」において詳細に文天祥について論じている。以下にその「字義」「大意」「講義」を示してみる。

二十六年如夢過 二十六年 夢の如く過ぐ

顧思平昔感滋多 顧みて平昔を思へば 感ま滋まます多し

天祥大節嘗心折 天祥の大節 嘗て心折す

土室猶吟正氣歌 土室 猶ほ吟ず 正氣の歌

(橋本左内「獄中作(その二)」)

「字義」天祥大節・宋末の忠臣文天祥の事。宋が元の為に滅ぼされる時に、文天祥は節操を守りて元に降らなかつた。元では之を降させようとし、今の北京につれて行き、土牢の中に入れて置くこと三年なりしが、天祥は屈せずして正氣歌を作つて従容として死を待つて居た。元も天祥の忠義に感じて、殺す迄の考かんがはなかつたが、或

人が天祥を獄より奪ひ、之を奉して宋朝の回復を謀らんと為たので、死刑に處せられた。……。

「大意」此の詩は獄中にありても文天祥の大節を学び平生修養の不足なるを補はんとこの意を叙したるなり。  
……。

「講義」自分は早や二十六歳となったが、此の歳月は何を為すと云ふこともなく、夢のように過ぎて仕舞った。それ故過去の平生を回顧すると、一層感慨が多いのである。（我が学問修養の不足なりしを歎ずる意）昔し宋に大節を完うしたる文天祥と云ふ人あつて、其の大節には平生から感服して居たがそれは何の為かと云へば、土牢の中に居ながら、従容として正氣の歌を吟じて居たからである。故に今余も主君の為に身を捧げて、獄中の人となつて居ても、天祥を学んで今日迄の不足を補ひたいと思ふ。

橋本は福井藩の医師であつた。安政の大獄において捕らえられ処刑されている。その獄中において詠んだ詩であり、「天祥の大節」を思い「正氣之歌」を吟ずる様が記されている。

また児島強介の次のような詩も採用されている。

愛読文山正氣歌 愛読す 文山正氣の歌

平生所養顧如何 平生の養ふ所 顧ふに如何と

従容唯待就刑日 従容 唯待つ 刑に就く日

含笑九原知己多 含笑す 九原<sup>\*23</sup> 知己の多きに

（児島強介「獄中作（その三）」）

児島は下野の人で、坂下門外の変に関わった一人である（病気のため決行には参加できなかったが、捕縛され獄中にて死亡した）。ここでも「正氣之歌」を吟じて自分を文天祥とオーバーラップさせ、文天祥の如く従容として処刑の日を待つという詩意が表現されている。

このように文天祥は獄中にある志士たちに詠まれた漢詩に頻出し、「節操を守る」「不屈」「従容として死を待つ」「忠」「大節を完うする」といった属性を持つものとして使用される。このほか「正氣之歌」を典故とした詩句などは枚挙に暇がない。

### (3) 勤王

さて、本節において最後に言及しておかねばならないのが、所謂尊王思想を伝える詩文の選定、或いは解説が目につくことであろう。まず先に示した資料で「作者勤王の心深かりしを知る事が出来る」と評された茅根伊予之介の詩から見てみたい。

欲雪王家歴世差 王家歴世の差はちを雪すすがんと欲し

皇風不競幸西州 皇風競はず 西州に幸す

夢夢豈無天定日 夢夢 豈に天定の日なからんや

漁舟一夜為龍舟 漁舟 一夜龍舟\*24と為る

(茅根伊予之介「詠古」)

この詩を選定した安井の勤王思想は注目に値する。まずは武家政権の時代を「王家歴世の差（「字義」頼朝以来、武家の為を受けたる朝廷御代代の恥辱）」と称し、「天定の日（「字義」悪人の勢が衰へて、正しき道理の行はれる時）」を希求するという主意である。加えて「漁舟 一夜 龍舟と為る」は、後醍醐天皇が流された隠岐の島から伯耆の名

和の港へとのがれた故事を踏まえている。

先に言及した「余論」における「勤王の心」に関する発言の外、「大意」の部分には、「天下の志士は幕府の威力に恐れずして、尊王の大義を心とすべしとの意なり」といった同質の論も見える。

また頼三樹三郎の解説部分には、評定所で彼が述べた台詞がそのまま引用してある。

我尊王攘夷の朝旨を奉じ、同志と謀る所ありしは、父祖相伝の家訓なり。朝旨に負くものは之を賊臣と云ふ。我不肖と雖も家訓を忘れ、賊臣となる能はず……。

この他、同じ頼三樹三郎の項の末尾部には「三樹三郎、又国風を善くす」とあって、

我が罪は君が代思ふまごころの ふかからざりししるしなりけり

という和歌が示されている。

さらに次の日下部伊三次の詩も同様の視点に立って選定されたものと言える。所謂神武東征神話<sup>\*25</sup>が戊午の年であつたことに基づいて、同じ安政五年の戊午の年に皇室の側からの回天を期待するものである。

星斗闌干月満天 星斗 闌干月 天に満つ

書窓深坐不就眠 書窓 深坐して 眠に就かず

欲知世運隆興象 世運隆興の象を知らんと欲せば

神武東征戊午年 神武東征 戊午の年

(日下部伊三次「逸題」)

日下部は薩摩藩士で水戸藩への勅諭降下に関わった人物で、安政の大獄の際、子の裕之進とともに捕らえられ、獄中にて病死した。

また「報国」「報恩」といった形で勤王を伝える詩も選定されている。

報国丹心嗟独力 報国の丹心 独力を嗟き

回天事業奈空拳 回天の事業 空拳を奈せん

(斎藤監物\*26「題児島高德書桜樹」)

万死固其分 万死は固もより其の分

報恩更誰付 報恩 更に誰にか付せん

(茅根伊予之介「安政己未四月廿六日。……」)

成否元来是天耳 成否は元来是れ天のみ

欲留報国尽忠名 留めんと欲す 報国尽忠の名

(河本杜太郎「絶命詞」)

河本は越後の人で、坂下門外の変に参加した人物である。成果の有無は天命に帰属することが詠まれているから、「報国尽忠」の精神こそが重要であるとする河本の心情を読み取ることができる。

これらの資料に示される尊王思想の紹介、つまり茅根の後醍醐天皇の記述、日下部の神武東征神話の記述、「報国」「報恩」「尽忠」の記述等と、本書の背景となる明治末・大正初という時代を考え合わせると、次の様な本小冊子の成立背景を推定することができよう。すなわち明治二〇年代より興った所謂日本人論論争かまびすしき時代を背景

としているのではないか。特に後醍醐天皇や神武天皇の記述は、よく引き合いに出された論説であった。忠孝一体が説かれ、天皇の位置づけや臣民の位置づけが論じられていた時代である。また明治二三年に発布された教育勅語に対し、夥しい注釈書が出される時期でもあった。たとえば、井上哲次郎が『勅語衍義』（明治二四年刊）に示した所の「孝悌忠信の徳行」と「共同愛国の義心」などが当時の思潮の基調を為していたように思われる。もちろんこの書の成立背景のすべてをここに帰することはできないが、最も重要なポイントであろうと考える。

### 三 狂と丹心と孝と

では安井小太郎はこの書を教科書として講義するに当たり、何を学生たちに伝えようとしたのか。その一端を明らかにする手掛かりとなるのがこの書で再三取り上げられる「狂」「丹心（赤心）」「孝」という三つの語である。この三つの語のうち「狂」は高杉晋作の詩想を論じた際に、また「丹心（赤心）」は西郷隆盛の詩想を論じた際に、それぞれ言及しているので、それらを振り返りながら改めて論じていくこととしたい。

#### (1) 狂

先に筆者は第2章の中で、「狂者」について、『論語』『孟子』『伝習録』『講孟余話』などに基いて「決して背徳的なイメージではなく、高い志をもって、妥協することなく、己の信ずる所を行う者」「良知のままに実践する主体」「世俗の声に左右されることのない一者」「乱世（危機的時代）において道を行い得る者」と定義づけ、その対極にある生き方「儉生（生を儉む）」にも言及した。

この書において注目すべき点として、安井の「狂生」観がある。先章でも示した頼三樹三郎の「獄中作」の第八句に見える「古狂生」に付された安井の「字義」から見てみる。

風雨他年苔石面 風雨 他年 苔石の面

誰題日本古狂生 誰か題せん 日本<sup>の</sup>古狂生

(頼三樹三郎「獄中作」)

「字義」狂に二義あり。一は通常用ふる氣違のと、一は意志の強い理想の高い、周囲の事情に構はずして、我が信ずる道理を實行する人を云ふ。論語・孟子等にある狂は是なり。高山彦九郎の如きは後者に属す。古狂生とは昔人の謂ふ所の狂生と云ふ意にて幕府の時代に尊王論を主張するは、狂者の行なるを以て、自ら古狂生と称したるなり。

ここで安井は「狂者」を「意志の強い理想の高い、周囲の事情に構はずして、我が信ずる道理を實行する人」と位置づけ、さらに尊王論者であり寛政の三奇人の一人でもある高山彦九郎を例として挙げている。幕末期の志士たちは、尊王思想を軸にまとまりを見せていた。したがって、彼らにとって高山はその場合における精神的支柱であり、これも志士たちの漢詩に尊王の象徴(代名詞)としてよく登場するモチーフとなる。たとえば寺田屋事件において死亡した薩摩藩士有馬新七は「今高山」と呼ばれ、西郷隆盛が流刑中に呼んだ詩中には「高山」「有馬」「尊王」のトリプルイメージで表現されていた。

この書に掲載された詩の中で、この「狂」をモチーフとしたものは多く、戊午党獄の段では吉田松陰の「肖像自賛并序」にも多くを説明している。

人は狂頑を譏り郷党は衆容れず。身は国家に許し死生吾れ久しく斉しくす。至誠にして動かざるは古より未だ之れあらず。古人は及びがたし聖賢敢て追陪せん。(吉田松陰「肖像自賛并序」)

「講義」世人は吾が事を氣違ひだの頑固者だのと云うて誹り、郷里でも衆人は吾を中間に入れて呉れないやうになった。然し吾はそんな事には構はない。何となれば、人の誹りや村の中間入などよりもっと大切な、死とか生とかの事さへ吾は之を同一の者と見て居るのであるから。世人の如く死を畏れ生を求めやうな卑怯な事は為ない。……君国の為に身命を捧げて死ぬのは、生にも増した光輝ある事と考へたるならん。……。

吉田の「至誠にして動かざるは古より未だ之れあらず」に明らかかなように、「動く」ことの原理として「狂」があったと言つてよい。すなわち「狂者」とは「行動できる者」に他ならない。

枉就幽囚還故郷 枉げて幽囚に就きて故郷に還る

姓名在世寧辭狂 姓名世に在り寧ぞ狂を辭せんや

(関鉄之助「冬夜獄中謾吟」)

関は水戸藩士で桜田門外の変に参加し、事件後各地を奔走・潜行したが、捕吏に探知され処刑された人物である。

呼狂呼賊任他評 狂と呼び賊と呼ぶも他の評に任す

幾歳妖雲一旦晴 幾歳の妖雲一旦に晴る

(黒沢忠三郎「絶命詞」)

第二節(1)でも言及した詩であるが、「妖雲」は井伊直弼をさし、ここで桜田門外での井伊襲撃は凶行であるから、当然非常識的な「狂者」「賊」の為せる「狂拳」となる。



疎狂憂国不憂身 疎狂 国を憂ひて身を憂ひず

忼慨會期救此民 忼慨 會て此の民を救はんと期す

(河本杜太郎「逸題」)

先の吉田の文にもあつた「国家」及び安井の「講義」の「君国」ともつながる「国を憂ひて身を憂ひず」という心情が記されている。さらに安井は「疎狂」に対して「考が疎大で意思の強いこと」という「字義」を施している。

一笑椒山胡詮輩 一笑す 椒山・胡詮が輩

空将疏奏逆豪権 空しく疏奏を將て豪権に逆ふ

(児島強介「獄中作(その一)」)

ここに直接「狂」という文字はないが、椒山・胡詮\*28を笑うという態度は、もはや常識的な方法では解決できない所まで時勢が進んでいることの証であり、「狂者」による「狂拳」以外の解決策がないことを暗示している。この部分に安井は「講義」の中で、「昔し支那に楊椒山・胡詮など云ふ忠義な人が有つたが、今の予が決心に比較すると、笑ふべきである。何となれば、彼らは上奏の文などで、実権を有つて居る嚴嵩や秦檜に対抗して、之に逆うたからである。身命を以て当らずして、口舌文章などで豪権に逆ふの、迂闊なるを笑ひしなり」と述べている。これに関連して言えば、長州藩の久坂玄瑞が桜田門外の変を詠んだ「無題」に「又不見翟義敬業徒切齒(又見ずや、翟義・敬業徒らに切齒し)、胡詮椒山空憤死(胡詮・椒山空しく憤死せしを)」(『庚申草稿』)と同様のフレーズがある。当時よく使用されたモチーフであつたのであろう。

以上のことから考え合わせると、「狂」は決断力・行動力・実践力とも解せられ、これは吉田や高杉がそうであつたように、陽明学的な「良知」を背景とした「知行合一」などと関連するものであろう。そして各詩文に「国家」「君

国「[国]」の語が見られるように、それは公的な現場において、即ち「報国」の現場において発現させるべきものと考えてよからう。

(2) 丹心

筆者は先に西郷隆盛の詩想を論じた際にこれらについても言及し、西郷の詩では他者（「時情」「垢塵」「塵世」「人間虎豹群」）に翻弄され続けた西郷が、汚されまいとする自らの心を「氷心」「誠心」と言い、その心を「紅葉」「丹楓」と比喩し、「皓皓」「清」と形容していた。もちろん先に示した「狂」も、この「丹心」「赤心」あつての「狂」であることは言うまでもない。したがって直接表現するか否かは別として、「狂」の主張には当然の如く「丹心」も伴うことになる。

これらのモチーフが含まれる詩をいくつか列挙してみる。

丹心猶如火 丹心猶ほ火の如し

誓欲雪君冤 誓って君冤を雪がんと欲す

（茅根伊予之介「安政己未四月廿六日。……」）

仰不愧天寧愧世 仰いで天に愧ぢず 寧ぞ世に愧ぢんや

丹心如火亦明誰 丹心火の如きも 亦誰にか明さん

満山風雪吟懐豁 満山の風雪 吟懐豁し

正是従容就義時 正に是れ 従容 義に就く時

（関鉄之助「被縛将帰郷国即得一絶」）

報国丹心嗟独力 報国の丹心 独力を嗟なげき

回天事業奈空拳 回天の事業 空拳をいかん奈せん

(斎藤監物「題児島高德書桜樹」)

おおむね「丹心」と言う場合、それは君主・国家・天（正義）に対して言うことが多く、「忠」が念頭に置かれ、次に述べる「孝」と対を為しているように思われる。「公」と「私」それぞれの場面におけるあるべき姿と考えてよからう。

### (3) 孝

家を顧みない狂者の行為は、決して孝をないがしろにすることと同義ではない。狂の背景に丹心（赤心）があるならば、孝はもう一つの強調されなければならないテーマとなる。もちろん狂者として国事に奔走する以上、父母に不孝を働くことは回避できない。だからこそ、その思いだけは詩として残すことが重要なのだと志士たちは考え、安井もその点を強調する。

以下四つほど例示してみる。

妻臥病牀児叫飢

妻は病牀に臥して児は飢なに叫く

挺身直欲当戎夷

身を挺して直に戎夷に当らむと欲す

今朝死别与生别

今朝 死别と生别と

唯有皇天后土知

唯 皇天后土の知るあり

(梅田雲濱「訣別」<sup>\*30</sup>)

梅田は小浜藩士で、梁川星巖や頼三樹三郎、吉田松陰らと交流のあった人物である。尊王攘夷運動の中心として活動したが、安政の大獄において獄死した。

嗟余十歳喪父親 嗟余十歳父親を喪ひ

成立一仰慈母訓 成立一に仰ぐ慈母の訓

大義不成忠孝廢 大義は成らず忠孝は廢す

一生心事向誰陳 一生の心事誰に向つて陳べん

(蓮田市五郎「囚居雜詠」)

蓮田は桜田門外の変に参加した水戸藩士であり、文久元年に刑死している。

人生得失本悠悠 人生の得失本悠悠

奇変如斯亦曷憂 奇変斯の如きも亦曷ぞ憂へん

唯為北堂老親在 唯北堂老親の在すが為に

数行涕淚落難留 数行の涕淚落ちて留め難し

(小山弘「就囚」)

縦遇妻兒離別苦 縦ひ妻兒離別の苦に遇ふも

聖恩難已三千年 聖恩已み難し三千年

(小山弘「獄中病疫」)

小山は坂下門外の変に参加した下野国出身の文人である。決行の際には郷里にあつて期に遅れ、直接は参加できなかったが、幕吏に捕らえられた。後に釈放され明治二四年に没している。

いずれも父母妻子への思いと志士としての本懐との間に揺れ動く心情の吐露である。しかしここで述べられているのは志士であるがために父母妻子を捨てたことへの残悔ではない。志士であり狂者でありながらも、決して父母妻子を忘れない心根の提示である。というのも、いずれの詩も「妻」「児」「父親」「慈母」「忠孝」「北堂老親」に対応する語が「皇天后土」「大義」「人生の得失」「聖恩」といったより高次の概念であり、自らの現状が受け入れられているからに他ならない。安井が着目している点もここにある。<sup>\*31</sup>とするならば、狂者の正当性は本章第二節で述べた「忠」と本節で述べた「孝」によって保証されると考えることができる。

## おわりに

以上、論じてきたように、安井がこの書を通して若者たちに伝えたかったことは、「忠（丹心）」と「孝」を両輪とした「行動性（狂）」の主張であろうと考えられる。そしてこれを軸に「報国」「不屈」「赤心」「儉生」「文天祥」といったキーワードが付随していくと考えてよからう。

個々の志士たちの詩想へのアプローチでは見えてこなかったものが、こういった志士たちの詩文集という形をとったとき明確な形でその時代精神が顕在化してきたと言つてよい。

最後に本書から伺い知ることのできる安井の時代認識について簡単に言及しておきたい。同時代に著述された作品群なども参考にすれば、当時は明治期より続く知育徳育論争や西洋崇拜主義とそれに対立する国粹主義的動きなどがあり、西洋崇拜に付随する日本人劣等説に対抗するものとしての書、という位置づけも可能である。所謂明治中興が結果として漢学者によって維持されていた私塾や藩校の廃止をもたらし、洋学の台頭を促したというのは、いささか皮肉めいている。

いずれにせよ、この書はあくまで安井が学生たちに講じたものであり、単なる維新志士の漢詩文の紹介に止まらないことは一目瞭然である。そして、このことは安井が維新志士を単に歴史として伝えるだけでなく、その精神を次世代に伝えねばならないという思いがあったことを示している。

- \* 1 詳細な年表は『日本儒学史』の末尾部に存する。
- \* 2 島田重礼(篁村は号)が明治になって下谷に開いた塾。島田はのち高等師範学校、学習院の教授を経て、東京帝国大  
学教授となった。
- \* 3 明治一〇年に三島中洲が創設した漢学塾三松学舎。中国学・国文学の確立のための私塾。
- \* 4 草場船山が明治になって京都に開いた塾。安井は明治十一年(二十二歳)の時に塾頭となっている。
- \* 5 東京大学古典講習科については町田三郎氏に「東京大学「古典講習科」の人々」(町田三郎『明治の漢学』(研文出版)  
所収)がある。参照されたい。
- \* 6 以上の件に関する先行論文には以下のようなものがある。連清吉「安井軒息のこと」(東英寿・文部省科学研究費補  
助金07451004研究成果報告書『薩摩藩所蔵の漢籍に関する総合的研究』)、連清吉「安井小太郎覚書」(同上)、連清吉「安  
井小太郎の『日本儒学史』について」(九州中国学会報34)、町田三郎『明治の漢学者たち』(研文出版)。
- \* 7 ここでは普段政治や時勢に無関係な人々をさす。
- \* 8 文天祥(一二三六〜八二)。南宋末期の軍人・政治家。文山は号。元に捕らえられ、元に帰順するよう勧誘されたが、  
忠節を守って断り続け、処刑された。
- \* 9 楊繼盛(一五一六〜五五)。明代後期の官僚。直諫の士として知られ、アルタン汗の侵入に際し弱腰であった仇鸞を  
痛罵して罪を得、また巖嵩の十罪五奸を暴いて棄死となった。
- \* 10 立派な事業。
- \* 11 文化(一八〇四〜一七)年間と文政(一八一八〜二九)年間。

- \* 12 一二八八〜一三三九。建武の中興を実現し、天皇親政を開始した天皇。
- \* 13 妨げること。
- \* 14 悪政のこと。
- \* 15 安政己未四月廿六日。以幕府之命、与安島大夫及大竹儀兵、同抵評定所受審。此行禍殆不測。将出得詩二篇。乃把筆一揮。留以与児熊太郎。他日成立其有以知余之志也。時属天明、曉雲慘愴、杜鵑悲鳴、如訴冤者然。
- \* 16 釜ゆでの処刑用の釜。
- \* 17 天の西方のことで、清国をさす。
- \* 18 悪しき気。外国の勢力をさす。
- \* 19 松堂間部侯上京師、因録漫言廿五篇、以呈下執事。附以二十絶句。
- \* 20 徳川家康をさす。
- \* 21 強く盛んなさま。
- \* 22 梁川の「松堂間部侯上京師、……」に「皇上只要殲海怪（皇上は只だ海怪を殲さんことを要し）未曾一刻外関東（未だ曾て一刻も関東を外にせず）」とある。
- \* 23 冥界のこと。
- \* 24 天子の乗っている船のこと。
- \* 25 記紀に第一代と伝えられる神武天皇が、高天原から日向に降り、後に瀬戸内海を東に進んで難波・大和へと向かい、橿原宮で初代天皇の位についた神話をさす。
- \* 26 斎藤は水戸の神官で、桜田門外の変に参加し、重傷を負って後日吟味中に死亡した人物である。
- \* 27 高山彦九郎（一七四七〜九三）。江戸中期の尊王論者。上野新田郡の郷士。名は正之。彦九郎は通称。勤王の志あつく、京都に出て公卿の間に入り、また諸国を歴遊して勤王を提唱し、藤田幽谷とも交遊。幕府にその行動を監視され、九州久留米で憂憤のあまり自刃。奇行多く蒲生君平・林子平とともに寛政の三奇人といわれる。
- \* 28 椒山は注（9）既出。胡詮は南宋の人。宰相秦檜が外国と和親するのを諫めた人物。
- \* 29 翟義は前漢末の人で王莽に対し兵を挙げた人物、また徐敬業は唐の人で則天皇帝を排斥せんと乱を起こした人物である。ともに失敗し殺された。

\* 30 『明治中興詩文』には詩題の提示はない。参考として猪口篤志氏の『新釈漢文大系 日本漢詩（上下）』（明治書院）所収の同詩の詩題を提示しておく。

\* 31 さらに、孝と忠が天皇に向けて同じベクトルとして語られることもある。これについては、教育勅語によって明文化されるが、その端緒は既に水戸学において認められる。





## 終章

最後に本書の簡単なまとめを行った上で、残された課題・今後の展望等について論じておきたい。

### 一 各章の概説

最初に序章において、本書の時間軸・構造軸・アプローチ法などの基本的スタンスを示した上で、いくつかの用例（文天祥・遯卦・屈原・陶淵明・鳳兮之歌・杜鵑など）を例示し、全体の導入とした。

※

第1章から第5章までは幕末から明治一〇年の枠内で諸藩の志士たち（雲井龍雄・高杉晋作・水戸志士・武市瑞山・西郷隆盛）の漢詩を取り上げた。詩想として取り上げたのは、「隠逸」（雲井・西郷など）、「狂」（高杉・水戸志士など）、「公」「私」「忠」「孝」（以上、水戸志士など）、「権」（武市など）等、本書の根幹を為す諸キーワードである。

第1章では幕末の米沢藩士雲井龍雄の漢詩を取り上げ、彼の学識に基づく詠史詩を分析した。そして雲井が自らを比した藺相如・張良などから彼の政治家としての志向を明らかにするとともに、一方で屈原や陶淵明に自らを比する一面もあったことを論じた。さらに、中国的隱者論の系譜の中に雲井を位置づけることを試みた。

第2章では長州藩士高杉晋作を取り上げ、高杉が上海渡航を境に詩中に「狂」字が発現することに着目し、高杉詩における「狂」「狂者」「狂拳」の意味を検討した。そして晩年労咳を病んで「狂者」として活動できなくなった際の詩に隠逸を余儀なくされた高杉の詩想の展開を明らかにした。

第3章では薩摩藩士西郷隆盛の漢詩を取り上げた。幕末期における二度の流刑、及び明治二年から五年の鹿児島

隠棲時代の詩作などを取り上げ、西郷が志士として活動する一方で、『莊子』的な隱者の世界にあこがれ、その世界こそが自らの希求する場であったことを論じた。

以上、第1章から第3章までは、中国的隱者論の展開として志士たちの漢詩にアプローチした点で、ひとつのまとまりを形成している。『論語』微子篇において隱者たちと相容れず最後まで時勢に抗った孔子、病にたおれ小隠せざるを得なかった者、時勢とともに流れながらも心は隱者としてある大隱。この三つの類型は同じく『論語』微子篇の「殷の三仁」にもつながる。

※

第4章では桜田門外の変・坂下門外の変などに参加した水戸志士たちの漢詩を取り上げ、「狂拳」を行った志士たちが詩作の中で何をうたいあげたのかを論じた。そして、彼らが大義ある行為として位置づけていた「狂拳」も、当時の常識にあつては単なるテロ行為（暴力）にすぎないことは彼ら自身も自覚しており、その「狂拳」を「公」のための「忠」であり、それは「私」である父母（妻子）への「孝」と相反するものであることの矛盾の中で葛藤していたことを明らかにした。

第5章では土佐藩士武市瑞山を取り上げた。文久二年、土佐勤王党党首として京都において多くの「狂拳（天誅）」を指揮した彼は、「狂拳」を行うのに『春秋左氏伝』に見える「權」という概念を用いた。本章では「狂拳」と「權」の関係を、吉田松陰の『講孟余話』などを手がかりとして明らかにした。

以上、第4章・第5章は「狂拳」の正当化という問題から、「公私」「忠孝」「權」などの諸概念に論究し、志士たちの心根にそれがどのように作用し、そしてどのような作詩上の表現となっていたのかを明らかにした。

※

続く第6章から第8章では西南戦争以後のトピックを取り上げた。ここでは自由民権運動期に立志社の機関誌に取り上げられた雲井龍雄関連記事、及び同時期に忽然と現れた「棄兇行」について論じたほか、雲井と同じ東北出身の陸羯南の明治一〇年代の詩想について論じた。

第6章では明治三年に処刑された雲井龍雄が、明治一〇年に発刊された土佐立志社の機関誌に伝記と漢詩が掲載されるといふ状況に着目し、立志社機関誌の他の論説記事にも考証を加えて、自由民権運動の中で反薩詩を詠んだ雲井が英雄として魅了したこと、及びその理論的メカニズムを明らかにした。

第7章では雲井龍雄の詠んだ漢詩の中で最も人口に膾炙していると言つてよい「棄児行」が贋作であるといふことに着目し、最終句の「残月一声 杜鵑鳴く」の「杜鵑」が象徴するものを中国古典の中から引き出し、贋作者がいかなる思いを「棄児行」に込め、そして雲井龍雄の作として世に出たのかを明らかにした。

第8章では少年期に幕末を向かえた津軽藩士陸羯南の前半生（新聞『日本』創刊以前）の漢詩を取り上げた。ここで注目したのは東北出身者の明治前半期であり、陸にとってそれは前漢の賈誼の生き様に等しかった。そしてそれは伯牙や屈原などへと波及し、彼の詩想を形成していったことを明らかにした。

以上第6章から第8章では、明治十年代の敗者たちに着目し、彼らがその時代にどのような詩想を以て怨嗟の声をあげていたのかを論じた。

## ※

最後の第9章では安井息軒を祖父に持つ安井小太郎が大正七年に教科書として出版した『明治中興詩文』を取り上げた。そして、志士たちが詠んだ漢詩の技巧や詩想などに論及しつつ、安井がそこから何を読み取り、何を大正期の若者たちに伝えようとしていたのかを明らかにした。

## ※

本書で特に注目したのは上記した「隱逸」「狂」「公」「私」「忠」「孝」「権」などのキーワードに集約される。これらは以下のようにまとめることができる。すなわち、内憂外患と称される状況の中にあつて、それでも事を為さねばならないと感じた者たちは旧来の常識の中にある「内」側の者たちから「狂者」と呼ばれることも厭わず、自ら「狂者」と名のつて「狂拳」を行う。「狂拳」を行う者たちにとって、それは最終的な「義」を勝ち取るための「権」に他ならなかったが、彼らは自らの「狂拳」が「公」であり、それが主君への「忠」であると自認していたからこ

その「義」であった。そのため「私」である所の父母妻子は切り捨てるべきものとして存在したが、この「孝」は主君への「忠」と両輪を為すが故に、詩中にあるのは「公」のために「私」をないがしろにせざるを得ない自分へのジレンマとして、よく表現されるものであった。そして、このような心根を彼らは「丹心」「赤心」と呼んだ。

※

最後に志士たちの詩想が詩上においてどのような形で言語化したかもまとめてみたい。

本書で最も注目した技巧的な面としては、まず詠史詩が挙げられる。そもそも漢詩が詠めるということは、中国古典に造詣が深いということでもあり、志士たちが藩校や私塾で得た中国古典の知識を活用した詠史詩は当然の表現形態とも言える。とりわけ中国史上白眉の人物に自らをオーバードラップさせたものに秀逸なる作品が多い。志士たちが自らを比した中国史上の人物としてよく見られるものに、蘭相如・張良・賈誼・陶淵明・顔真卿・文天祥などが挙げられ、また敵対する者としては秦の始皇帝や董卓などが挙げられる。

今一つは花鳥風月などを詠み込ながら、それらが持つメタファーを駆使した詩が多いことを取り上げた。先に示した「丹心」「赤心」などが「紅葉」に喩えられたり、清廉潔白な心が「雪」に喩えられたり、天皇を「太陽」に、將軍を「月」に、黒船を「鯨」に喩えたりする例も示した。その他、ホトトギスやウグイスが詩中に登場した場合の解釈の広がりについても論及した。

## 二 今後の課題と展望

次に構想はあったものの、本書では取り上げることのできなかつた課題をいくつか提示し、今後の展望について述べておきたい。

一つ目の課題は西南戦争にそれぞれの立場で関与した谷干城（土佐藩）・小倉処平（飢肥藩）・雲井龍雄（米沢藩）の三者三様の思考の精査である。谷は熊本鎮台司令長官として西郷軍の攻撃から熊本城を死守し、小倉は西郷軍の

飢肥隊として官軍と交戦し、そして雲井は死してなお反明治政府の精神的支柱として存在していた（本書第7章）。彼らはいずれも安井息軒の弟子であり、若かりし頃その薫陶を受けていた点に着目することによって、安井が弟子たちに授けたものの核心に触れられるのではないかと考えている。ただ現段階では小倉の資料が乏しく、今後の課題とせざるを得なかった。

二つ目の課題は本書第9章で記した『明治中興詩文』以降にまとめられた維新志士の漢詩集に対する編纂意図の変容に関する問題である。具体例を二つ示しておこう。まず昭和十三年に小泉芝三が著した『維新志士 勤王詩歌評釈』<sup>\*1</sup>が興味深い。日中関係が危うくなっていた当時、「勤王」という語が戦時下において改めて問い直されていたのであろう。中山小十郎の序文には「国家意識」「尊王精神」「挺身奉公」などの語が見られ、志士たちの詩歌が時局に合わせて解釈されるように誘導される。<sup>\*2</sup>次に昭和一八年に木下彪が著した『明治詩話』が挙げられる。この書は上巻の四〇六において幕末維新期の志士たちの漢詩を取り上げている。その冒頭で木下は

王政復古を期して国事に奔走した数多くの志士の中、殊に傑出した人物は、殆ど復古の業成るを見ずして中途に斃れた。就中、吉田松陰、高杉東行、久坂玄瑞、大村益次郎、橋本景岳、坂本龍馬の如きは、実に当時第一流の人材であった。其の後明治の新朝廷に重きを成した木戸、大久保の如きは、之に雁行する器だつたのであるが、其の後僅々十年の間に、広沢、木戸、西郷、大久保、相尋で斃れ、其の外佐賀、熊本、秋月、萩、鹿兒島と、次々に起つた騒乱に、天下有為の材は殆ど其の過半を喪失し、一部は草莽に隠れてしまひ、時代は早くも伊藤、山縣以下その人物材幹に於て、到底當時の二三流に過ぎなかつた者の担当する所となつたのである。

と述べてゐる。

私は明治初期の風雲に出頭没頭した多くの人物の事迹並に其の詩藻に就ては常に深い興味を持つてゐる。而し

て之等の人物は皆旧藩時代士族の教育を受けて経史詩文の素養を積み、吟詠を能くしない者は殆ど無かつたのであるが、素より事功を以て伝ふべき人々ゆえ、区々の文字の如きは其の湮滅に委せられ、今に於て之を捜求することは容易でないのである。所謂維新三傑の詩の如きは、好かれ悪かれ多く人口に膾炙してゐるが、有為の材を抱きながら数奇不運に終つた人物の作に至つては殆ど世に知られてゐない。今ここに之等の詩を伝へて、其の沈潜した幽光を顕はすことも亦徒事では無いと思ふ。

と述べて「経史詩文の素養を積」んだ志士たちの詩文に光を当てて顕彰するという、このままとまりの意味を論じている。このことは『維新志士 勤王詩歌評釈』『明治中興詩文』がそれぞれの立場で志士たちの漢詩をままとめていることがわかる。これは当時にあつてそれぞれの読み手が想定された上でのままとめられ方であり、読まれ方の変容という点で興味深い。

三つ目として、杜鵑と対を為す鶯の検討がある。鶯は本書第2章で高杉の絶命詩の中でも言及したように、「覚醒を促すもの（春の訪れを告げるといふ面からの派生）」としての要素がある。高杉の場合、隠睡（隠者としての眠り）から狂者への覚醒を促すものとして鶯が用いられていた。これについては用例がなかなかそろわず現在に至っており、今後この点の用例を収集し解析していきたいと考えている。

この他、志士の個別的考察としては、頼三樹三郎（一八二五～五九）や武田耕雲斎（一八〇三～六五）・藤田小四郎（一八四二～六五）なども考えてはいたが、手つかずの状態にある。また、中国思想的志向からの解析に専心するあまり、日本史分野における先行研究のカーブがおろそかになってしまったことは否めない。本書の最も弱点とする所である。

以上、課題はまだ山ほど残っているが、本書を以て一つのままとまりとしてみなせる程度には至つたと思うので、識者の御叱正を賜りたく刊行することとした。

いずれ校訂・加筆し、改訂版を出せればと思つている。

\*1 筆者の手元にあるものは「陸軍省推薦 昭和十三年九月第七九貳号」と銘打たれ、著者は立命館大学教授小泉琴三で、立命館出版部から昭和一四年一月三〇日に刊行された第三〇版（初版は昭和一三年五月二〇日）である。

\*2 中川小十郎が序文をやや長きにわたるが紹介しよう（引用文中の傍線は筆者による）。

明治維新に際し著しく昂揚された国家意識は、遂に燎原の火の如く、尊皇攘夷の運動に進んだのである。尊皇は佐幕に対する国内的な意味であり、攘夷は開国に対する対外的な政策を意味したが、其基調とするところは、ともに肇国以来培はれ来つた尊皇精神であり、又祖国愛であつた。それは言ふまでもなく純なる献身的精神であつて、そこに幾多英雄的な国民性の美しさを顕現したのである。維新志士の詩歌を繙くときに、惻々として胸を打つところのものは、その多くの作品を一貫して流れるところの、この精神であつて、国家のためにその一身を殉じ、今日に死して将来に生きんとする、勤皇精神の発頭に外ならぬのである。

今回の日支事変を契機として再び著しく昂揚された挺身奉公の観念は、取りも直さず明治維新に於ける幾多志士の眞精神を承継するものである。今日、国内に滂薄する我等臣子本分の姿に直面するとき、何人と雖も我帝国に對し奉り、限りなき忠誠の念と、又同胞に對する深い敬愛とを禁じ得ないのである。明治維新の大業は皇政の復古に向つて驀進することであつたが、今日の事業は更に東洋の天地に於て新世界を創造すべき皇謨の恢弘であつて、その難事たること前者と同日の論でない。

思ふに、今事変勃発以來既に一年有半、精銳皇軍の赫々たる武勲はいふまでもないが、或は斃れて靖国の神となり、或は傷き、或は病きて、病床に身を養ふ勇士諸君の上に、嘗ては維新の志士たちが具現した崇高なる殉国の勇姿を、髣髴として現前に思ひ浮べ、今更に感激の念に堪へがたいものがある。

私は全国の傷痍壯士諸君に向つて、我学園全員の感謝の誠意を捧げんがために、茲に本書一本を各位の座右に贈呈する。維新志士の詩歌に横溢する精神と気魄の純なるものが、傷痍壯士諸君の同情同感を惹起し、その詩歌を介して、更に崇高なる臣民誠忠の自覚にまで進み行かれんことこそ、私のひそかに希ふ所である。

昭和十四年一月 立命館総長 中川小十郎





## あとがき

筆者が維新志士の漢詩の研究を始めたのには、ちよつとしたきっかけがあった。もう三十数年も前のことである。かつて九州大学文学部の助手をしていた時、徳島大学教養部の中国文学の公募があった。自分の中国哲学という専門は棚に置いて応募した所、『淮南子』を説話解釈を通して解析するという方法論が目にとまったらしく、幸運にも教養部講師（中国文学）に着任させていただくこととなった。

ところが、着任後に事件は起<sup>き</sup>こる。当時、徳島大学教養部では新任の教員に講演をさせるという慣例があり、その話を伺った際に「講演は中国文学でお願いします」と言われたのである。もう昔のことなので隠さずに言うと、人事選考の時に私が中国哲学を専門としていることで、そもそも不資格者であるとの意見もあったらしい（自分も同意見である）。そのため、ちゃんと中国文学もできるということを証明したかったのである。「わかりました」とは言ったものの途方にくれた。

その時私の頭の中に浮上したのが院生時代にアルバイトをしていた予備校の漢文のテキストにあった雲井龍雄の「棄児行」であった。予備校で古文・漢文を担当していた私は、少しでも授業の訳に立てばと古人ゆかりの地をよく訪れており、雲井の故郷米沢にも足を運び、郷土史家の方にお話を聞かせていただいたり（その時に「棄児行」が贋作であるという情報も得た）、雲井の詩集も購入したりしていた。日本漢詩ならば中国文学の展開として認識してもらえらるだろうという考えと、私の着任を疑問視しておられた先生への挑戦という思いもあった。

ひと月を雲井研究に集中させ、無事講演を終えた後は、水島多喜男先生から嶋岡晨氏の『志士たちの詩』を紹介していただいたり、平井松午先生から家永三郎氏の『海南新誌・土陽雑誌・土陽新聞』を紹介していただいたり。そして故石踊胤央先生から多くの事を教えていただいた。

以降、三年に一本ぐらいのペースで論文を書き、現在に至っている。

当初は中国における隱者論の日本的展開ということで勧めていたが、安井小太郎に触れたり、水戸志士・武市瑞山と勧めていく過程の中で、「公私」「忠孝」論と「狂」をめぐる諸問題にも関わっていくようになった。

ただ、本研究が雲井龍雄からスタートしただけあって、研究が広がりを持ち始めた後も、個人的には常に雲井龍雄と伴にあった。米沢を訪れることも五回に及んだ（訪れた際に食べねばならないものも決まっている）。

雲井龍雄との邂逅に感謝したい。そして、本研究を応援してください。ありがとうございました。ありがとうございます。

最後に、本書の出版に際して御尽力いただいた広島大学附属図書館長の川島優子教授（広島大学副学長）、及び関係職員の方々に心より感謝申し上げます。

## 主な参考文献

### 雲井龍雄関係

- 安藤英男 『雲井龍雄研究伝記篇』 (明治書院、一九七二年)  
安藤英男 『雲井龍雄研究詩篇』 (明治書院、一九七三年)  
安藤英男 『雲井龍雄詩伝』 (明治書院、一九六七年)  
安藤英男 『新稿雲井龍雄全伝』 (光風社出版、一九八一年)  
色川大吉 『自由民権の地下水』 (岩波書店、一九九〇年)  
家永三郎 『海南新誌・土陽新聞・土陽雑誌』 (弘隆社、一九八三年)  
明治史料研究連絡会編 『民権論からナショナリズムへ』 (御茶の水書房、一九七七年)  
青木正兒 『子規と郭公』 (春秋社 『青木正兒全集 (第八卷)』 所収、一九七一年)

### 高杉晋作関係

- 奈良本辰也・堀鉄三郎 『高杉晋作全集』 (新人物往来社、一九七四年)  
奈良本辰也 『高杉晋作』 (中公新書、一九六五年)  
宮永 孝 『高杉晋作の上海報告』 (新人物往来社、一九九五年)  
内田伸 『大楽源太郎』 (風説社、一九七一年)  
山口県教育会 『吉田松陰全集』 (岩波書店、一九四〇年)  
福本義亮 『訓註吉田松陰詩歌集』 (マツノ書店、一九九九年)

中川清太郎『西山遺詩』（写本）

一坂太郎編・田村哲夫校訂『高杉晋作史料』（マツノ書店、二〇〇二年）

福本義亮『久坂玄瑞全集』（マツノ書店、一九三四年）

### 西郷隆盛関係

西郷隆盛全集編集委員会編『西郷隆盛全集』（大和書房、一九八〇年）

山田濟斎編『西郷南洲遺訓』（岩波文庫、一九七九年）

『東京日々新聞』（日本図書センター、一九九三〜九五五年）

福沢諭吉『明治十年丁丑公論・瘦我慢説』（講談社学術文庫、一九八五年）

鈴木範久訳『代表的日本人』（岩波文庫、一九九五年）

田中惣五郎『西郷隆盛』（吉川弘文館、一九八五年）

猪飼隆明『西郷隆盛』（岩波新書、二〇〇六年）

安藤英男『西郷隆盛』（学陽書房、一九九七年）

森茂暁『後醍醐天皇』（中公新書、二〇〇〇年）

笠原英彦『天皇親政』（中公新書、一九九五年）

山崎道夫・和田正俊『叢書日本の思想家 吉田松陰・西郷南洲』（明德出版社、一九七九年）

### 水戸志士関係

景山正治『志士詩文集』（小学館、一九四二年）

『維新草莽詩文集』（新学社、二〇〇七年）

高須芳次郎編『水戸学全集』（日東書院、一九三三年）

- 猪口篤志『新釈漢文大系四五・四六日本漢詩（上下）』（明治書院、一九七二年）
- 今井宇三郎・瀬谷義彦・尾藤正英『日本思想大系五三水戸学』（岩波書店、一九七三年）
- 相良享・松本三之介・源了圓『江戸期の思想家たち（下巻）』（研究社出版、一九七九年）
- 古田光・子安宣邦『日本思想史読本』（東洋経済新報社、一九七九年）
- 久野勝弥『他藩士の見た水戸』（水戸史学会、一九九一年）
- 名越時正『水戸学の達成と展開』（水戸史学会、一九九二年）
- 坂田新『江戸漢詩選4志士』（岩波書店、一九九五年）
- 但野正弘『水戸学烈公と藤田東湖「弘道館記」の碑文』（錦正社、一九九七年）
- 但野正弘『藤田東湖の生涯』（錦正社、一九九八年）
- 吉田俊純『水戸学と明治維新』（吉川弘文館、二〇〇七年）
- 湯浅邦弘編著『江戸時代の親孝行』（大阪大学出版会、二〇〇九年）

### 武市瑞山関係

- 福本義亮編『久坂玄瑞全集』（マツノ書店、一九三四年復刻）
- 嶋岡晨『土佐勤皇党始末』（新人物往来社、一九七八年）
- 近藤啓吾『講孟割記（上下）』（講談社学術文庫、一九七九年）
- 松岡司『土佐勤王党首領 武市瑞山』（私家版、一九八一年）
- 入交好脩『武市半平太』（中公新書、一九八二年）
- 小林和幸『谷干城』（中公新書、二〇一一年）

## 陸羯南関係

『陸羯南全集』（みずず書房、一九八五年）

高松亨明『陸羯南詩通釈』（津軽書房、一九八一年）

## 安井息軒関係

黒江一郎『安井息軒』（日向文庫八・宮崎銀行刊、一九五三年）

長田泰彦『注解北潜日抄』（さきたま出版会、一九八八年）

町田三郎『江戸の漢学者たち』（研文出版、一九九八年）

## その他

嶋岡晨『志士たちの詩』（講談社現代新書、一九七九年）

小泉菱三『陸軍省推薦 維新志士勤王詩歌評釈』（立命館出版部、一九三八年）

坂田 新『江戸漢詩選4「志士」』（岩波書店、一九九五年）

『近代浪漫派文庫1 維新草莽文集』（新学社、二〇〇七年）

守屋美都雄『荊楚歳時記』（平凡社・東洋文庫、一九七八年）

今村与志雄『酉陽雜俎』（平凡社・東洋文庫、一九八一年）

吉田常吉『安政の大獄』（吉川弘文館、一九九六年）

青山忠正『幕末維新奔流の時代』（文英堂、一九九八年）

片山清一『資料・教育勅語』（高陵社書店、一九七四年）

水田紀久・頼惟勤『中国文化叢書 日本漢学』（大修館書店、一九六八年）

明治刊本

- 城兼文『有節録初篇』（藤井文正堂、明治二年）
- 岡本楠太郎『悲愴慷慨劍舞詩集』（藤森岩次郎、明治二五年）
- 熱血処士『名士と詠草』（松雲堂、明治三三年）
- 城兼文稿・芳賀矢一校『殉難前後草』（富山房、明治四五年）
- 浅塾晁斎『雲井龍雄詩文集』（写本、明治八年）
- 有田正夫『雲井龍雄事蹟』（有田正夫、明治一六年）
- 麻績斐・桜井美成『東北偉人雲井龍雄全集』（東陽堂、明治二七年）
- 桜井美成『雲井詩集』（須佐権平発行、明治二七年）
- 渡辺修二郎『奇傑雲井龍雄』（大学館、明治三三年）
- 福田恒久『明治形勢一斑』（万笈閣、明治一一年）
- 鹿児島県編集『丁丑乱概』（鹿児島県蔵版、明治一二年）
- 鹿児島県編集『丁丑乱概』（明治一二年）
- 黒龍会編『西南記伝』（黒龍会本部、明治四二～四四年）
- 吉井弁次郎『活氣之焰』（吉岡書籍店、明治二四年）
- 大田才次郎『新世説』（有則軒、明治二五年）
- 坂下亀太郎『幼年立志編』（博文館、明治二七年）
- 西村富次郎『日本偉人伝』（弘文堂、明治三〇年）
- 志村作太郎『消閑漫録』（興雲閣、明治三一年）
- 安井息軒『故旧過訪録・遊従及門録』（安井小太郎、明治三〇年）
- 鬼雄外史『偉人百話』（いろは書房、明治三二年）



干河岸貫一『近世百傑伝』（博文堂、明治三十三年）

熱血処士『名士と詠草』（松雲堂、明治三十三年）

俣野節村『偉人の言行』（大学館、明治三十三年）

文学同志会『活学叢書』（文学同志会、明治三四～三五年）

桜樹山人『武士の鑑』（川流堂、明治三十六年）

木村小舟『美しき自然』（嵩山房、明治四一年）

樋口二葉『日本怪傑伝』（晴光館、明治四二年）

杉原夷山『陽明学精神修養談』（大学館、明治四二年）

芝松南『忠魂義胆武道の誉』（精華堂、明治四三年）

外務省通商局『清国事情（第1・2輯）』（外務省通商局、明治四一年）

遠山景直『上海』（遠山景直、明治四〇年）

高須梅溪『百傑スケッチ』（博文館、明治四三年）

児玉花外『紅噴隨筆』（岡村盛花堂、明治四五年）

川口海三『日本偉人譚』（文陽堂、明治四五年）

## 中国刊本

文淵閣四庫全書『揚子雲集』

文淵閣四庫全書『本草綱目』

文淵閣四庫全書『禽經』

文淵閣四庫全書『華陽国志』

文淵閣四庫全書『聞見録』

- 四部備要『蜀王本紀』
- 王福祥・汪玉林・吳漢櫻編『日本漢詩繕英』（外語教学与研究出版社、一九九五年）
- 劉覲・馬沁編『日本漢詩新編』（安徽文芸出版社、一九八五年）
- 程千帆・孫望『日本漢詩選評』（江蘇古籍出版社、一九八八年）

## 初出一覧

序章 ・ 幕末明治期の漢学者 — 変動期の知識人研究序説 —

渭陽会編『東洋の知識人 — 士大夫・文人・漢学者』（朋友書店、一九九五年）

第1章 ・ 雲井龍雄研究序説 — 慷慨と隠逸をめぐって —

徳島大学教養部紀要（人文・社会科学）二八、一九九三年

第2章 ・ 高杉晋作の詩想 — 「狂」と「儉生」をめぐって —

言語文化研究徳島大学総合科学部五、一九九八年

第3章 ・ 西郷隆盛の詩想 — みずからへのまなざし — 言語文化研究徳島大学総合科学部一一、二〇〇四年

第4章 ・ 水戸志士の咆哮 — 狂拳をささえるもの — 書法漢学研究五、二〇〇九年

第5章 ・ 武市瑞山の詩想 — 権道 是か非か — 学芸国語国文学五〇、二〇一八年

第6章 ・ 自由民権運動下の雲井龍雄の一側面（上下） — 『土陽新聞』掲載記事をめぐって —

徳島大学国語国文学六・七、一九九三・九四年

第7章 ・雲井龍雄と「棄児行」―「杜鵑」解釈をめぐる― 書法漢学研究二、二〇〇八年

第8章 書き下ろし

第9章 ・安井小太郎『明治中興詩文』について 徳島大学国語国文学二〇、二〇〇七年

終章 書き下ろし

著者略歴

有馬 卓也（ありま たくや）

1959年（昭和34年）鹿児島生まれ。

博士（文学）（九州大学）の学位取得。

徳島大学大学院教授の後、現在広島大学大学院教授。専攻は中国  
古代思想史、近世近代日本漢学。

著書に『淮南子の政治思想』（汲古書院、1998）、『近世阿波漢学  
史の研究 古学者高橋赤水』（中国書店、2007）、『岡本韋庵の北方  
構想』（中国書店、2023）など。

表紙イラスト 有馬 陶  
題 字 有馬 祐子

## 志士たちの詩想

2024年12月20日 発行

著者 有馬 卓也

発行者 広島大学出版会

印刷所 株式会社ニシキプリント

ISBN 978-4-903068-74-9 C3010〈電子版〉

